

多賀城市文化財調査報告書第 144 集

多賀城市内の遺跡 2

—平成 31 年度ほか発掘調査報告書—

新田遺跡 高崎遺跡 山王遺跡 市川橋遺跡
安楽寺遺跡 八幡沖遺跡隣接地

令和 2 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡をはじめ、多くの埋蔵文化財包蔵地が所在し、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な文化財を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成30年度と平成31年度に国庫補助事業として実施した個人住宅建築等に伴う25件の発掘調査の成果を収録したものです。その中で、山王遺跡では、多賀城南面に広がる古代都市の一角を調査し、道路網のひとつである南1道路跡を確認しました。また、市川橋遺跡では10世紀後半から11世紀前半頃の河川跡を調査し、出土した馬の頭骨から当時の動物利用の実態に迫る成果が得られました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の新たな歴史の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和2年3月

多賀城市教育委員会
教育長 麻生川 敦

例　　言

- 1 本書は、国庫補助事業による平成30年度に実施した発掘調査7件と、平成31年度に実施した発掘調査18件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では経緯度の基準を世界測地系で表示している。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いているが、震災以前の座標値と整合させるために、再測量の成果に基づき、震災以前に行った調査については東に約3m、南に約1mの補正をかけている。なお、図版中の世界測地系数値における小数点以下を省略して表示しているが、有効数字は小数点以下3桁である。
- 4 挿図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 6 執筆担当は、下記のとおりである。図版作成等は各執筆担当者と遺物整理員が行った。また、遺物の写真撮影は村松稔、大木丈夫、杉山祐一が、本書の編集は村松が行った。

I 佐藤純平、II～V 村松、VI 杉山、VII 赤澤、VIII 千葉、IX 赤澤、X～XII 村松、XIII～XV 杉山、XVI 千葉、XVII 村松、XVIII 赤澤、XIX 杉山、XX・XXI 赤澤、XXII 千葉、XXIII・XXIV 大木
- 7 新田遺跡第127次調査出土の縄繩文土器と黒曜石製の石器については名取市教育委員会 相澤清利氏から、市川橋遺跡第98次調査の動物遺体については奥松島縄文村歴史資料館館長 菅原弘樹氏から、古代の施釉陶器については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 尾野善裕氏から、それぞれご教示を得た。
- 8 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1	XIV	高崎遺跡第120次調査	46
II	新田遺跡第127次調査	3	XV	高崎遺跡第121次調査	47
III	新田遺跡第129次調査	22	XVI	高崎遺跡第122次調査	48
IV	新田遺跡第130・131次調査	28	XVII	山王遺跡第208次調査	51
V	新田遺跡第132次調査	29	XVIII	山王遺跡第209次調査	66
VI	新田遺跡第133次調査	30	XIX	山王遺跡第212次調査	78
VII	新田遺跡第135次調査	31	XX	山王遺跡第217次調査	89
VIII	新田遺跡第136次調査	36	XXI	山王遺跡第218次調査	90
IX	新田遺跡第138次調査・山王遺跡第216次 調査	39	XXII	市川橋遺跡第98次調査	94
X	高崎遺跡第116次調査	42	XXIII	安楽寺遺跡第2次調査	114
XI	高崎遺跡第117次調査	43	XXIV	八幡沖遺跡隣接地	117
XII	高崎遺跡第118次調査	44			
XIII	高崎遺跡第119次調査	45			

調査要項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 小畠幸彦（～令和元年9月30日）
教育長 麻生川敦（令和元年10月1日～）
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター
所長 佐藤良彦（～平成31年3月31日）
所長 伊藤文昭（平成31年4月1日～）
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
主幹 武田健市（～平成31年3月31日）
副主幹 村松稔 千葉孝弥 赤澤靖章
研究員 大木丈夫 杉山祐一
調査員 李スルチヨロン（～令和元年12月31日）
技師 畠山未津留（～平成31年3月31日）
佐藤純平
- 4 調査従事者 阿部正治 安藤美喜子 伊藤幸夫 内田節子 内田正樹 尾形潤 工藤正好
佐藤長次 佐藤道子 島村純子 菅原正義 鈴木優子 鈴木真由美 関内久子
瀬戸口弘行 瀬戸嶋修 武田進 谷川衛 但野順子 二本松由紀 藤田敏朗
藤村孝行 古瀬律子 本田雄一 三上嘉昭
- 5 整理従事者 石垣玲子 浦山紀以子 川名直子 菊池あかね 佐々木直美 佐藤里美
千葉貴久江 秦千尋 堀川紀子 宮城ひとみ

凡例

1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S A : 柱列跡 S B : 掘立柱建物跡 S D : 溝跡 S I : 竪穴住居跡 S K : 土壙

Pit : 柱穴及び小穴 S X : その他の遺構

2 奈良・平安時代の土器の分類記号は「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」(多賀城市教育委員会 2003) に従った。詳細は下記のとおりである。

(1) 土師器坏

A類 : ロクロ調整を行わないもの

B類 : ロクロ調整を行ったもの

B I 類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II 類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III 類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV 類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V 類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I ・ B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

(2) 土師器甕

A類 : ロクロ調整を行わないもの

B類 : ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器坏

I 類 : ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II 類 : ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III 類 : ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV 類 : ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V 類 : ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I ・ II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

3 瓦の分類は「多賀城跡 政庁跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政庁跡 本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982) の分類基準に従った。

4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1997』1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。当市教育委員会では考古学的な見解を重視し、前者の年代観に従っている。

調査一覧

平成 30 年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第 127 次	多賀城市新田字後 132 番 1	平成 30 年 11 月 5 日～12 月 26 日	58m ²	畠山
2	新田遺跡第 129 次	多賀城市山王字南寿福寺 6 番 1、6 番 4、7 番 1、8 番 1	平成 31 年 2 月 27 日～3 月 19 日	120m ²	村松 李
3	新田遺跡第 130 次	多賀城市新田字西 20 番 3	平成 31 年 3 月 6 日	9 m ²	村松
4	新田遺跡第 131 次	多賀城市新田字西 20 番 6	平成 31 年 3 月 6 日	9 m ²	村松
5	高崎遺跡第 116 次	多賀城市東田中一丁目 403・458 番、高崎字樋の口 82 番	平成 31 年 3 月 7 日	15m ²	武田
6	高崎遺跡第 117 次	多賀城市高崎一丁目 229 番 1	平成 31 年 3 月 5 日	44m ²	武田
7	高崎遺跡第 118 次	多賀城市高崎一丁目 116 番 22	平成 31 年 3 月 6 日	30m ²	武田

平成 31 年度

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査担当者
8	山王遺跡第 208 次	多賀城市山王字前田 10 番 20、山王字前田 10 番 20・22、山王字前田 10	平成 31 年 4 月 10 日～6 月 14 日	584m ²	村松
9	山王遺跡第 209 次	多賀城市山王字山王三区 60 番	平成 31 年 4 月 10 日～6 月 10 日	305m ²	赤澤 佐藤 (純)
10	山王遺跡第 212 次	多賀城市山王字中山王 15 番 5	令和元年 6 月 4 日～7 月 2 日	42m ²	杉山
11	山王遺跡第 216 次	多賀城市山王字三千刈 1 番 1、5 番 1	令和元年 10 月 15 日～11 月 1 日	300m ²	赤澤 千葉
12	山王遺跡第 217 次	多賀城市山王字西町浦 34 番 20	令和元年 9 月 26 日～9 月 27 日	22m ²	赤澤
13	山王遺跡第 218 次	多賀城市山王字中山王 48 番 1	令和元年 12 月 2 日～12 月 18 日	57m ²	赤澤
14	市川橋遺跡第 98 次	多賀城市城南二丁目 3 番 1	令和元年 6 月 5 日～6 月 14 日	15m ²	千葉
15	新田遺跡第 132 次	多賀城市山王字北寿福寺 72 番 3	平成 31 年 4 月 9 日～4 月 10 日	250m ²	村松
16	新田遺跡第 133 次	多賀城市新田字新後 2 番 5	平成 31 年 5 月 9 日	8m ²	杉山
17	新田遺跡第 135 次	多賀城市新田字新後 12 番 7、12 番 8、14 番 14	令和元年 8 月 21 日～9 月 20 日	73m ²	赤澤
18	新田遺跡第 136 次	多賀城市南宮字庚申 228 番、229 番 2、230 番、231 番、295 番 1、298 番、299 番、300 番、301 番	令和元年 8 月 27 日～9 月 7 日	440m ²	千葉
19	新田遺跡第 138 次	多賀城市山王字松島原 1 番 1、2 番、3 番 1、山王字三千刈 1 番 4	令和元年 10 月 15 日～11 月 1 日	200m ²	赤澤 千葉
20	安楽寺遺跡第 2 次	多賀城市新田字堀西 3 番 1 号	令和元年 12 月 9 日～12 月 17 日	50m ²	大木
21	八幡沖遺跡 隣接地	多賀城市宮内 1 丁目 73 番 2	令和元年 12 月 2 日～12 月 6 日	80m ²	大木
22	高崎遺跡第 119 次	多賀城市留ヶ谷一丁目 224 番 1	令和元年 7 月 22 日	10m ²	杉山
23	高崎遺跡第 120 次	多賀城市高崎二丁目 49 番	令和元年 7 月 31 日	48m ²	杉山
24	高崎遺跡第 121 次	多賀城市高崎二丁目 16 番 4	令和元年 8 月 20 日	30m ²	杉山
25	高崎遺跡第 122 次	多賀城市留ヶ谷一丁目 231 番 2、234 番 1、234 番 2、234 番 3、234 番 4	令和元年 9 月 27 日～10 月 11 日	200m ²	千葉

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市的地形は、中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、南東部には海岸線沿いの浜堤上に八幡沖遺跡、浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

山王遺跡は、標高3～4mの微高地に立地し、その範囲は東西約2km、南北約1kmである。これまで弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割、中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。これによって形成されたまち並みからは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいである建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

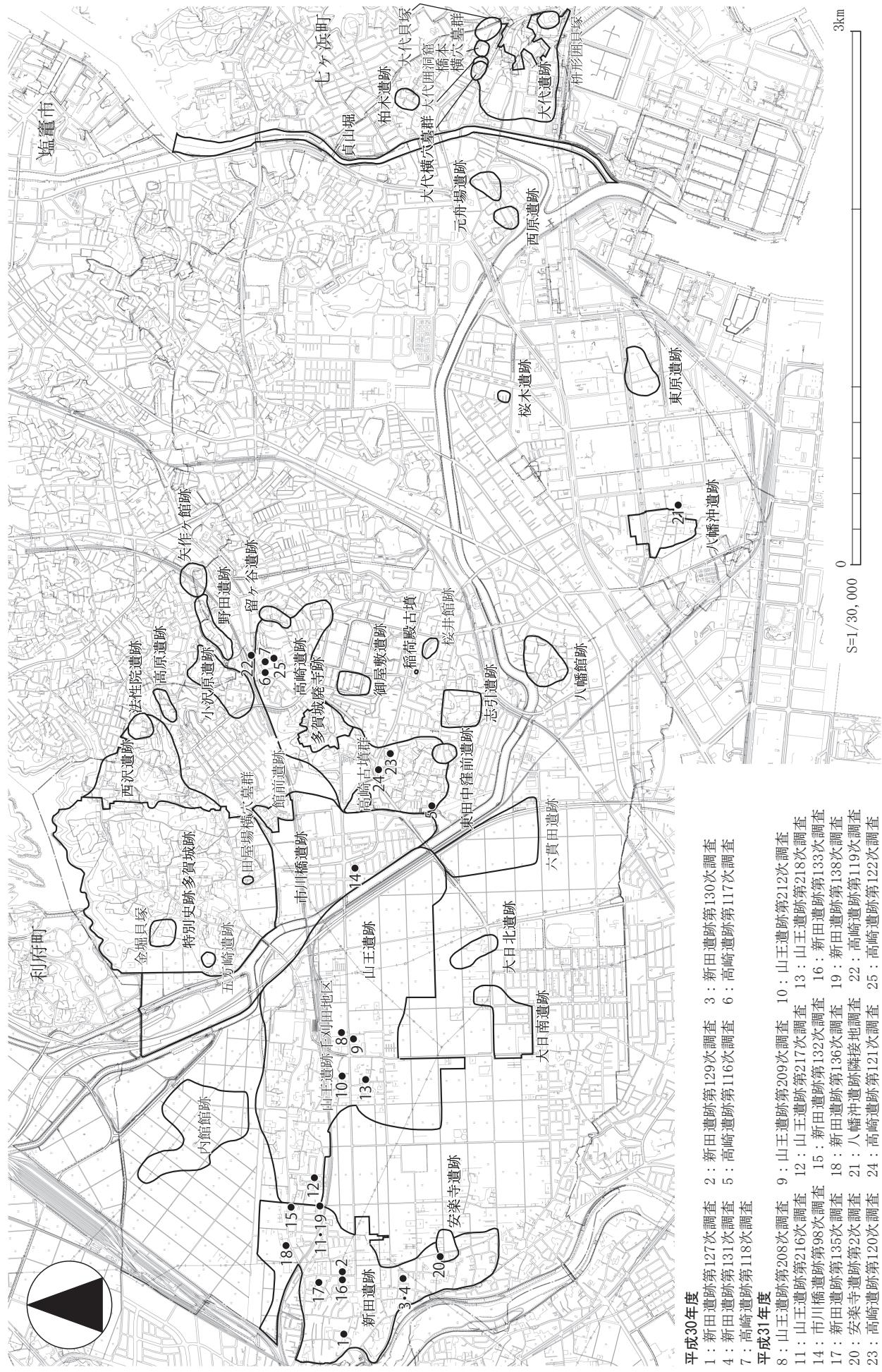
新田遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、その範囲は東西約0.8km、南北約1.6kmである。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画されて屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

市川橋遺跡は、標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmである。多賀城跡南面の広い範囲を占めており、前述した山王遺跡と同様に古代の方形地割に基づくまち並みが形成されている。

高崎遺跡は、低丘陵の西端部に立地し、その範囲は東西約1.3km、南北約1kmである。これまで、古墳時代から近世までの遺構・遺物が発見されている。古代では、多賀城廃寺跡の西側で約60軒の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡などが発見されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で発見され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

安楽寺遺跡は、標高5～6mの微高地に立地し、東西約180m、南北約120mである。古代から中世にかけての遺跡として知られており、寺院跡と考えられている。

八幡沖遺跡は、標高1.9～0.6mの浜堤列上に立地し、東西約280m、南北約280mである。古墳時代の土器埋設遺構や古代の掘立柱建物跡が発見され、江戸時代に機能した区画溝も発見されている。また、古墳時代から近現代にかけての遺物が大量に出土している。



第1図 調査地点の位置

II 新田遺跡第127次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における個人住宅建設に伴う
本発掘調査である。

平成30年8月21日に、地権者より、新田遺跡の北西部に位置する当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、住宅建築の基礎工事の際に地盤改良工事として直径40cmの杭を現地表から深さ10mまで打ち込む内容となっていた。当該地は、西側隣接地で第73次調査、南側隣接地で第86次調査、東側隣接地で第102次調査を実施しており、現地表から約1mで堅穴住居跡や溝跡等の遺構を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、工法変更などで遺跡を保存することができないか協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することとなった。平成30年10月31日に依頼者と地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出手した。

はじめに重機で表土を除去した。8日から作業員によって遺構検出作業を行ったところ、S I 2190竪穴住居跡などの遺構を確認した。以降、図面や写真等、記録を随時作成した。13日からS I 2190の埋土を掘り下げ始めたところ、遺物が多量に出土し始めた。12月5日にはほぼ埋土を除去したが、その後カマドの調査に時間を使い、18日に全容を把握できた。25日には、S I 2190竪穴住居跡の調査を終了し、調査区東壁で確認していたS X2186を検出するため、VI層上面まで掘り下げたところ、S X2186を平面で確認することができた。12月26日に調査を終了した後、調査区の埋め戻しを行い全ての作業を終了した。

2 調查成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

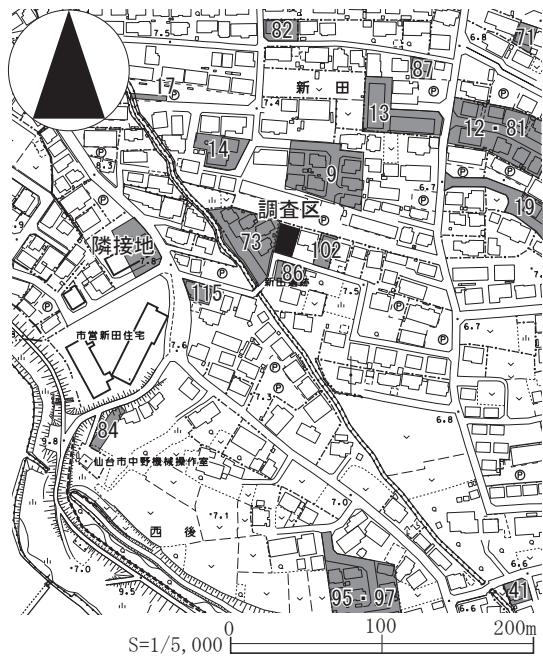
I層：表土で厚さは40～60cmである。

II層：暗褐色(7.5Y 3/4)土。厚さは20～30cmである。この上面でSX2191を検出面した。

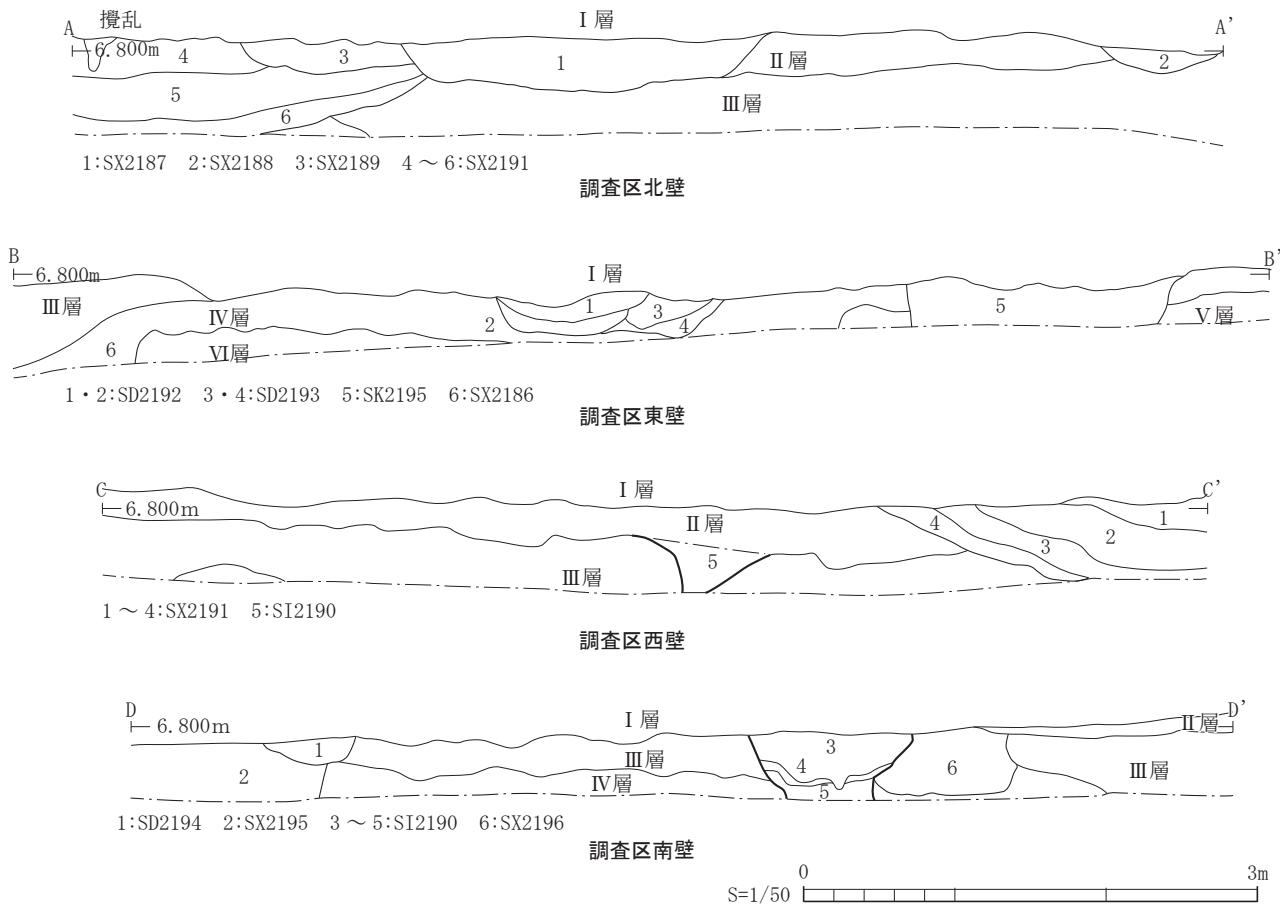
Ⅲ層：調査区の北側から西側にかけて分布する堆積層。にぶい褐色（7.5Y 5/4）土。厚さは50cm以上である。この上面でS I 2190、S D2192・2193・2194を検出した。

IV層：暗褐色（7.5Y 2/3）粘質土でVI層に起因する土が斑状に含む箇所もある。厚さは20～30cmである。

またS X2186の最上層として堆積しているほか、古墳時代中期の土師器高坏の脚部が出土している。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区壁面断面図

V層：調査区の南東側にのみ分布する堆積層。黒褐色（7.5Y 3/1）粘質土。

VI層：黄褐色（2.5Y 5/4）土で、灰色粘質土を斑状に少量含んでいる。最終遺構検出面であり、この上面でSX2186を検出した。

(2) 発見した遺構

今回の調査では、VII層上面とIII層上面及びII層上面で遺構を発見した。以下遺構検出面ごとに述べる。

[IV層上面発見遺構]

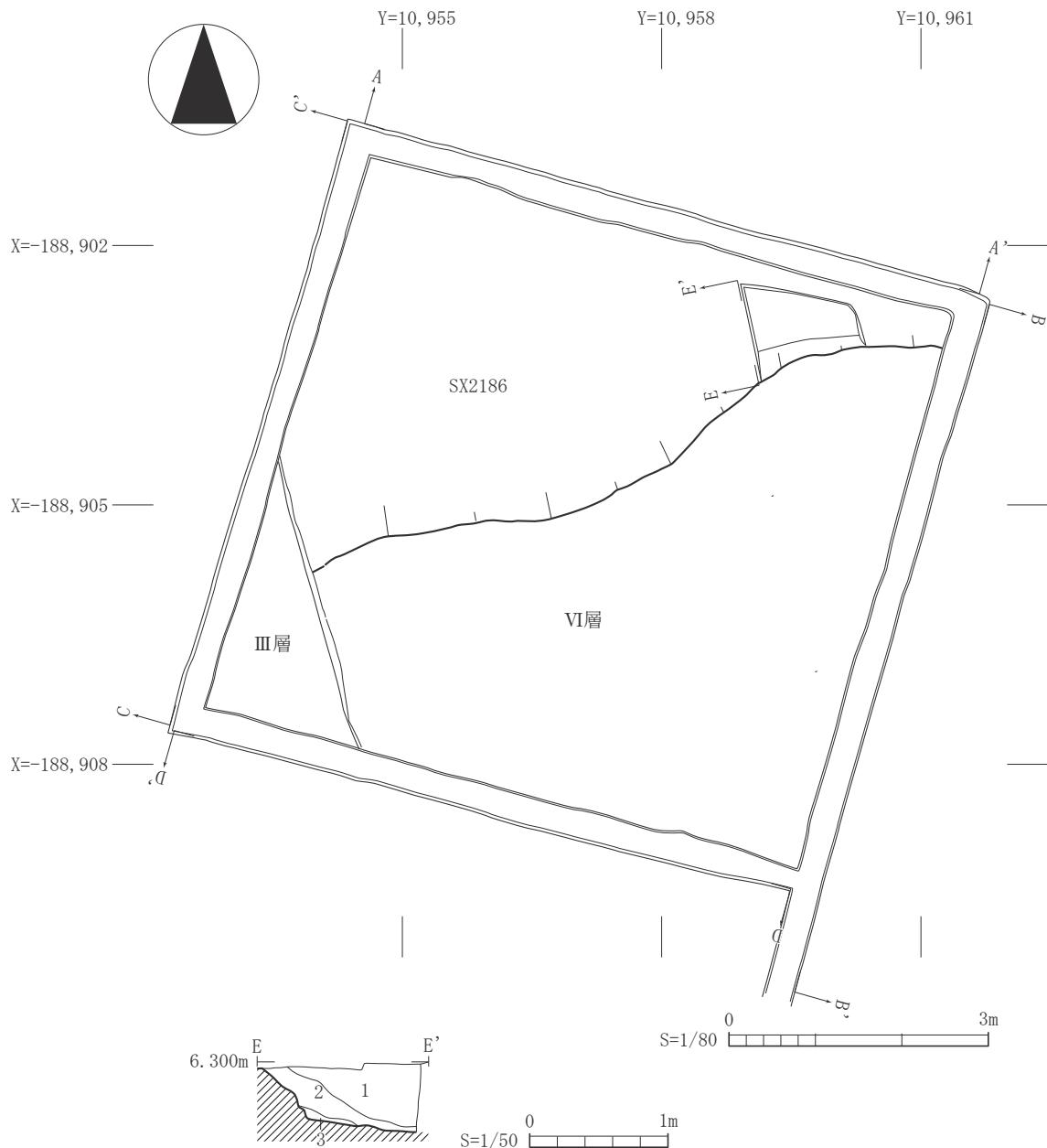
SX2186（第2・3図）

【位置】調査区北側で確認した落ち込みである。

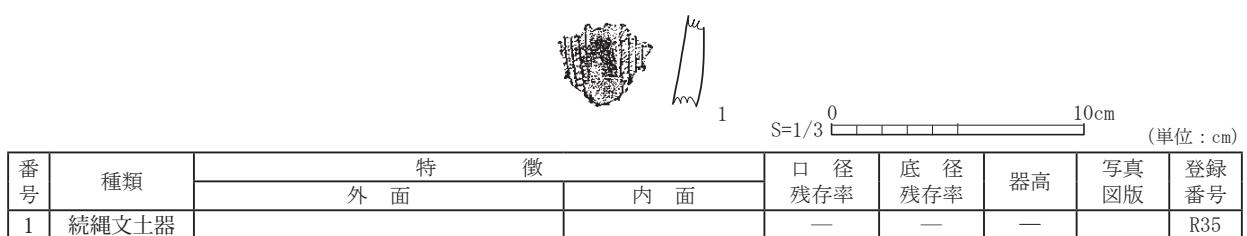
【規模】東西7.6m、南北5.2mの範囲で確認した。埋土の一部を掘り下げ、深さは50cmまで確認した。

【埋土】3層確認できた。1層はIV層と同じ土が流れ込むように堆積している。2層は黒色（7.5Y 2/1）粘質土で、炭化物や少量のVI層に起因する土を斑状に含んでいる。3層は灰色（10Y 4/1）粘質土である。

【遺物】縄文土器（第4図1）が出土している。



第3図 SX2186 平面・断面図



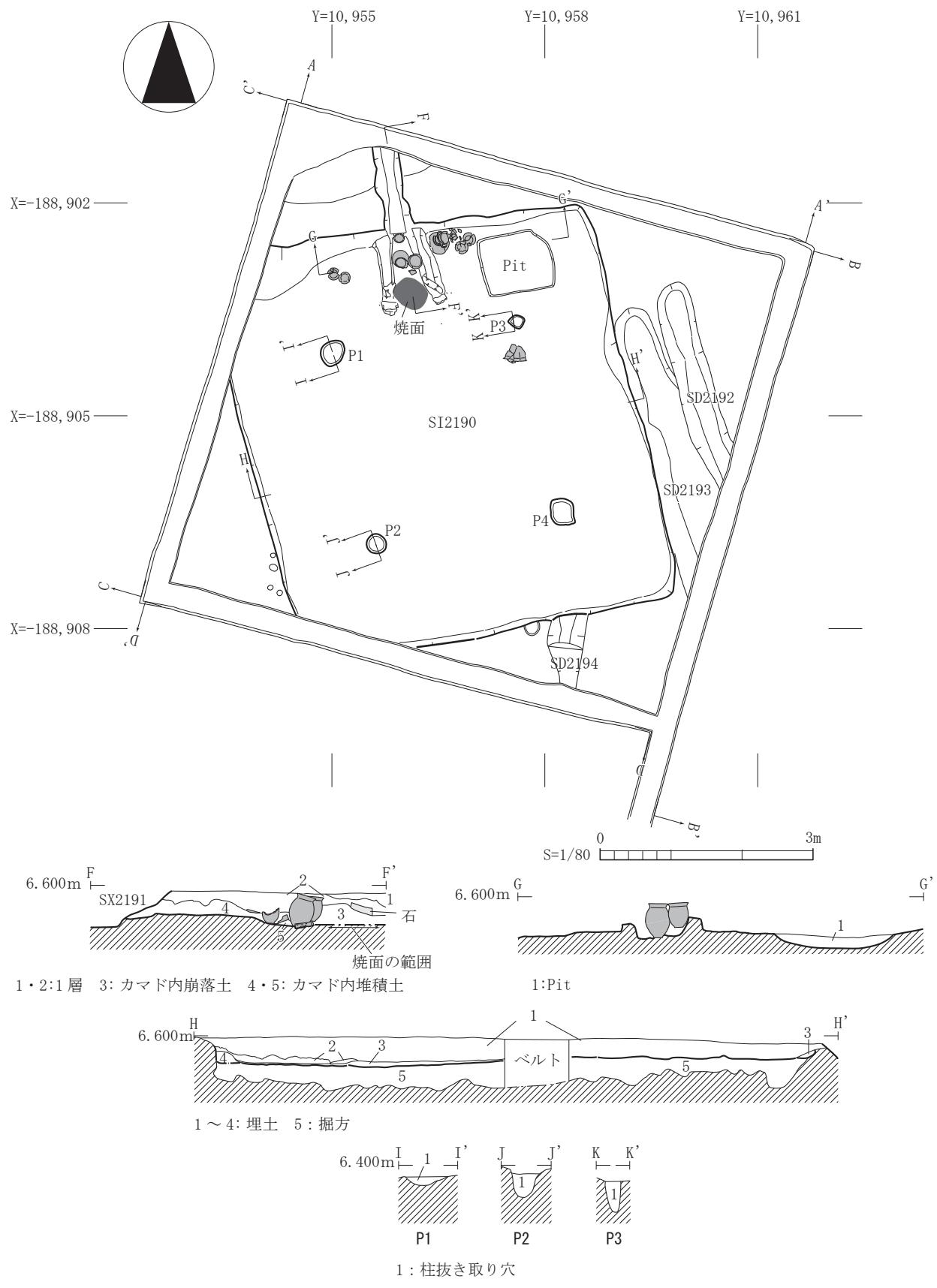
第4図 SX2186 1層出土遺物

〔III層上面検出遺構〕

S I 2190堅穴住居跡（第6図）

【位置】調査区の中央で発見した。

【重複】SD2193・2194と重複しており、これらより古い。



第5図 SI 2190 竪穴住居跡平面・断面図

【遺存状態】 煙道の先端部と北西及び南西角を除き検出しておらず、竪穴住居跡のはば全容が確認できた。

【平面形・方向】 方形である。方向は西辺でみると、北で西に16度偏している。

【規模】 東西約5.9m、南北約5.4mである。

【床面】 固く締まつたオリーブ黄色(5Y 6/3)土の上面を床としている。厚さは12~24cmである。

【壁】 床面から壁面上端までほぼ垂直に立ち上がってい

る。

【カマド】 住居北壁に付設され、煙道及び燃焼部を確認した。規模は、燃焼部最大幅49cm、奥行き1.1m、残存する側壁高は16cmである。側壁部はVI層を削り出してつくられている。また、カマド袖部の端部にそれぞれ構築材とみられる石を確認した（註）。また煙道は長さ1.1m、幅39cm、深さ16cmである。

【付属施設】 カマド東側に浅いPitを確認した。平面形は不整方形で、規模は東西1.0m、南北83cm、深さ10cmである。位置関係から貯蔵穴の可能性が考えられるが、遺物は出土しなかった。

【柱穴】 床面で主柱穴をP1~P4の4基確認した。各柱穴の柱間は平均で2.7m、対角線は3.8mである。いずれの柱穴も抜き取り穴のみ確認でき、平面形は円形もしくは不整形である。平面規模は、P2でみると直径26cm、深さ27cmである。埋土は黒褐色(10YR 3/2)土もしくは暗褐色(7.5YR 3/3)土である。

【遺物】 カマド内からは土師器甕（第7図1~3）のほか支脚（第7図4）が出土している。カマド周辺の床面からは、土師器壺（第8図1~4）・甕（第8図5・6、第9図2）・甌（第8図7）が出土している。床面からは甌（第9図1）が出土している。1層からは、土師器壺（第10図1~6）・甕（第10図7・8、第11図1）・甌（第11図2）・高壺（第11図4・5）、紡錘車（第11図6）、石製模造品（第11図7~9）、石器（第11図10）、縦縄文土器（第11図11・12）が出土している。

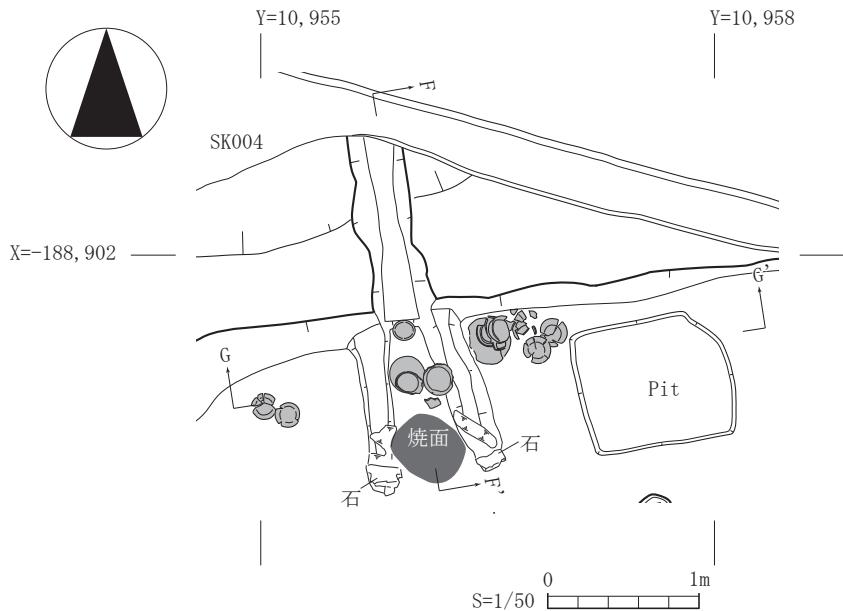
S D2192溝跡（第12図）

【位置】 調査区の東側で確認した。南北方向の溝跡である。

【重複】 S D2193と重複しており、これより新しい。

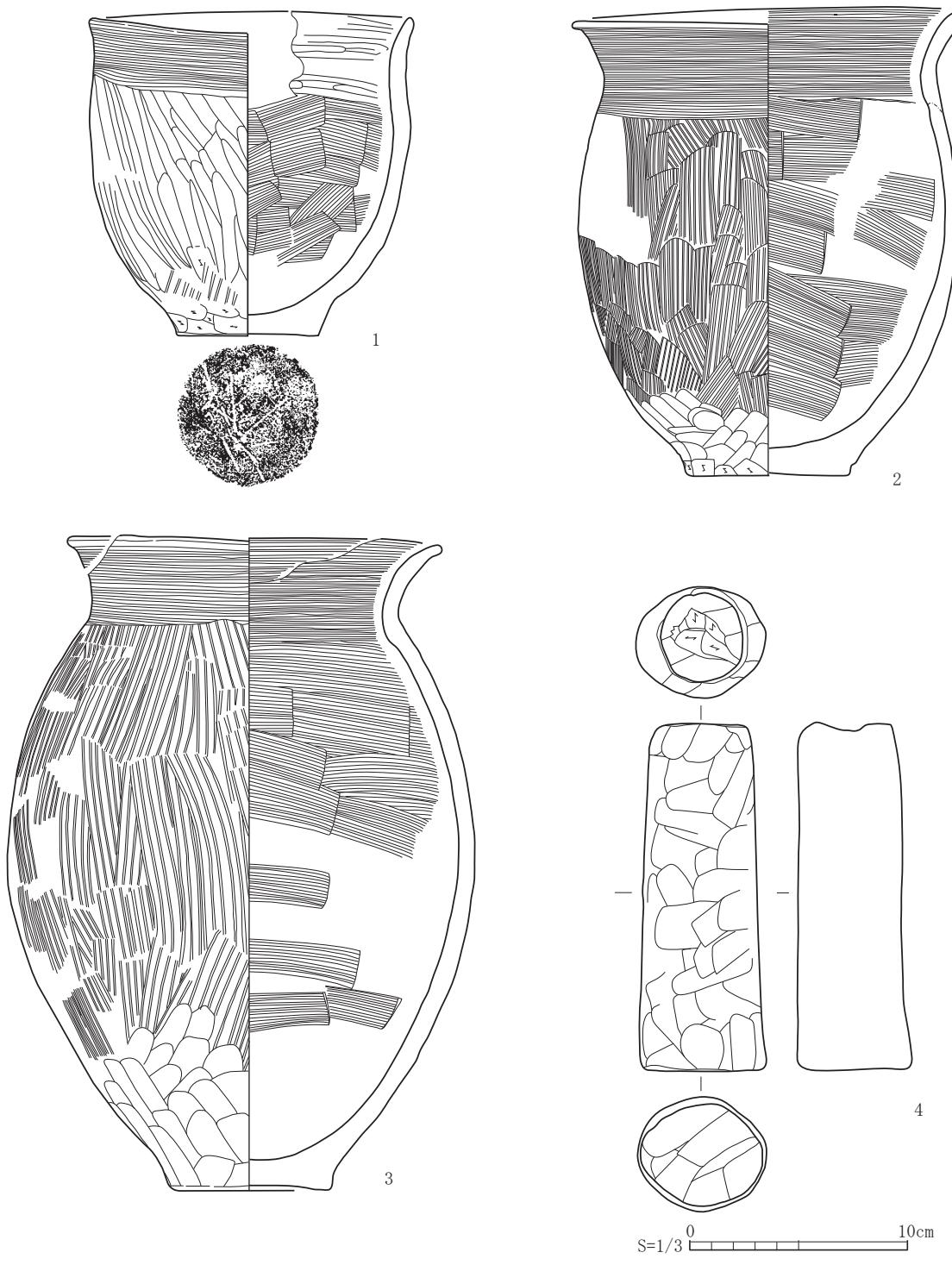
【方向・規模】 方向は、北で西に18度偏している。規模は、長さ3.1m以上、幅52cm、深さ27cmである。

【埋土】 2層確認できた。1層は、多量の灰黄色土を斑状に含む暗褐色(7.5Y 3/4)粘質土、2層は炭化物を少量含む黒褐色(2.5Y 3/2)土である。



第6図 S I 2190 竪穴住居跡カマド詳細平面図

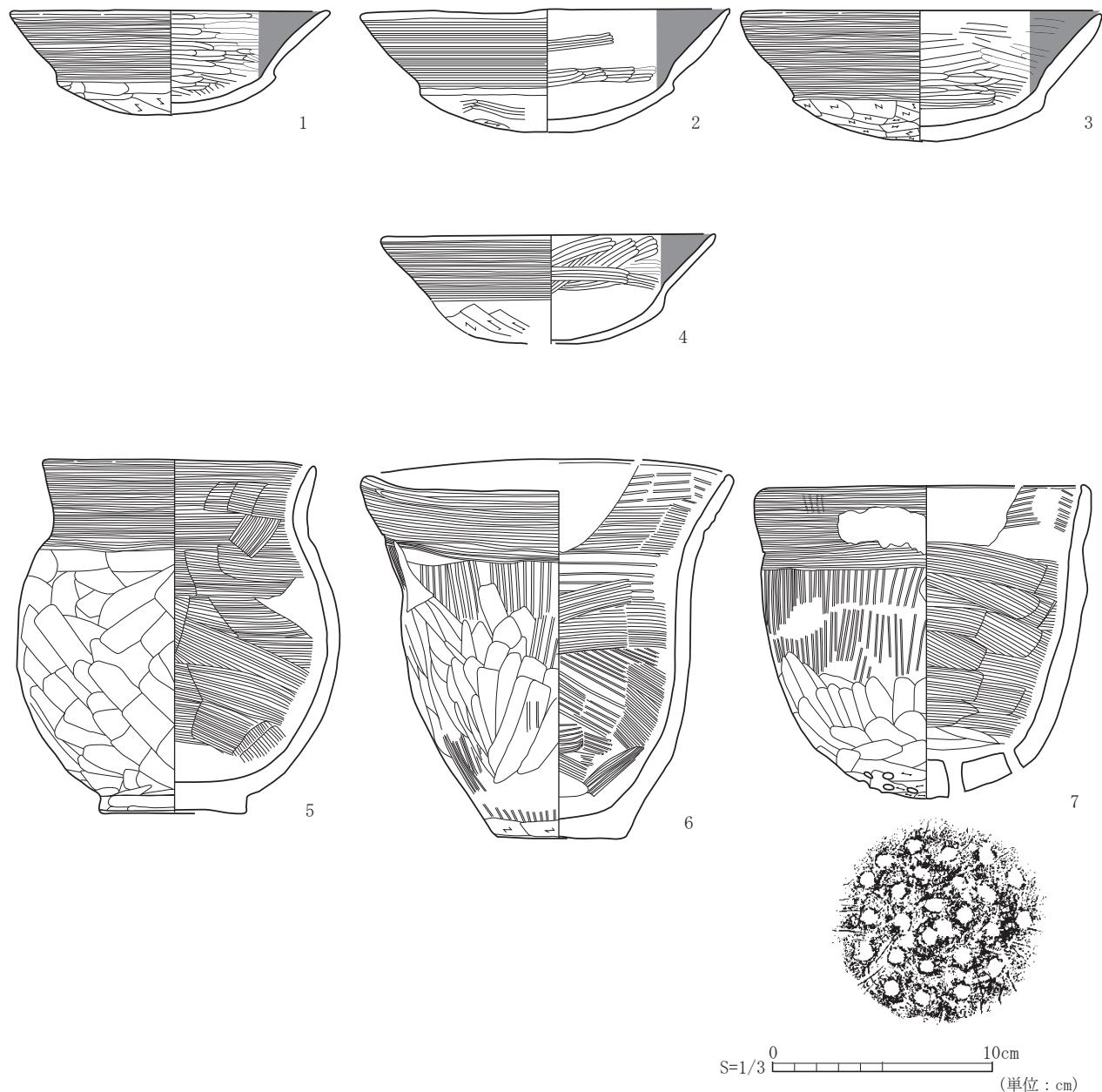
(註) カマド内からは、本来構築材であったとみられる石が出土しているほか、3個体の土師器甕がほぼ完全な形で出土している。うち2個体は東西に並んで正位を保って出土している。しかしながらこの状況は機能時を示すものとは考えにくく、何らかの理由でカマドを破壊したのち、これら土器や構築材を意図的に廃棄したものと推測される。



(単位: cm)

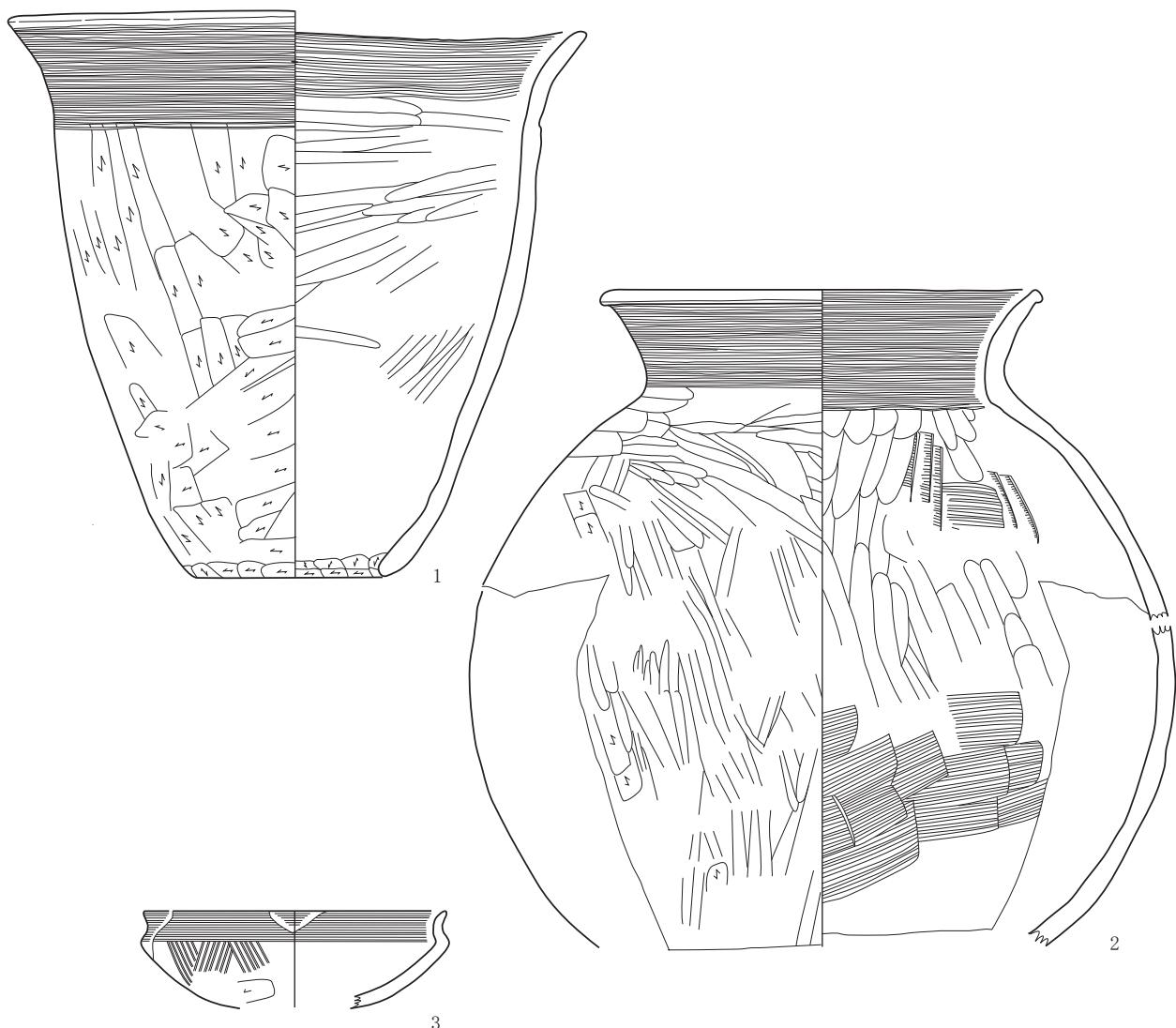
番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
		外 面	内 面					
1	土師器 甕	口縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ→ヘラミガキ 底部: ヘラケズリ	口縁部: ヘラミガキ 体部: ヘラナデ	(14.7) 19/24	6.5 24/24	14.9	2-2	R22
2	土師器 甕	口縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ、底部: ナデ→ヘラケズリ	口縁部: ヨコナデ 輪積 痕有、体部: ヘラナデ	(17.8) 14/24	7.2 24/24	21.5	2-2	R24
3	土師器 甕	口縁部: ヨコナデ、体部: ハケメ 底部: ナデ	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラナデ	(17.0) 10/24	7.2 24/24	30.1	2-2	R23
4	土製品 支脚	体部: ナデ、一部ヘラケズリ		長さ: 16.0 短径: 4.0 ~ 4.3	長径: 5.2 ~ 5.9		2-2	R27

第7図 S I 2190 竪穴住居跡カマド出土遺物



番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外 面	内 面						
1	土師器 壺	口縁部：ヨコナデ 底部：ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	(14.6) 20/24	—	4.8	2-4	R5	カマド 西側
2	土師器 壺	口縁部：ヨコナデ 底部：ヘラミガキ、ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(16.7) 15/24	—	5.6	2-4	R6	カマド 西側
3	土師器 壺	口縁部：ヨコナデ 体部～底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	16.3 24/24	—	5.9	2-4	R3	カマド 東側
4	土師器 壺	口縁部：ヨコナデ 体部～底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	15.0 24/24	—	4.9	2-4	R4	カマド 東側
5	土師器 甕	口縁部：ヨコナデ 体部～底部：ナデ	口縁部～底部： ヘラナデ	(12.7) 19/24	6.5 24/24	16.1	2-3	R21	カマド 東側
6	土師器 甕	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ→ナデ 底部：ヘラケズリ	口縁部～底部： ヘラナデ、ハケメ	(16.5) 19/24	5.8 24/24	17.3	2-3	R19	カマド 東側
7	土師器 甕	口縁部：ハケメ→ヨコナデ 体部：ハケメ→ヘラナデ	口縁部：ハケメ 体部：ヘラナデ 底部：ナデ	14.0	—	14.3	2-3	R18	カマド 東側

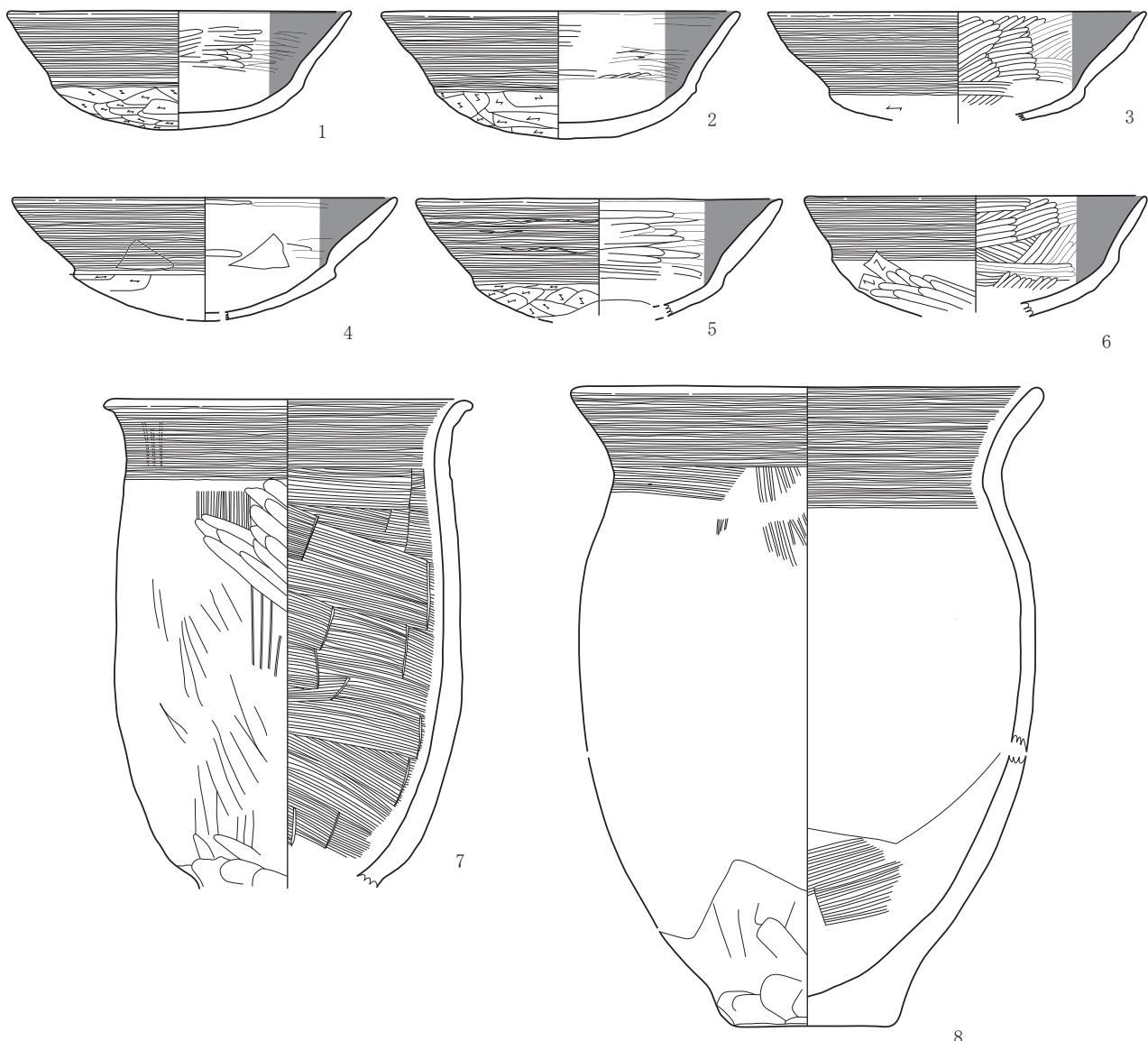
第8図 S I 2190 積穴住居跡カマド周辺出土遺物



0 10cm
S=1/3 (単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	土師器 甌	床面	口縁部: ヨコナデ 体部~底部: ヘラケズリ	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラミガキ 底部: ヘラケズリ	(24.0) 3/24	7.8 24/24	24.0		R11	
2	土師器 甕	床面	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラケズリ→ヘラミガキ	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラナデ→ナデ	(18.3) 18/24	—	(27.8)	2-3	R20	カマド 東側
3	土師器 坏	1層	口縁部: ヨコナデ 体部: ヘラケズリ→ハケ目	口縁部: ヨコナデ	(12.8) 1/24	—	(4.1)		R36	関東系

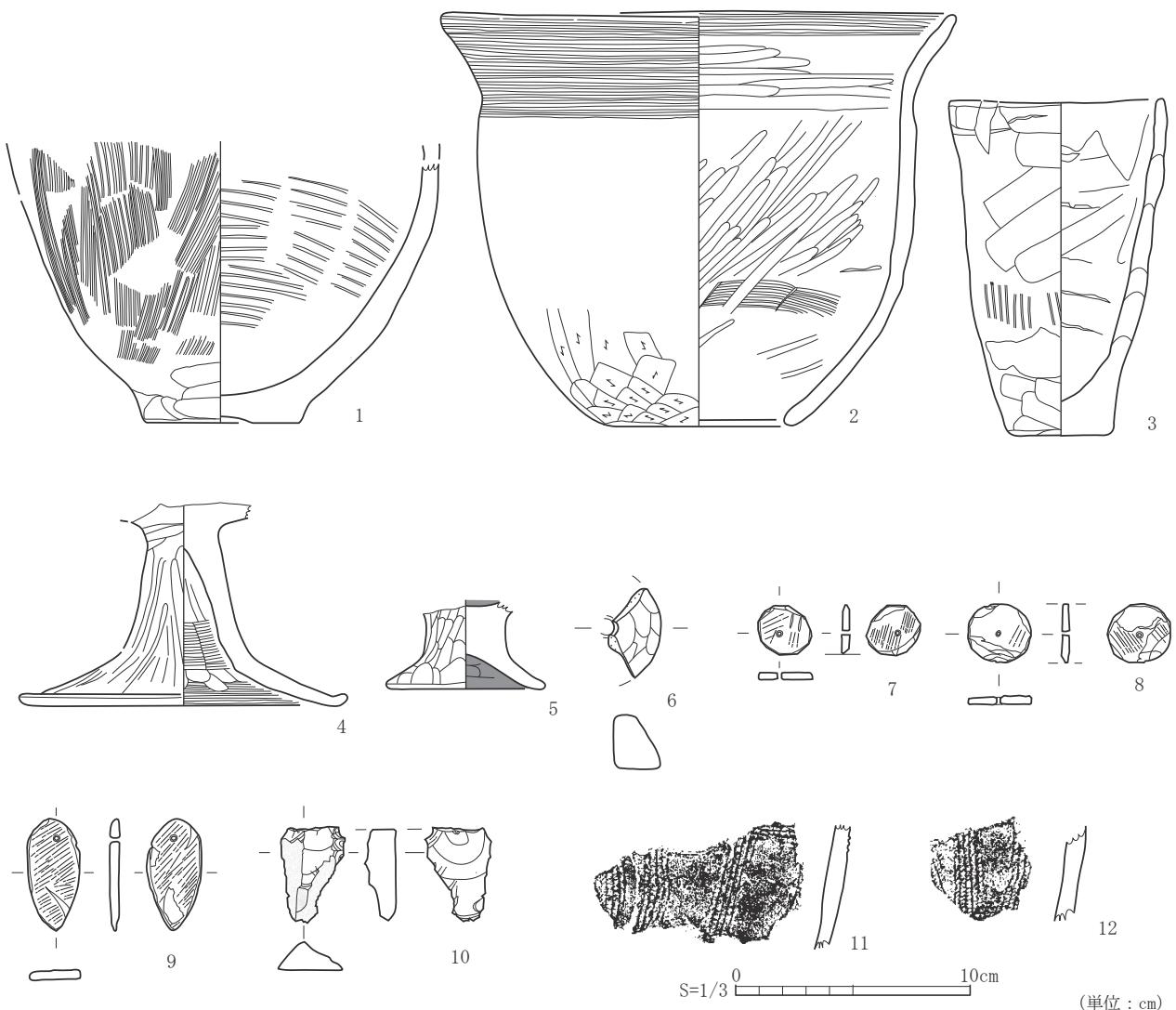
第9図 S I 2190 竪穴住居跡床面、カマド周辺及び1層出土遺物



S=1/3 0 10cm
(単位: cm)

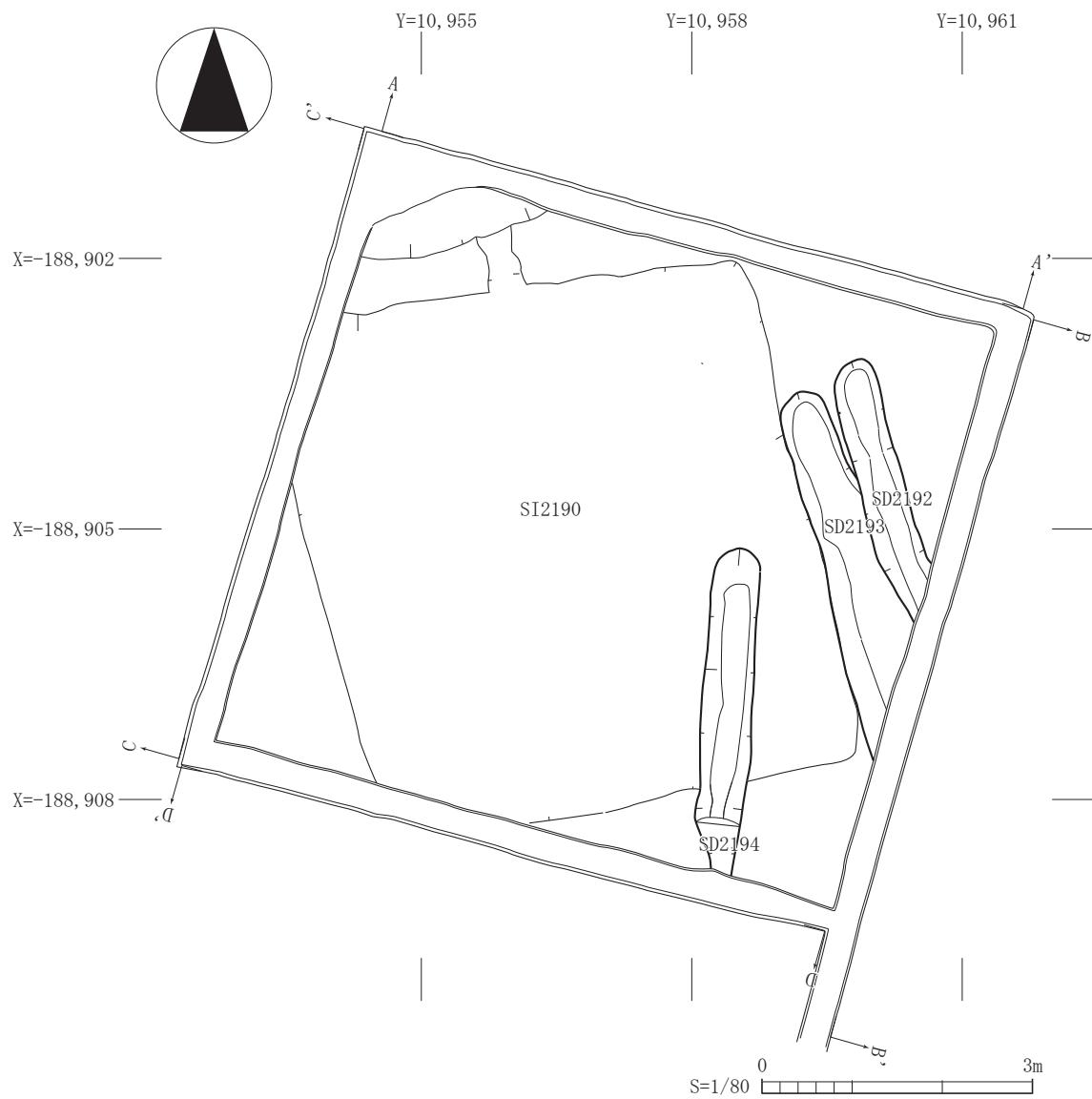
番号	種類	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
		外 面	内 面					
1	土師器 壺	口縁部: ヨコナデ 体部~底部: ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	15.0 24/24	—	5.2		R1
2	土師器 壺	口縁部: ヨコナデ 体部~底部: ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	15.6 24/24	—	5.6		R2
3	土師器 壺	口縁部: ヨコナデ 底部: ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(16.5) 9/24	—	—		R7
4	土師器 壺	口縁部: ヨコナデ 底部: ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(16.6) 5/24	—	5.5		R8
5	土師器 壺	口縁部: ヨコナデ 輪積痕有 底部: ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(16.0) 8/24	—	5.1		R9
6	土師器 壺	口縁部: ヨコナデ 体部~底部: ヘラケズリ→ヘラミガキ	ヘラミガキ 黒色処理	(14.8) 4.5/24	—	—		R10
7	土師器 甕	口縁部: ヨコナデ 体部: ハケメ→ヘラミガキ 底部: ナデ	口縁部: ヘラナデ→ヨコナデ 体部: ヘラナデ	(15.4) 10/24	—	21.3		R12
8	土師器 甕	口縁部: ハケメ→ヨコナデ 体部~底部: ナデ	口縁部: ヨコナデ 体部~底部: ヘラナデ	(20.4) 10/24	6.8 24/24	28.0		R17

第 10 図 S I 2190 竪穴住居跡 1 層出土遺物



番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号
			外 面	内 面					
1	土師器 甕	1層	体部～底部：ナデ 底部：木葉痕	体部：ハケメ	—	6.3 24/24	—		R14
2	土師器 瓶	1層	口縁部：ヨコナデ 体部～底部：ヘラケズリ	口縁部：ヨコナデ 体部：ヘラミナデ、 ヘラミガキ	(22.0) 16/24	8.0 24/24	17.8		R15
3	筒型土製品	1層	口縁部：ナデ 体部：ハケメ、ナデ 底部：ナデ	体部：ナデ、輪積痕有	(9.0) 13/24	4.1 24/24	14.4		R16
4	土師器 高坏	1層	脚部：ヘラミガキ	脚部：ヨコナデ→ナデ →ヘラナデ	—	(13.4) 8/24	—		R25
5	土師器 高坏	1層	脚部：ヘラミガキ→ナデ ヨコナデ	ヘラミガキ ナデ、黒色処理	—	6.6	—		R26
6	石製品 紡錘車	1層	最大径：(5.0) 7/24、孔径：1.0、高さ：2.3						R28
7	石製模造品 有孔円盤	検出面	長さ：2.1、幅：2.3、厚さ：0.3						R29
8	石製模造品 有孔円盤	1層	長さ：2.5、幅：2.7、厚さ：0.4						R30
9	石製模造品 剣形	1層	長さ：4.7、幅：2.2、厚さ：0.4						R31
10	剥片石器 黒曜石	1層	長さ：4.1、幅：2.7、厚さ：1.2						R32
11	統繩文土器	1層			—	—	—		R33
12	統繩文土器	1層			—	—	—		R34

第 11 図 S I 2190 竪穴住居跡 1 層出土遺物



第12図 SD2192～2194溝跡平面図

SD2193溝跡（第12図）

【位置】調査区の東側で確認した。南北方向の溝跡である。

【重複】SD2192及びSI2190と重複しており、SD2192より古く、SI2190より新しい。

【方向・規模】方向は、北で西に18度偏している。規模は、長さ4.0m以上、幅86cm、深さ30cmである。

【埋土】2層確認できた。1層は、多量の炭化物を含む黒褐色（2.5Y 3/2）粘質土、2層は炭化物を少量含む暗灰黄色（2.5Y 4/2）土である。

SD2194溝跡（第12図）

【位置】調査区の東側で確認した。南北方向の溝跡である。

【重複】SI2190と重複しており、これより新しい。

【方向・規模】方向は、北で西に4度偏している。規模は、長さ4.0m以上、幅58cm、深さ18cmである。

【埋土】黒褐色（10Y 3/2）土である。

S X2195 (第2図)

【位置】調査区東壁及び南壁の断面でのみ確認した。全容の把握ができなったため、性格不明の落ち込みとした。

【規模】東西1.3m以上、南北1.8m、深さ32cm以上である。

【埋土】VI層に起因する土を斑状に含む暗褐色(7.5Y 3/4)粘質土である。

S X2196 (第2図)

【位置】調査区南壁の断面でのみ確認した。全容の把握ができなったため、性格は不明である。

【規模】東西90cm、深さ44cm以上である。

【埋土】1層は黒褐色(2.5Y 3/2)土である。

[Ⅲ層上面検出遺構]

S X2191 (第2・13図)

【位置】調査区の北西隅で確認した。調査区の外へ広がっており、全容の把握ができなったため、性格は不明である。

【規模】東西2.4m、南北2.2m、深さ53cmである。

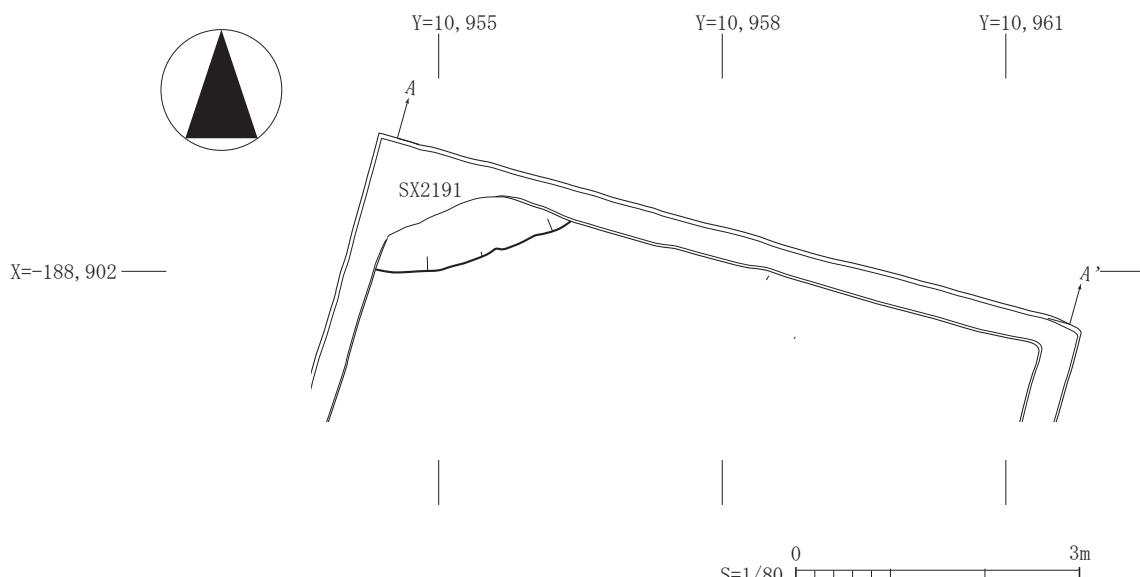
【埋土】3層確認した。1層は炭化物を少量含むオリーブ褐色(2.5Y 4/3)土、2層は炭化物と焼土を少量含むオリーブ褐色(2.5Y 4/3)土、3層は多量の炭化物と焼土を含む黄灰色(2.5Y 4/1)粘質土である。

S X2187 (第2図)

【位置】調査区北壁の断面でのみ確認した。全容の把握ができなったため、性格は不明である。

【規模】東西2.4m、深さ35cmである。

【埋土】灰オリーブ色(5Y 4/2)土である。



第13図 S X2191 平面図

S X2188 (第2図)

【位置】調査区北壁の断面でのみ確認した。全容の把握ができなかったため、性格は不明である。

【規模】東西77cm、深さ15cmである。

【埋土】炭化物を少量含むオリーブ褐色(2.5Y 4/3)土である。

S X2189 (第2図)

【位置】調査区北壁の断面でのみ確認した。全容の把握ができなかったため、性格は不明である。

【規模】東西1.1m以上、深さ21cmである。

【埋土】焼土の粒を底面に含む灰オリーブ色(5Y 4/2)土である。

3 考察

(1) S I 2190堅穴住居跡の年代

S I 2190堅穴住居跡からは、カマド及びその周辺から土師器壺・甕・甌などが出土している。上述したとおり、カマドの構築材であったとみられる石が複数カマド燃焼部内堆積土から出土していることや、通常甕等が1個体のみかかるはずのカマドに3個体もの甕が正位で出土していることを考慮すると、カマドを意図的に壊した後、これら土器を配置したと考えられる。したがってカマド内及びその周辺の床面から出土したこれらの遺物は、住居廃絶時の土器様相を示していると推測される。このことを踏まえ、堅穴住居に伴うとみられるカマド及びその周辺から出土した土器について着目し、1層から出土した土器については補足的に扱う。以下に出土土器の特徴について詳細に述べる。

[S I 2190出土土器の特徴]

はじめに全体を概観すると、出土した土器はすべて非ロクロ成形の土師器で、そのうち壺はヘラミガキの後内面黒色処理が施されている。この状況は1層出土土器も同様である。壺や甕、甌の器形を問わず、口縁部はヨコナデで仕上げられている。

壺は、第9図3を除き浅い半球形の底部と口縁部の境に段が内外面に認められる。また口縁部はいずれも大きく外傾しており、そのうち第8図1はやや外反気味であるが、それ以外(第8図2~4)は直線的である。底部はヘラケズリによって仕上げられているが、第8図2は一部ヘラミガキが施されている。S I 2190出土土器の壺については、1層出土の壺を含めてみても、唯一関東系土器(第9図3)とみられる1点を除き、同様の器形の壺で占められている。その点においては、壺の器形的なバリエーションはあまりないといえよう。

甕は、器高が14.9cmと小型のもの(第7図1)と、16.1cm(第8図5)と17.3cm(第8図6)及び21.5cm(第7図2)の中型のもの、30.1cm(第7図3)と27.8cm以上(第9図2)の大型のものがある。小型の甕(第7図1)は、口縁部にくびれがなく、やや外反しながら直立しており、頸部の境に段は認められない。中型の甕は、胴部中央に最大径があるもの(第8図5)と、口縁部が最大径となるもの(第7図2、第8図6)がある。前者は、口縁部がやや外傾するが直立気味で、頸部に段が認められる。後者は、口縁部が外傾しており、第7図2は頸部に段は見られないが、第8図6は沈線が確認できる。大型の甕は、胴が長いもの(第7図3)と、胴部の張りが強く球胴状となるもの(第9図2)がある。前者は、最大径は胴部中央にあり、口縁部は外反しながら外傾し、

頸部に段は認められない。後者は、頸部がすぼまっており、頸部に段は認められないほか、口縁端部の断面形は四角に仕上げられている。

甌は2点出土しているが、いずれも口径と器高がほぼ同じで、深さは深くない。底部に複数の穴が空けられているもの（第8図7）と底がないもの（第9図1）がある。前者は、口縁部がやや外傾しながら垂直に立ち上がり、頸部に段が認められる。後者は口縁部が外反しながら外傾し、頸部に沈線が確認できる。

[S I 2190出土土器の年代]

以上、出土土器の特徴を述べてきた。こうした土器群と共に特徴が認められる例を近隣の調査でみてみると、山王遺跡 S D2050 B 第6層出土土器や鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査 S R 3 a 溝跡出土土器及び3 b 層土器群が挙げられる。

特に壺については、山王遺跡 S D2050 B 第6層出土土器や鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査 S R 3 a 溝跡出土土器及び3 b 層土器群いずれにおいても、S I 2190出土土器と同様のものが主体を占めており、共通する要素であるといえる。

山王遺跡 S D2050 B 第6層出土土器や鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査 S R 3 a 溝跡出土土器及び3 b 層土器群は、住社式に位置付けられており、鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査 S R 3 a 溝跡からはT K10型式とみられる須恵器壺が共伴していることから、6世紀中頃に位置付けられている。このことからS I 2190出土土器も同じ年代とみておきたい。

(2) 繩縄文土器と黒曜石について

繩縄文土器が、S I 2190竪穴住居跡の1層から2点、S X2186の1層から1点、出土している。また黒曜石製石器が1層から出土しているので、これらについて若干触れておきたい。

出土した繩縄文土器はいずれも体部の破片である。胎土や色調が似ていることから、本来は同一個体の土器であった可能性が考えられる。外面は、表面を丁寧になでたのち、帶縄文が縦位に施されている。体部破片といった限られた情報であるが、同様の特徴を持つ土器は後北C 2-D式やそれに後続する北大I式にみられることから、その頃のものとしておきたい。

繩縄文土器の出土例についてみると、本調査区の周辺では山王遺跡 S X058で出土しているほか、鴻ノ巣遺跡でも出土している。また、黒曜石製石器は山王遺跡町地区・西町浦地区・八幡地区でも出土しているほか、本調査区の西側隣接地である第73次調査でも確認している。今回S I 2190竪穴住居跡は古墳時代後期にあたる6世紀中葉頃とみられ、繩縄文土器や黒曜石製石器が共伴する時期より竪穴住居跡の年代が新しい。これは、VI層上面検出のS X2186に本来含まれていたものが混入したことによるとみられる。このことは、S I 2190 1層から古墳時代中期の南小泉式の高壺と石製模造品が出土していることと矛盾しない。

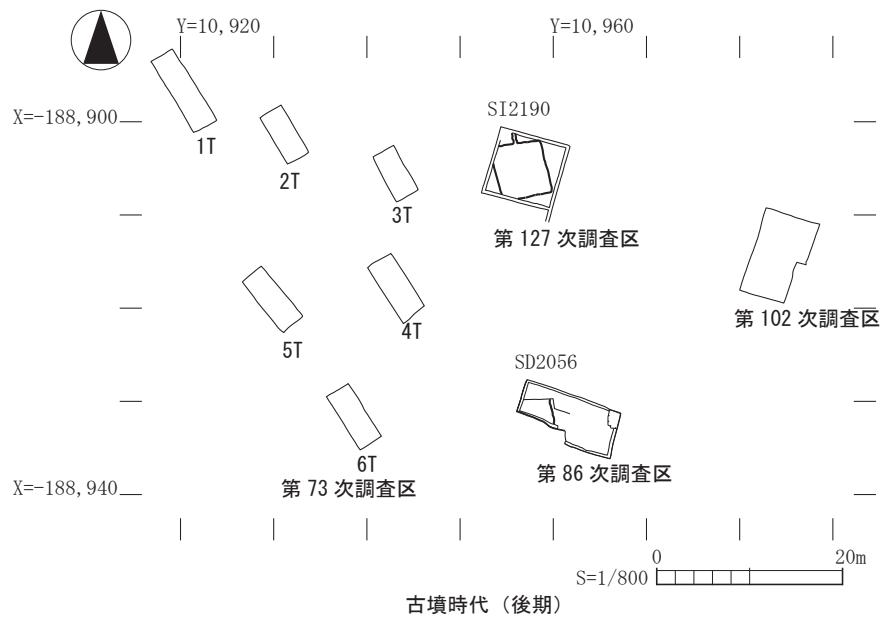
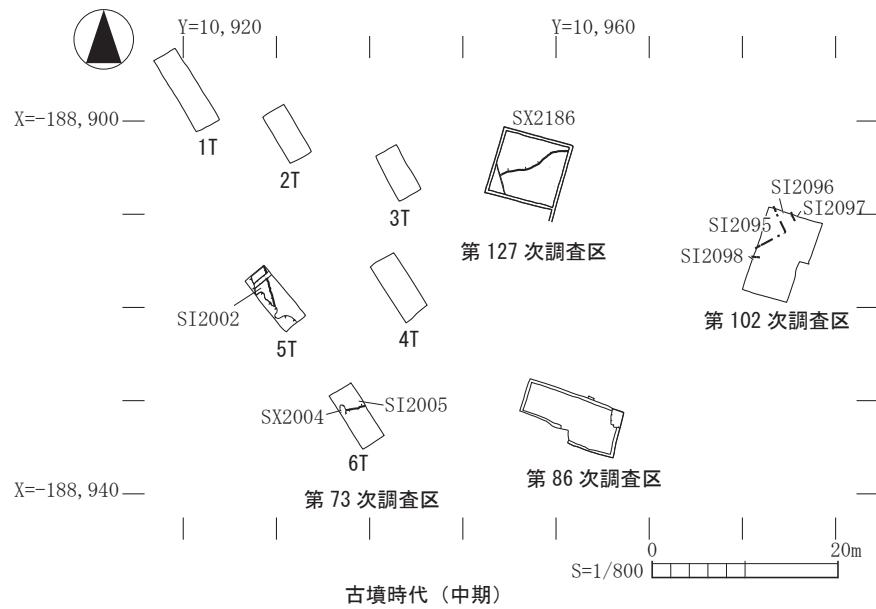
(3) 本調査区周辺の状況

周辺では、第73・86・102次調査を行っており、古墳時代中期から中世にかけての遺構を検出している。

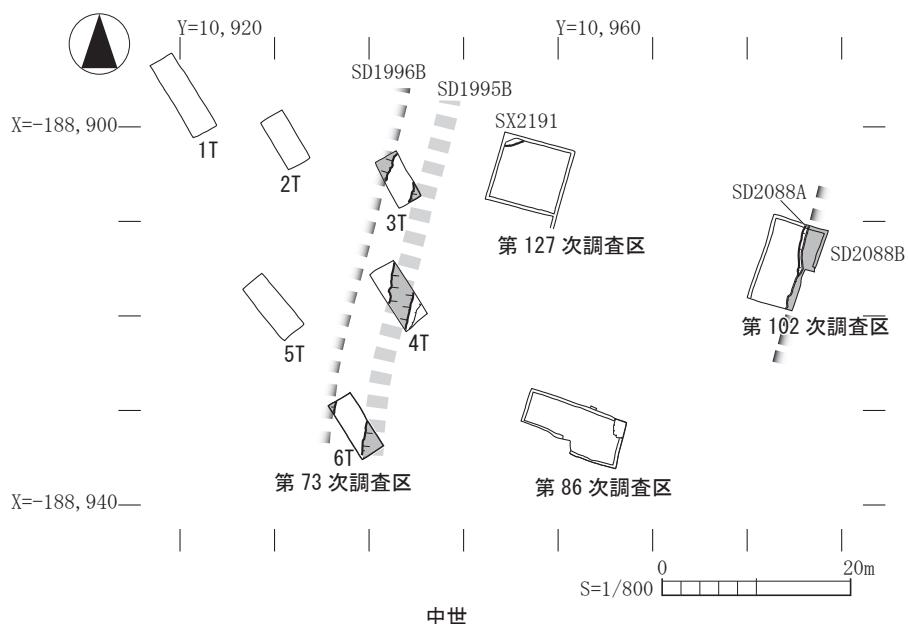
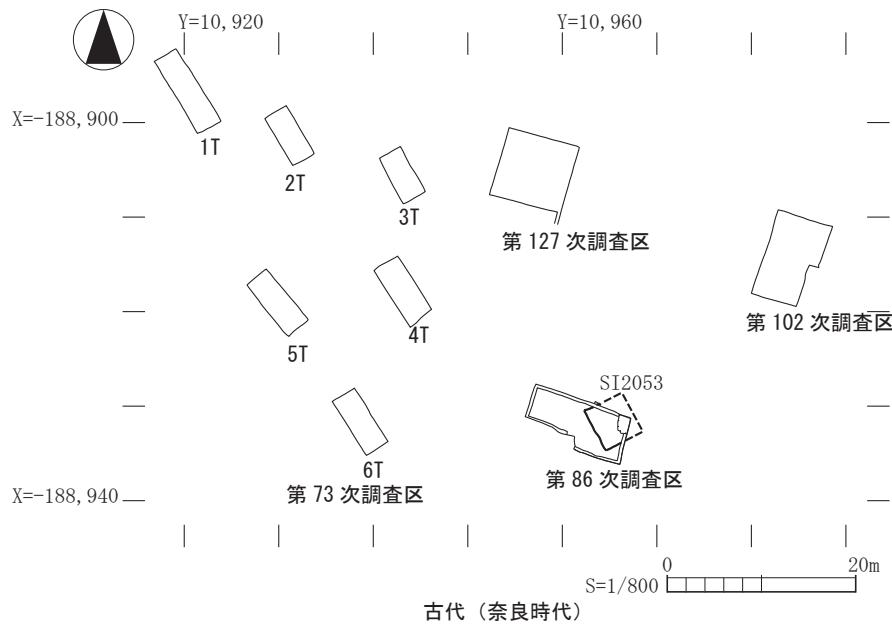
古墳時代中期の遺構は、第102次調査で確認している。東日本大震災からの復興調査であったことから、確認のみでとどめているが、竪穴住居跡を4軒確認している。その他、宅地造成に先行して行った確認調査である第73次調査でも2軒の竪穴住居跡と土器焼成遺構とみられる土壙を1基確認している。本調査で確認したSX2186も古墳時代中期の遺構とみておきたい。

古墳時代後期では、本調査で発見したSI2190竪穴住居跡のほか第86次調査区で南北方向の溝跡とみられる落ち込みを確認している。

古代では、第86次調査区で奈良時代とみられる竪穴住居跡を1軒発見している。



第14図 第127次調査区と周辺の主要遺構平面図（古墳時代）



第15図 第127次調査区と周辺の主要遺構平面図（古代・中世）

中世では、第73・102次調査区で南北方向の溝跡を合計3条検出している。

以上のことから、本調査区周辺では古墳時代中期から中世まで断続的に土地利用が行われていたことが明らかとなった。今後調査例の増加と共にその詳細を明らかにしていく必要があろう。

4 まとめ

- ・古墳時代後期の6世紀中葉頃の竪穴住居跡を1軒発見した。
- ・古墳時代中期の遺物である南小泉式の土師器高杯や石製模造品とともに、縄繩文土器が出土している。本市内の調査では山王遺跡S X058の出土例につづき2例目である。

- ・本調査区周辺では古墳時代中期から中世まで断続的に土地利用が行われていたとみられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2』多賀城市文化財調査報告書第108集 2012
多賀城市教育委員会『新田・山王遺跡ほか—震災復興関係遺跡発掘調査報告書I—』多賀城市文化財調査報告書第137集 2018
仙台市教育委員会『鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第280集 2004
宮城県教育委員会『山王遺跡八幡地区の調査2』宮城県文化財調査報告書第186集 2001
相沢清利「東北地方縄繩文文化小考—仙台平野の事例を中心にして—」『宮城考古学』第1号 1999



1 S I 2190竪穴住居跡全景（北から）



2 S I 2190竪穴住居跡カマド及びカマド周辺 遺物出土状況（東から）
写真図版 1



1 S I 2190竪穴住居跡カマド完掘状況（南東から）



2 S I 2190竪穴住居跡カマド内出土遺物
(R22・23・24・27)



3 S I 2190竪穴住居跡カマド周辺出土遺物
(R19・18・20・21)



4 S I 2190竪穴住居跡周辺出土遺物
(R3・4・5・6)

写真図版2

III 新田遺跡第129次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字南寿福寺地内における集合住宅建設に伴う確認調査である。

平成31年2月12日に、地権者より、新田遺跡の北部に位置する当該地での集合住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、1,842.57m²の敷地に30cmの盛土を行った後、住宅建築の基礎工事として68.5cmの掘削を行うものであった。

当該地は、現地表から約60cm下で溝跡等の遺構を発見している。工事による掘削の深さは、遺構検出面まで及ばない計画ではあったが、計画面積が1,000m²を超える広さがあることから、確認調査を実施することになった。

平成31年2月12日に地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年2月27日から発掘調査に着手した。

はじめに、調査区の東側に1区、西側に2区を設定し、重機による表土掘削を行った。3月1日には1区から作業員による遺構検出作業を開始し、6日から1区の平面図作成を開始し、これ以降隨時写真や図面の記録作成を行った。7

日から2区の遺構検出作業を行った。V層で遺構確認を行ったが、遺構の数が少ないと確認面での遺構確認が難しかったため、調査区南壁面沿いにVI層まで掘り下げた。18日にはすべての作業を終了し、19日に重機による埋戻しを完了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

I層：表土・耕作土で厚さは5～20cmである。

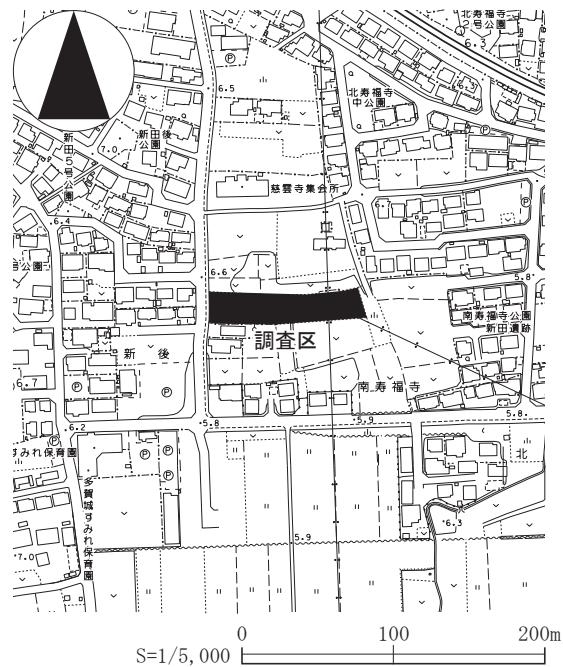
II層：褐色(10YR 5/1)砂質土。厚さは5～25cmである。

III層：褐色(10YR 4/1)砂質土。厚さは10～20cmである。

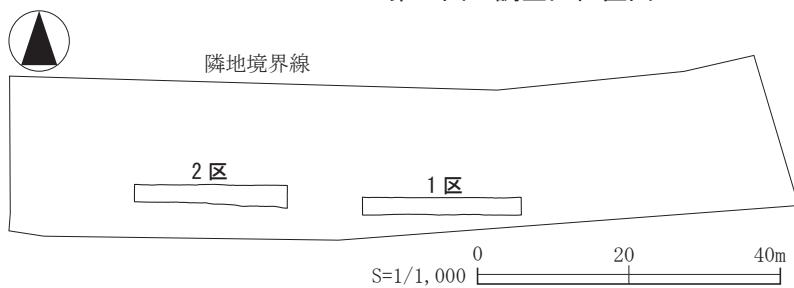
IV層：灰褐色(7.5YR 4/2)砂質土。厚さは5～15cmである。

V層：灰褐色(5YR 4/2)VI層に由来するブロックが多量含まれる。この上面でSD2197・2198などの遺構検出面となっている。厚さは10～25cmである。

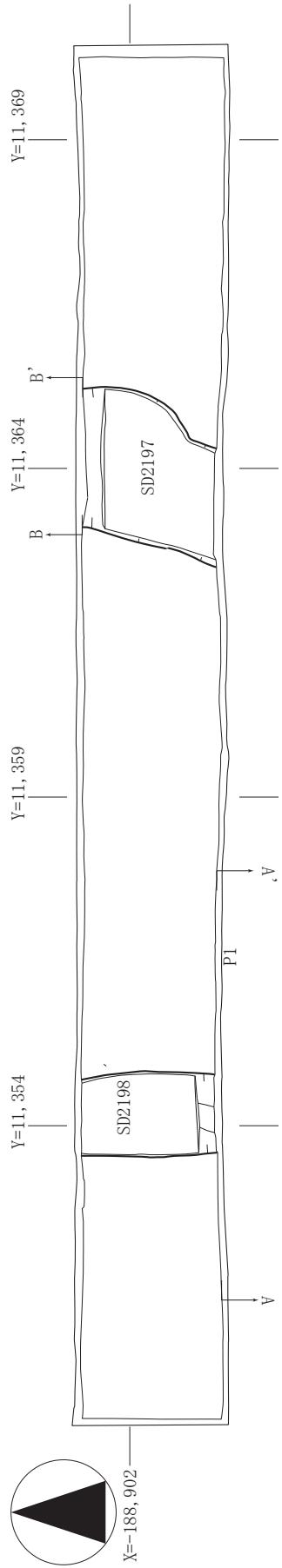
VI層：黄褐色(10YR 5/6)粘質土。この上面でSA2199やSD2202などの遺構検出面となっている。



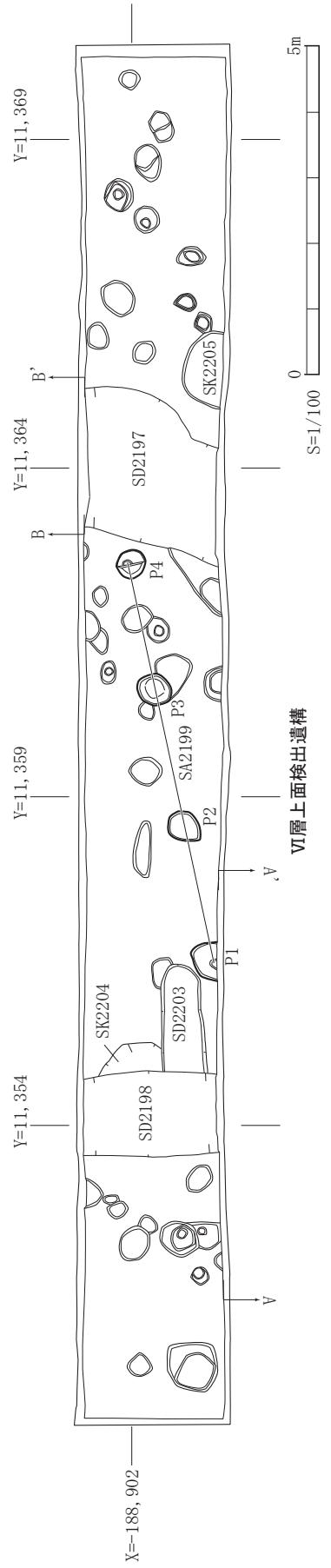
第1図 調査区位置図



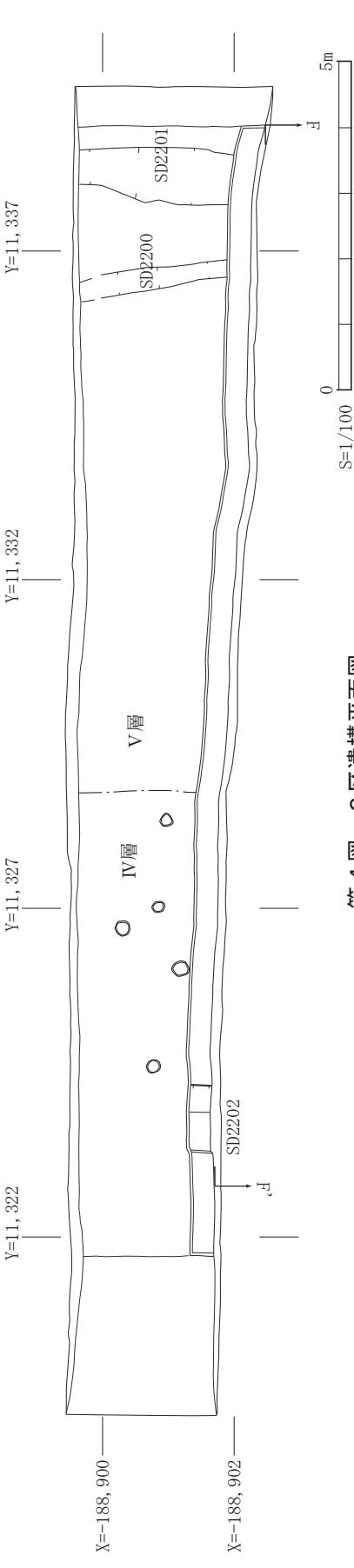
第2図 調査区配置図



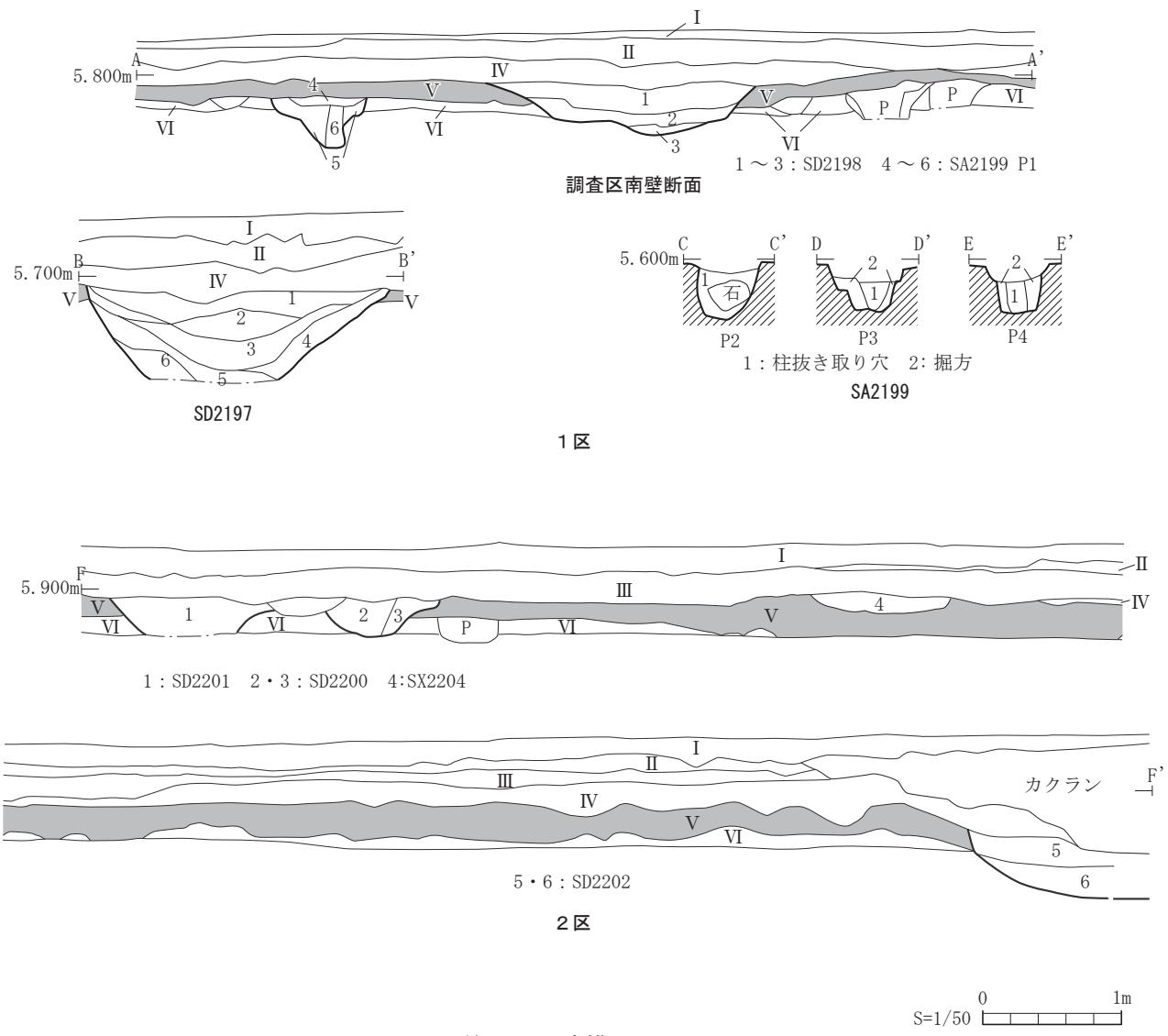
V層上面検出遺構



第3図 1区遺構平面図



第4図 2区遺構平面図



第5図 遺構断面図

(2) 発見した遺構

今回の調査では、IV層上面及びV層上面で遺構を発見した。以下遺構検出面ごとに述べる。

【IV層上面発見遺構】

S A2199柱列跡（第3・5・6図）

【位置】 1区中央に位置する。

【規模・方向】 東西3間以上の柱列跡と推測される。柱間については西から約2.0m、約2.1m、約1.9mで、柱列の規模は6.2m確認できた。方向は、東で北に約12度偏している。

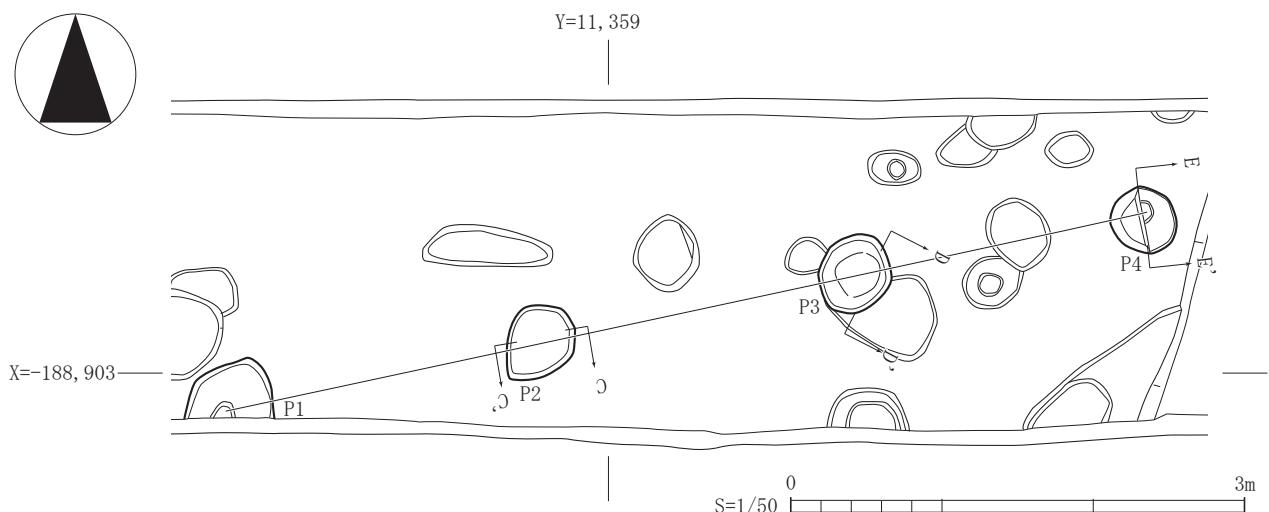
【柱痕跡・柱抜き取り穴の有無】 いずれも抜き取り穴が確認できた。

【重複】 P3がピットと重複しており、これより新しい。

【掘方】 P2は橢円形、P3及びP4は円形である。P1は調査区外に及ぶため詳細は不明である。埋土は褐色(10YR 4/4)土もしくは黄褐色(10YR 5/6)土で、黒色土とVI層に起因する土を斑状に含んでいる。

【柱抜き取り穴】 埋土は黒褐色(10YR 3/2)土もしくはにぶい黄褐色(10YR 4/3)土で、炭化物やVI層に起因する土を斑状に含んでいる。なお、P1とP4の柱抜き取り穴は、柱のあたり痕跡を残している。

【遺物】 出土していない。



第6図 SA2199 柱列跡平面図

SD2202溝跡（第4・5図）

【位置】2区の西側で確認した。断面のみの確認であるが、土層観察から溝跡と判断した。

【規模】幅2.5m以上、深さ45cmである。

【埋土】2層確認できた。1層は、黄灰色（2.5Y 4/1）土、2層は黒褐色（2.5Y 3/1）土である。いずれも少量のVI層に起因する土を斑状に含んでいる。

【遺物】出土していない。

〔V層上面発見遺構〕

SD2197溝跡（第3・5図）

【位置】1区の東側で確認した。

【方向・規模】検出した規模は南北2m以上、東西2.6m、深さ65cm以上である。深さは底面まで掘り下げることができなかつたため、さらに深いものと考えられる。溝は南北方向に延びており、西側の上端でみると、北で東に9度偏している。

【壁・底面】壁は斜めに立ち上がる。

【埋土】6層に分けることができた。1層は褐色(10YR 4/4)土、2層はにぶい黄褐色(10YR 4/3)土、3層は灰黄褐色(10YR 4/2)土、4層は暗褐色(10YR 3/2)土、5層は黒褐色(10YR 2/2)土、6層は黒褐色(10YR 3/2)土である。いずれもVI層に起因する土を斑状に含んでいるほか、3層と5層には焼土を含んでいる。

【遺物】土師器壺19点、土師器甕6点、土師器5点、須恵器壺6点、須恵器甕8点、陶器甕3点が出土している。

SD2198溝跡（第3・5図）

【位置】1区の西側で確認した。

【方向・規模】検出した長さは南北2.0m、東西1.2m、深さ35cmである。方向はほぼ真北を示している。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

【埋土】3層確認できた。1層はにぶい黄褐色(10YR 4/3)、2層は暗褐色(10YR 3/3)、3層は黒褐色(10YR 3/2)である。いずれもVI層に起因する土を斑状に含んでおり、下層ほどその量が多い。

【遺物】土師器壺1点、土師器甕1点が出土した。

S D2200溝跡（第4・5図）

【位置】2区の東側で確認した。

【方向・規模】長さ2.1m、幅30cm、深さ25cmである。方向は北で西に9度偏している。

【埋土】2層確認できた。1層は暗褐色（10YR 3/3）土にVI層に起因する土を斑状に含む。2層はにぶい黄褐色（10YR 4/3）土に多量のVI層に起因する土を斑状に含む。

【遺物】出土していない。

S D2201溝跡（第4・5図）

【位置】2区の東側で確認した。

【方向・規模】長さ南北2.1m、幅85cmである。

【壁・底面】壁は斜めに立ち上がっている。底面まで掘り下げていないため、詳細は不明である。

【埋土】灰黄褐色（10YR 4/2）土に、多量の黒色土とVI層に起因する少量の土を斑状に含む。

【遺物】須恵器甕が出土している。

3まとめ

今回の調査では、V層上面でS D2197・2198・2200・2201溝跡を、VI層上面でS A2199柱列跡、S D2202溝跡などを発見している。

V層上面のS D2197・2201溝跡からは、無釉陶器甕の体部破片が出土している。口縁部など特徴を示すものは確認できなかったことから詳細な年代は不明であるが、およそ中世と考えられる。

VI層上面からは、いずれも古代の遺物が出土しており、土師器で確認できるものはいずれもB類である。

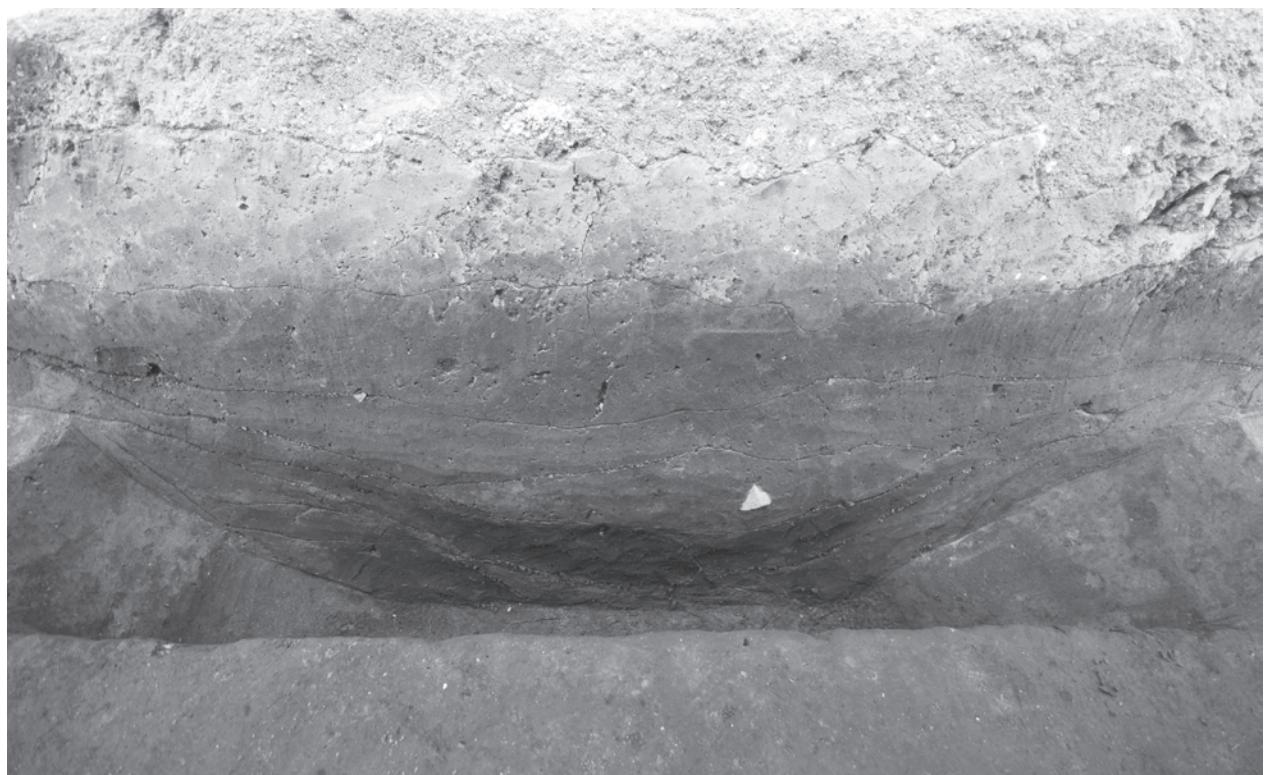
以上のことから、V層上面検出遺構はおよそ中世、VI層上面検出遺構は8世紀後葉以降とみておきたい。



1区全景（西から）



2区全景（東から）



S D2197溝跡断面（南から）

IV 新田遺跡第130・131次調査

1 調査に至る経緯と経過

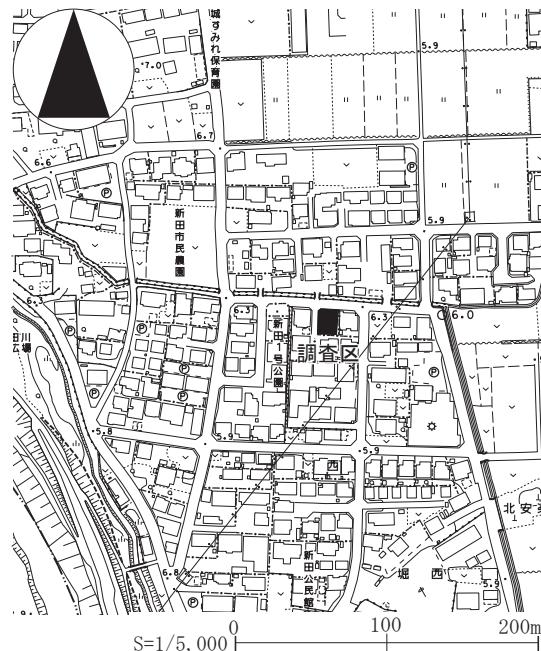
本件は、新田字西地内における個人住宅建設（第130次）と建売住宅建設（第131次）に伴う確認調査である。本件は、西側（第130次）と東側（131次）に隣接しており、また同一の施工業者及び工事着手時期であったことから、一つの報告としてまとめて行う。

平成30年11月8日に、地権者より新田遺跡の南部に位置する当該地での個人住宅建設と建売住宅建設についての協議書がそれぞれ提出された。計画では、住宅部分の基礎工事の際に直径20cm、深さ7.5mの杭を打ち込む内容であったことから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された工法以外では住宅の地耐力が十分に得られないとのことから、申請された工法で行うこととなった。

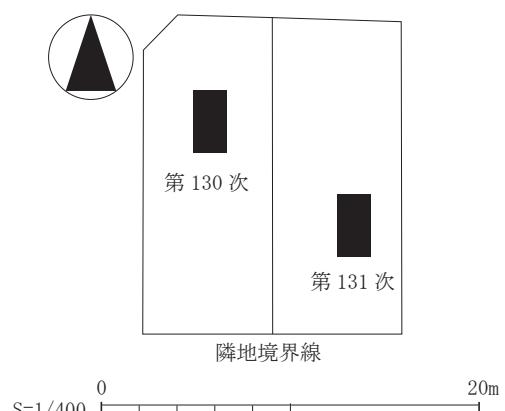
地権者から平成31年2月15日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年3月6日から発掘調査に着手した。

はじめに、重機を使って西側の第130次調査区から、続いて東側の第131次調査区をそれぞれ掘削した。現地表から2mまで掘削したところ、湿地もしくは河川跡とみられる砂層や粘土層が堆積している状況を確認したのみで、遺構や遺物は確認できなかった。写真撮影などの記録を作成し、当日のうちには埋め戻しまで行い、すべての作業を終了した。



※数字は過去の調査次数

第1図 調査区位置図



第2図 調査区位置関係



第130次調査区（東から）



第131次調査区（西から）

V 新田遺跡第132次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字北寿福寺地内における2棟分の共同住宅建設に伴う確認調査である。

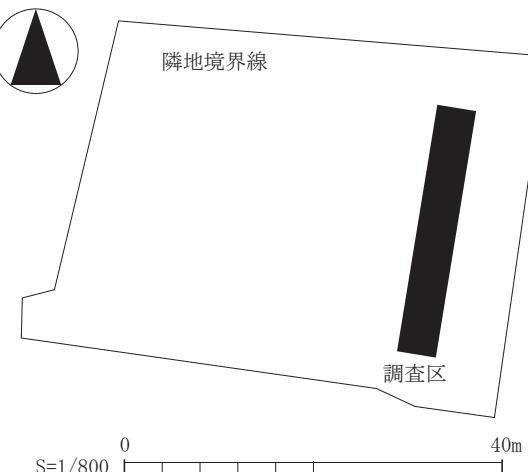
地権者より、平成30年11月21日（南側住宅）と平成31年3月1日（北側住宅）に、新田遺跡の北東部に位置する当該地での共同住宅建設についての協議書が提出された。計画では、住宅部分の基礎工事の掘削では、遺構面に達しないものの、開発面積が1,710.01m²と広大であったことから、遺構の分布状況などの把握を目的とした確認調査を実施することとなった。

地権者から平成31年3月27日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年4月8日から発掘調査に着手した。

はじめに、調査区の南側から掘削を開始し、現地表面から約2mまで掘削したが、調査区南側では遺構や遺物は発見できなかった。調査区北側へ掘削を続けたところ、北半でビニールシートなどの廃棄物が多量に出土し、現地表面から2mを超えて深く埋まっていることを確認した。以上のことから、遺構や遺物は北半では失われていると判断し、写真撮影など記録作成の後、4月10日から埋め戻しを行い、4月11日にすべての作業を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区南端（北から）



調査区全景（南から）

VI 新田遺跡第133次調査

1 調査に至る経緯と経過

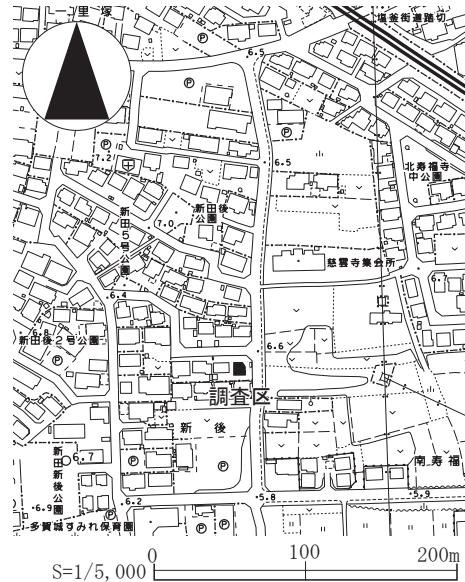
本件は、新田字新後地内における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成31年4月25日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に、現況より40cmの盛土を施したのち、深さ6.0～7.75mの柱状改良を39本打ち込む内容であった。周辺では当該区の東側で第129次調査を実施しており、現地表面から約1mで中世の遺構を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、当初計画のとおり施工するとの結論に至った。その後、4月25日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、5月9日に発掘調査を実施した。

調査では、住宅建築部分北側及び南東側に調査区を設定し、重機により表土を除去したところ、現代の盛土層及び耕作土が現地表面から1.2mの深さまで達しており、さらに現地表面から1.8mの深さまで、湿地の自然堆積層とみられる暗青灰色粘土層が厚く堆積していることが確認され、遺構・遺物を発見することはできなかった。

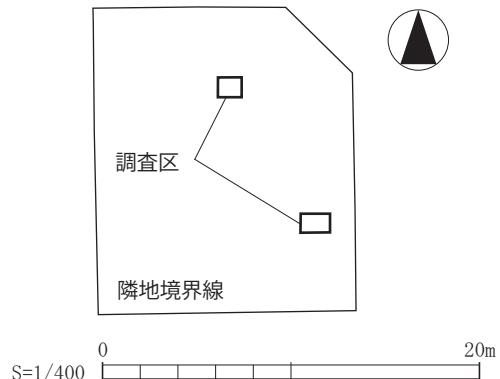
以上から、第129次調査で発見した中世の遺構面は計画地内に存在しないと判断し、当日のうちに写真撮影及び調査区の埋め戻しを行い、現地調査をすべて終了した。



調査状況（南西から）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

VII 新田遺跡第135次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、新田字後地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。

平成31年2月1日、地権者より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、住宅建設の基礎工事の際に、地盤改良として直径32cm、深さ2.25mの杭状改良を行う内容であった。当該地の西側で実施した第96次調査では、現地表から約100cm下で遺構を発見したことから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された計画以外では住宅の地耐力を得られないことから、申請された工法で行うこととなった。

地権者から令和元年7月25日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、令和元年8月21日から発掘調査に着手した。重機で盛土・表土を除去し、Ⅱ層上面から遺構の検出作業を行った。Ⅲ層上面で井戸跡、Ⅳ層上面で小溝群を発見した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は9月18日に終えた。9月19・20日に埋戻しを行い、機材の撤収を完了し、すべての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

I 1層：現代の盛土。山砂を多く含む。厚さは65～80cmある。

I 2層：黒褐色（10YR3/2）粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約15cmである。

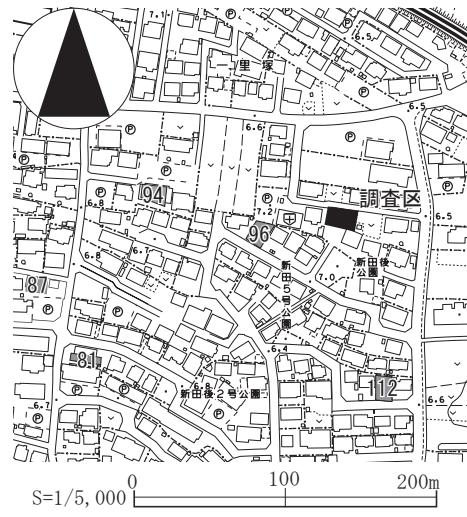
II 層：暗緑灰色（10G3/1）土で、暗褐色粘質土ブロックを含む。厚さは15～20cmである。

III 層：暗緑灰色（5G4/1）土で、暗褐色粘質土ブロックを含み、調査区北側で砂質土を多く含む。上面が中世以降の遺構検出面である。厚さは約10cmである。土師器甕（A類）が出土している。

IV 層：黄褐色（2.5Y5/3）土で、暗褐色粘質土ブロックを含む。上面が古代の遺構検出面である。厚さは約40cmである。

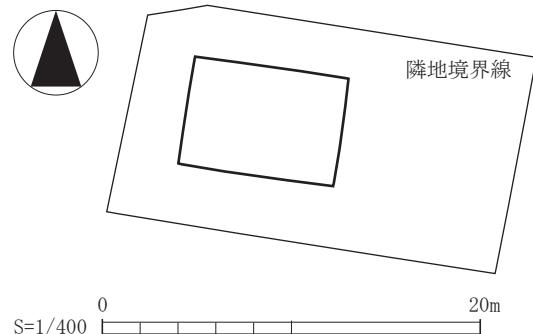
V 層：暗褐色（7.5YR3/3）砂で、調査区北側で確認した。上面が古代の遺構検出面である。

VI 層：オリーブ黒色（5Y3/1）粘土で、黄褐色粘質土ブロックや砂質土ブロックを含む。下層を確認するためS E 2205井戸跡を掘り下げたが、遺構や遺物は確認できなかった。



※数字は過去の調査次数

第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

(2) 発見した遺構と遺物

[Ⅲ層上面]

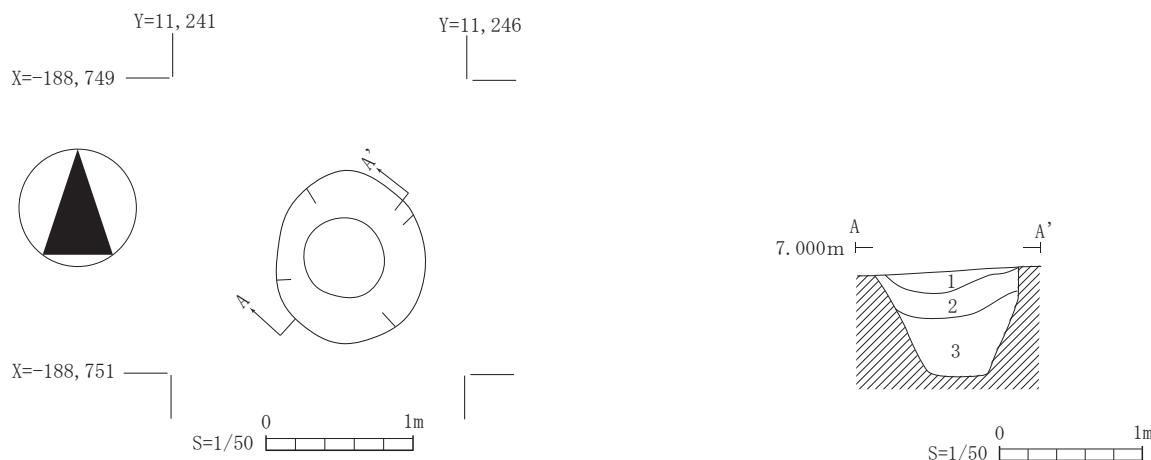
S E2205井戸跡 (第3図)

【位置】調査区の西部に位置する。

【平面形・規模】不整円形である。規模は、東西1.02m、南北1.15m、深さ75cmである。素掘りで壁面は急傾斜で立ち上がる。

【埋土】3層に区分でき、1層は灰オリーブ色(5Y4/2)土、2層はオリーブ黒色(5Y3/2)土、3層は黒褐色(10YR3/2)土である。人為堆積で、固くしまっている。

【遺物】出土していない。



第3図 S E2205井戸跡平面図・断面図

[Ⅳ層上面]

S X2206小溝群 (第4～6図)

【位置】調査区全面で検出した。

【変遷】重複関係と方向及び位置関係から、3時期の変遷(A群→B群→C群)を確認した。

A群

【方向・規模】東西方向である。1条検出し東で北に3度偏している。長さは4.6m以上、上幅20～28cm、深さ5cmである。

【埋土】単層で暗青灰色(5BG4/1)土である。

【遺物】出土していない。

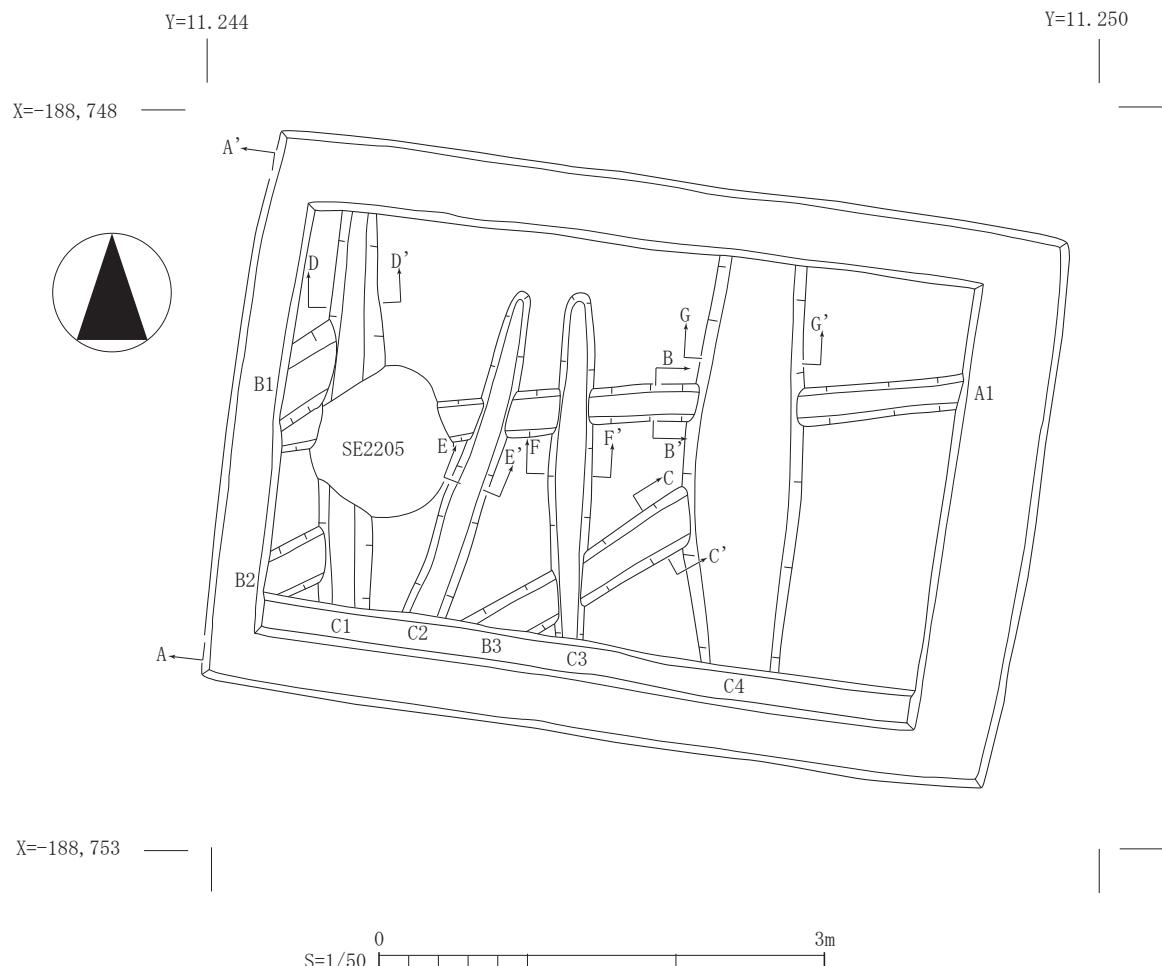
B群

【方向・規模】東西方向である。3条検出し東で北に31度偏している。長さは最も長いもので1.7m以上、上幅32～45cm、深さ5～20cmである。

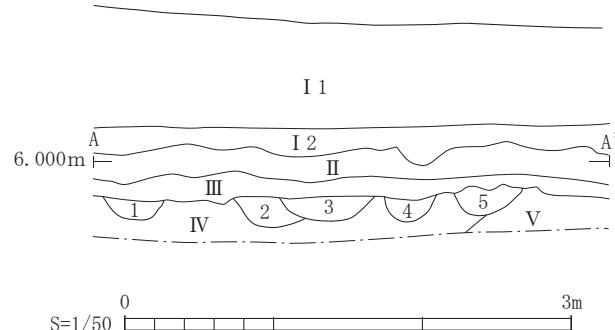
【間隔】60～70cmである。

【埋土】単層で暗青灰色(5BG4/1)土や暗灰黄色(2.5Y4/2)土である。

【遺物】出土していない。

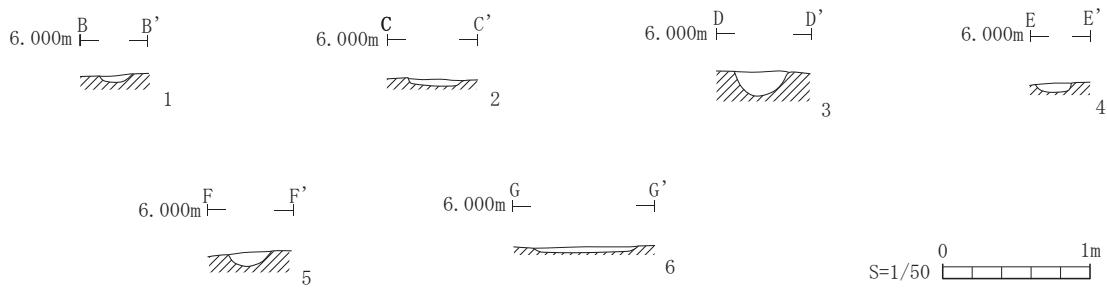


第4図 IV層上面検出遺構平面図



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SX2206(B2)	1	暗緑灰 (7.5GY4/1)	シルト	VI層土ブロックを含む。
2	SX2206	1	オリーブ黒 (5Y3/1)	シルト	VI層土ブロックを含む。西壁断面のみ検出。
3	SX2206(B1)	1	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	VI層土ブロックを含む。
4	SX2206	1	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	VI層土ブロックを含む。西壁断面のみ検出。
5	SX2206	1	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	VI層土ブロックを含む。西壁断面のみ検出。

第5図 調査区西壁断面図



第6図 S X 2206小溝群断面図

C群

【方向・規模】南北方向である。4条検出し3条は北で東に2度偏し、もう1条は北で東に18度偏している。長さは最も長いもので2.75m以上、上幅20～80cm、深さ4～10cmである。

【間隔】0.5～1.2mである。

【埋土】単層でにぶい黄褐色（10YR4/3）土や暗緑灰色（10G3/1）土である。

【遺物】土師器甕が出土している。

3まとめ

今回の調査では、Ⅲ層上面で井戸跡1基、Ⅳ層上面（一部V層上面）で小溝群を検出した。遺物は土師器片がわずか出土した。

隣接地で行われた新田遺跡第96次調査（多賀城市教育委員会 2018）では、中世以降と考えられる第1遺構確認面と古代と考えられる第2遺構確認面が確認され、第1遺構確認面から溝跡やピット等が検出されている。これらのことと踏まえると、第135次調査で発見された井戸跡は中世以降、小溝群は古代に属するものと推定される。

参考文献

多賀城市教育委員会『新田・山王遺跡ほか—震災復興関係遺跡発掘調査報告書I—』多賀城市文化財調査報告書第137集 2018



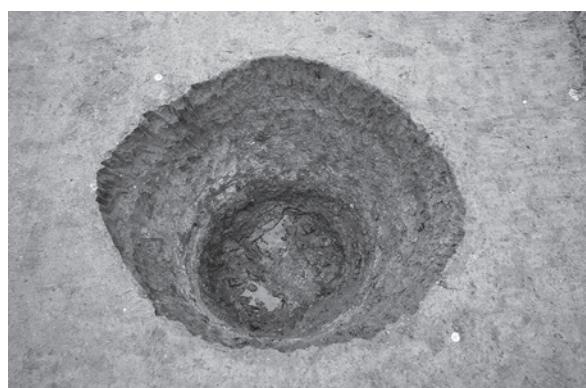
調査区全景（南から）



調査区西壁断面（東から）



S E 2205井戸跡断面（南から）



S E 2205井戸跡完掘状況（西から）



S X 2206小溝群完掘状況（東から）

VIII 新田遺跡第136次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、南宮字庚申 228 番外 8 筆における宅地造成工事に伴うもので、平成 31 年 2 月 5 日に地権者より新田遺跡内における宅地造成と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。この計画は、約 6,000 m² の敷地に幅 6.0 m の道路を建設して宅地 24 区画を造成するもので、現地表に最大 1.3 m の盛土を行い、区画ごとの擁壁設置工事では最大で 0.8 m、上水道管敷設工事では幅 1.0 m、深さは最大で 1.8 m の掘削を行うというものである。

東側隣接地を対象とした平成 23 年度の第 76 次調査では、現況から 0.8 m の深さで遺構を検出しており、今回の工事計画による遺構への影響が懸念された。また、今回の工事対象地区は開発計画面積も広いことから対象地における遺構の分布状況を把握する必要があり、確認調査の実施に至ったものである。

令和元年 8 月 6 日、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、8 月 27 日より現地調査を開始した。道路建設予定地に 4箇所のトレンチを設定し、重機により T1・T2 トレンチの表土除去。8 月 29 日、T3 トレンチの表土除去。8 月 30 日、雨のため作業中止。9 月 3 日、T3 トレンチで遺構検出作業を行う。東側で畦畔状遺構、西側で東西溝、西端部で灰白色火山灰が自然堆積する溝状の落ち込みを発見。T4 トレンチの表土除去。9 月 4 日、T1 トレンチ・T2 トレンチで遺構検出作業。T2 トレンチ北側で北側に落ち込む湿地との境界を確認。9 月 5 日、T2 トレンチで遺構検出作業。T4 トレンチでは黒色土上面で遺構検出作業を行ったが、遺構は検出できなかった。T1 トレンチにおける黒色土や黄褐色砂の性格について見解がまとまる。9 月 6 日器材を撤収し、9 月 7 日に T3 トレンチの補足調査を行って調査を終了した。

2 調査成果

T1 トレンチ

T1 トレンチは東端部に砂の地盤があり、南北方向の溝跡を検出した。東端部から約 5 m 西側からは低湿地が広がっており、灰白色火山灰降下以前の水田層を確認した。耕作土が黄褐色砂で覆われる状況が見られる。



第 1 図 調査区位置図

T2 トレンチ

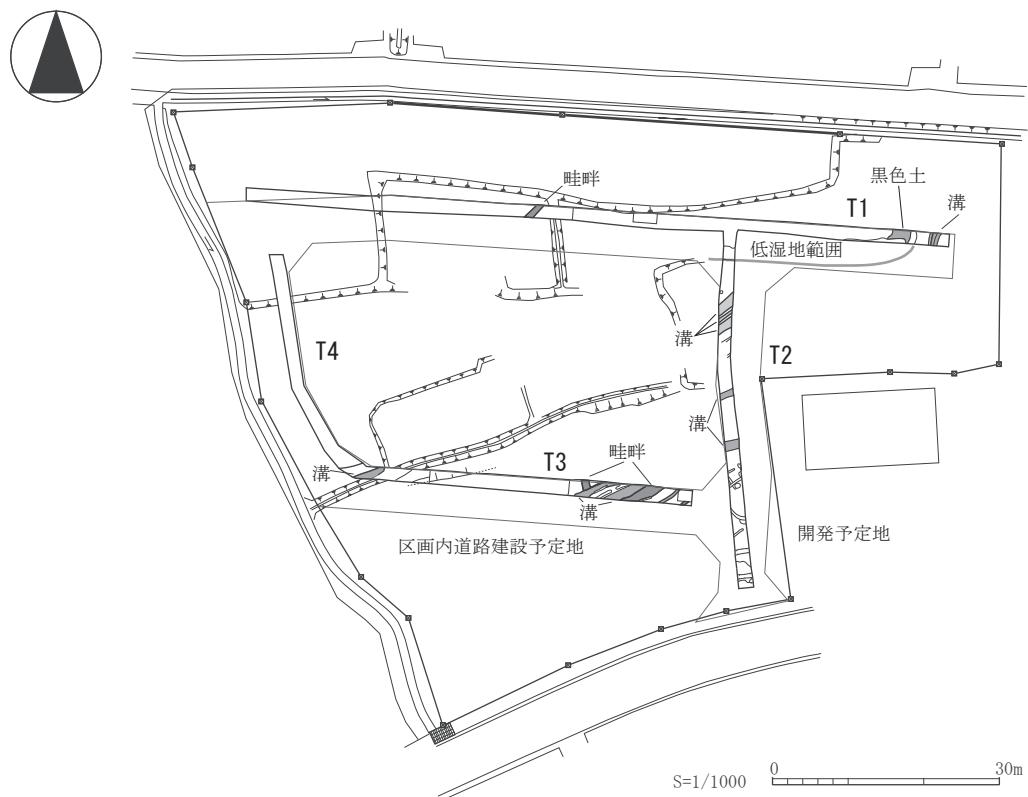
T2 トレンチでは、T1 トレンチの約 4 m 南側に低湿地との境界がある。その南側は安定した砂の地盤となっており、その上面で東西方向の溝跡や土壌状の落ち込みを検出した。

T3 トレンチ

T3 トレンチ東側で方向的にまとまりがある東西溝や畦畔状遺構を検出した。西端部では 10 世紀前葉の灰白色火山灰が厚く自然堆積する東西方向の溝状の落ち込みを発見した。

T4 トレンチ

T4 では表土下に黒色土があり、その上面で遺構は検出できなかった。その下層の状況は不明である。



第 2 図 調査区配置図

3まとめ

- (1) 調査区の東側から南東部にかけて、古代以降の溝跡や土壌状の落ち込みを発見した。
- (2) 調査区北側の湿地で灰白色火山灰降下以前の水田跡を発見した。
- (3) 遺構の分布は希薄であるが、調査区のほぼ全体に及んでいる状況を確認することができた。



左上:T1トレンチ低湿地検出状況（西より）

右上:同上（西より）

左下:T2トレンチ遺構検出状況（南より）

右中:T1トレンチ低湿地土層堆積状況

右下:T3トレンチ東端部土層堆積状況

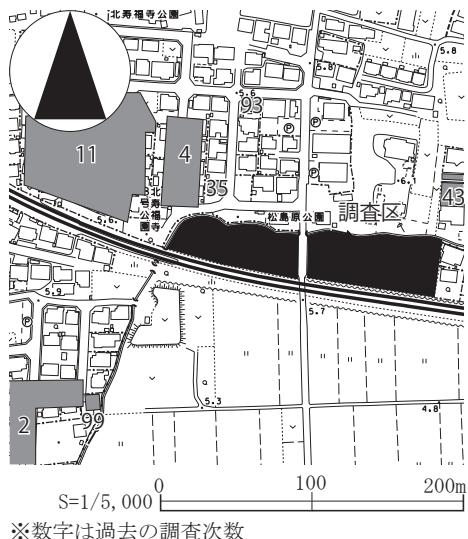
IX 新田遺跡138次調査・山王遺跡第216次調査

1 調査に至る経緯と経過

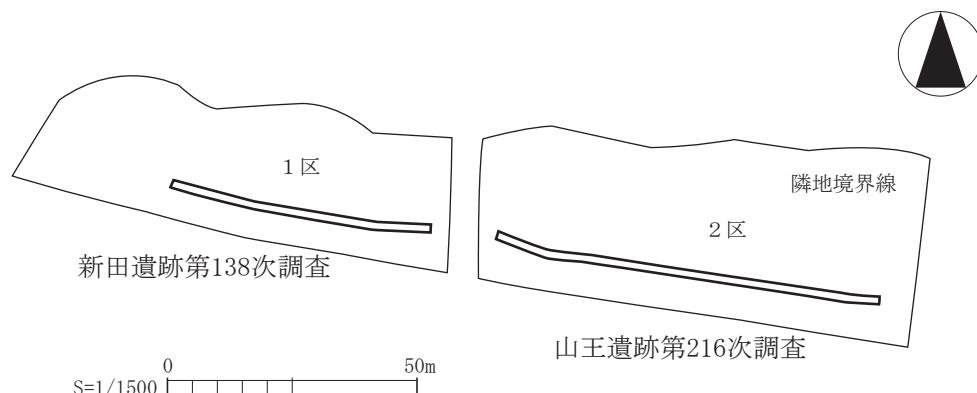
本件は、山王字三千刈、松島原地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。

令和元年6月12日、新田遺跡側で計画している事業者と、山王遺跡側で計画している事業者より、それぞれ当該事業と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、新田遺跡側は開発面積2,051.17m²の敷地に幅6mの道路と10区画の宅地を造成するもので、当該地の北側で実施した第35次調査では深さ90cm下で遺構を発見している。山王遺跡側は開発面積2,935.80m²の敷地に幅6mの道路と14区画の宅地を造成するもので、当該地の東側で実施した第75次調査では深さ約130cm下で遺構を発見している。このことから、遺跡への影響が懸念され確認調査を行うこととなった。

令和元年10月8日、事業者から発掘調査の依頼書、地権者から承諾書の提出を受け、令和元年10月16日から発掘調査に着手した。調査区は2箇所設定し、新田遺跡側を1区、山王遺跡側を2区とした。重機で各調査区の表土を除去し、Ⅲ層上面で遺構の検出作業を行った。1区では遺構は発見されず、2区では溝跡を発見した。また、一部深掘りを行い、下層の状況を確認した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は10月29日に終えた。10月30・31日、11月1日に埋戻しを行い、機材の撤収を完了し、すべての調査を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

2 調査成果

(1) 層序

I 1層：褐灰色（10YR4/1）粘土で、現代の水田耕作土である。

厚さは1区で10～30cm、2区で15～20cmである。

2区から土師器甕、須恵器坏が出土している。

I 2層：暗青灰色（5B4/1）粘土で、現代の水田耕作土である。

厚さは2～5cmである。

II 層：黒褐色（10YR3/1）粘土である。2区東側で確認した。

厚さは5～10cmである。

III 層：にぶい黄褐色（2.5Y6/3）シルト質土である。上面が古代の遺構検出面である。厚さは1区で約45cm、2区で60～70cmである。2区から土師器坏が出土している。

IV 層：黒色（2.5Y2/1）粘質土で、浅黄色粘土が互層を成す。

小枝片を含む。下層を確認するため各調査区の両端を掘り下げた。厚さは1区で10～25cm、2区で約10cmである。

(2) 発見した遺構

SD 2684 溝跡（第3図）

【位置】2区の西部に位置する。

【方向・規模】方向は南北方向で北で東に約10度偏している。規模は長さ1.5m以上、上幅1.95m、深さ18cmである。南東側の壁面はテラス状になる。

【埋土】単層で黒褐色（10YR3/2）土で、自然堆積である。

【遺物】出土していない。

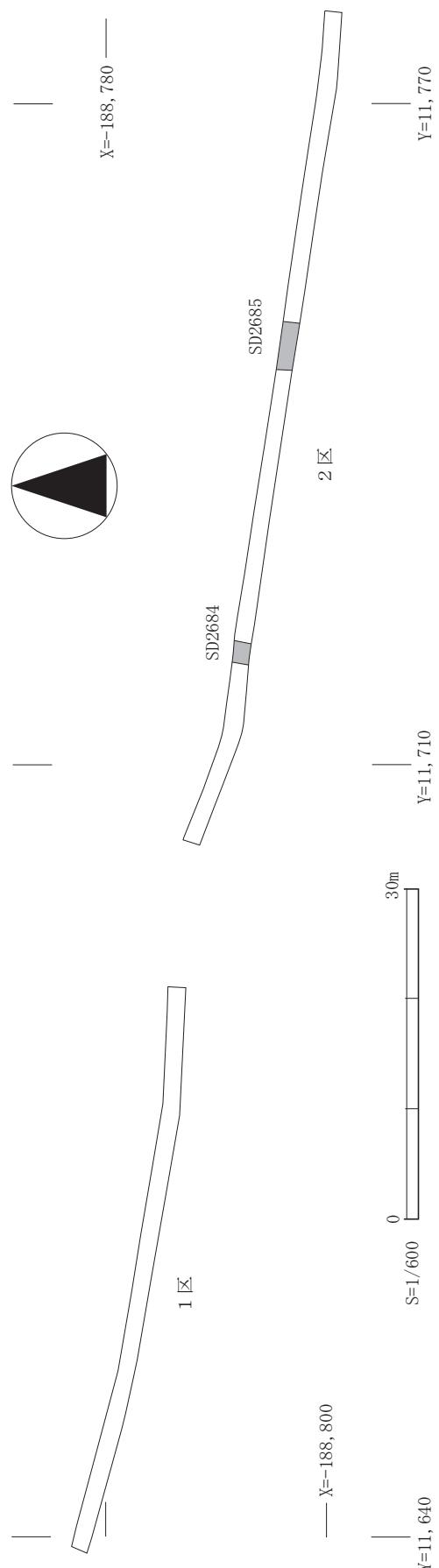
SD 2685 溝跡（第3図）

【位置】2区の中央部に位置する。

【方向・規模】方向は南北方向で北で東に約5度偏している。規模は長さ1.5m以上、上幅4.4m、深さ42cmである。

【埋土】単層で褐灰色（10YR4/1）土で、自然堆積である。

【遺物】出土していない。



第3図 調査区平面図

3 まとめ

今回の調査では、II区で溝跡2条を検出した。遺物はII区で土師器が少量出土した。年代については、SD2684は埋土に灰白色火山灰が含んでいることから火山灰が降下した10世紀前葉以降と考えられる。

なお、一部深掘りを行い、古代と考えられる遺構確認面の約60cm下から黒色粘質土層(IV層)を確認した。これまでの周辺地域の調査例によれば、古墳時代の水田跡と土質が類似しており本調査区内にも古墳時代の遺構が存在する可能性がある。



1区全景（東から）



2区全景（西から）



SD2684溝跡（南から）



SD2685溝跡（南から）

X 高崎遺跡第116次調査

1 調査に至る経緯と経過

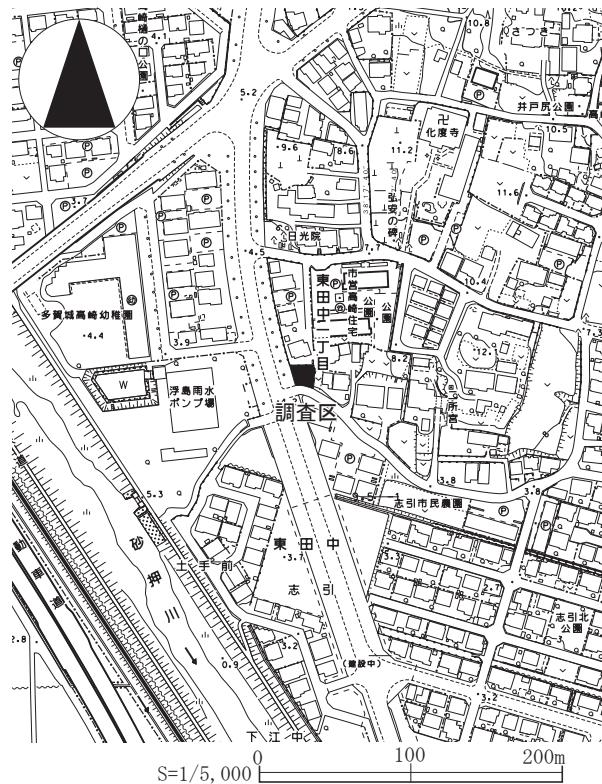
本件は、東田中一丁目地内における個人住宅建設に伴う確認調査である。

平成31年1月8日に、地権者より高崎遺跡の南端に位置する当該地での個人住宅建設についての協議書が提出された。計画では、住宅部分の基礎工事の際に、直径13.9cm、長さ5mの杭を打ち込む内容であったことから、遺跡への影響が懸念された。

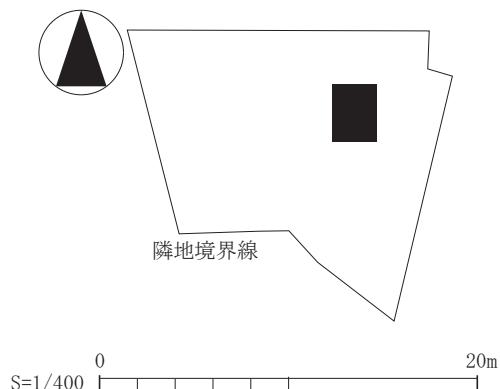
そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された工法以外では住宅を支えるための十分な地耐力を確保できないとのことから、申請された工法で行うこととなった。

地権者から平成31年2月3日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年3月6日から発掘調査に着手した。

はじめに、重機による掘削を開始し、現地表から2.4mの深さまで掘削したが、遺構や遺物は発見できなかった。写真撮影などの記録を作成し、当日のうちに埋め戻しまで行い、すべての作業を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区（北東から）

XI 高崎遺跡第117次調査

1 調査に至る経緯と経過

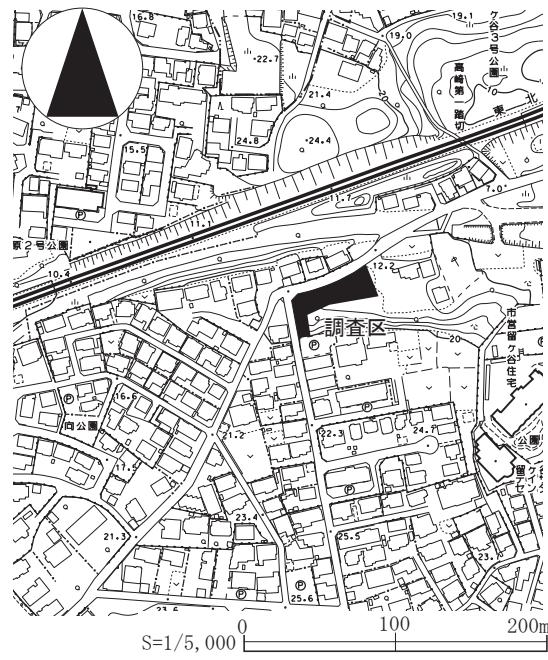
本件は、高崎一丁目地内における宅地造成工事に伴う確認調査である。

平成30年11月21日に、地権者より高崎遺跡の北東部に位置する当該地での宅地造成工事についての関わり協議書が提出された。計画では、住宅部分851.91m²の敷地に最大2.75mの盛土と擁壁工事のための切土を行うことから、遺跡への影響が懸念された。

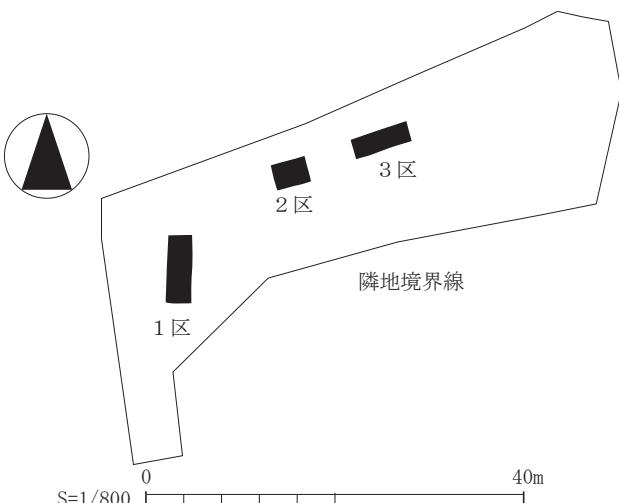
そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された工法以外では宅地造成の事業を実施できないとのことから、申請された工法で行うこととなった。

地権者から平成31年2月7日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年3月5日から発掘調査に着手した。

はじめに、調査区を西から1～3区と設定し、1区から順に重機による掘削を開始した。その結果、西側の1区は平坦な地形であったものの、2・3区は東に向かって傾斜する沢状の地形であることが判明し、遺構や遺物は発見できなかった。現地表から掘削した深さは、1区で1.6m、2・3区では2.0mである。写真撮影などの記録を作成し、当日のうちには埋め戻しまで行い、すべての作業を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



1区（南から）



3区（東から）

XII 高崎遺跡第118次調査

1 調査に至る経緯と経過

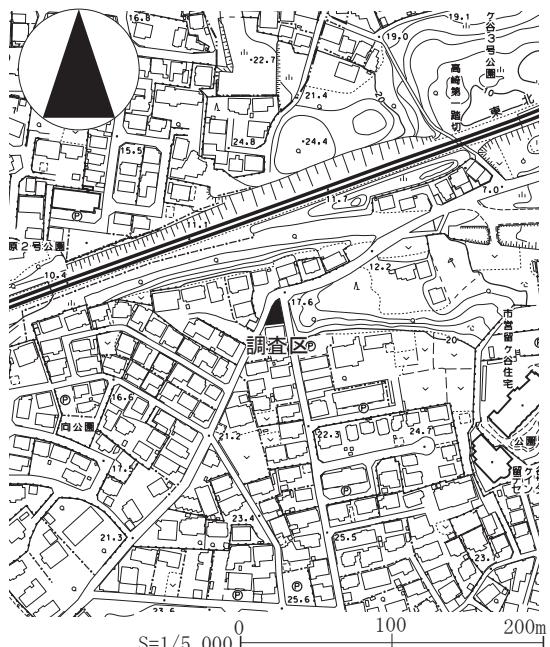
本件は、高崎一丁目地内における個人住宅建設に伴う確認調査である。

平成30年11月21日に、地権者より高崎遺跡の北東部に位置する当該地での個人住宅建設についての関わり協議書が提出された。計画では、住宅部分の基礎工事の際に、現地表面から最大1mの掘削を行うものであった。周辺では、現地表から10~15cm下で遺構を確認していることから、遺跡への影響が懸念された。

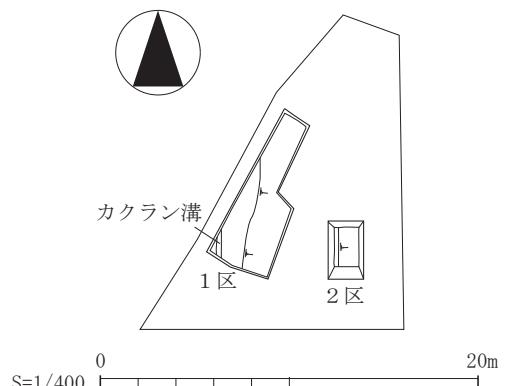
そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された工法以外では住宅を支えるための十分な地耐力を確保できないとのことから、申請された工法で行うこととなった。

地権者から平成31年3月1日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年3月6日から発掘調査に着手した。

はじめに、調査区を1・2区と設定し、1区から順に重機による掘削を開始した。その結果、現地表から0.3~1.0mまで掘り下げたが、東に向かって傾斜している地形を把握できたほかは、遺構や遺物は発見できなかった。写真撮影などの記録を作成し、当日のうちには埋め戻しまで行い、すべての作業を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 平面図



1区（北から）



2区（南から）

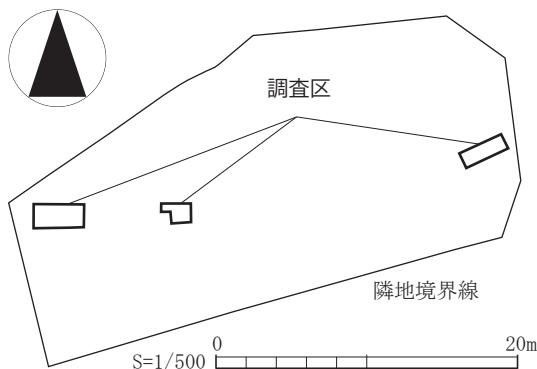
XIII 高崎遺跡第119次調査

1 調査に至る経緯と経過

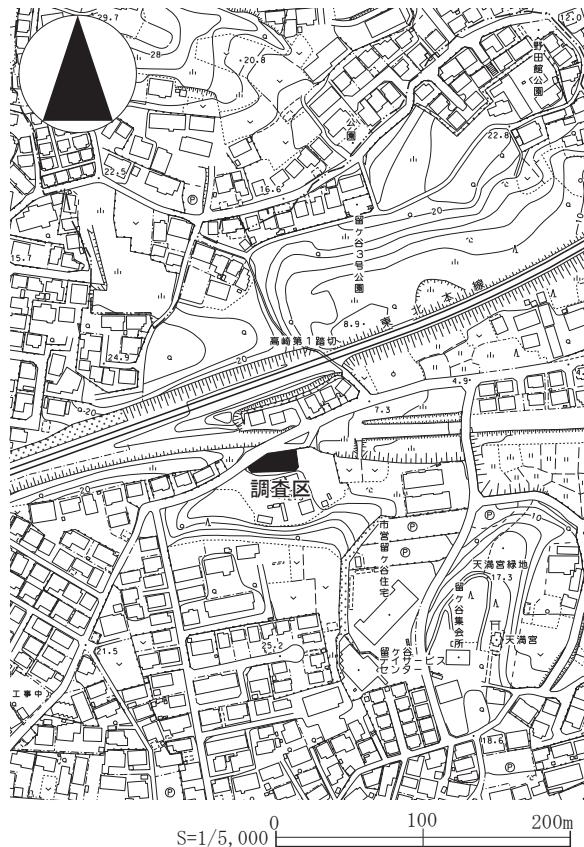
本件は、留ヶ谷一丁目地内における建売住宅新築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和元年5月31日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、敷地内の切土、給排水管敷設工事、擁壁設置により最深で1.3mの掘削を行う内容であった。周辺では当該区の南東側で平安時代の集落跡を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、当初計画のとおり施工するとの結論に至った。その後、7月16日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、7月22日に発掘調査を実施した。

調査では、住宅建築部分3か所に調査区を設定し、表土を現地表面から1.6mの深さまで重機により除去したところ、東側に向かって傾斜する沢状の地形に位置すること、現代の攪乱により広く損壊を受けていることが確認され、明確な遺構・遺物を発見することはできなかった。

以上から、計画地内に遺構面は存在しないと判断し、当日のうちに写真撮影及び調査区の埋め戻しを行い、現地調査をすべて終了した。



第2図 調査区配置図



第1図 調査区位置図



調査状況（東から）

XIV 高崎遺跡第120次調査

1 調査に至る経緯と経過

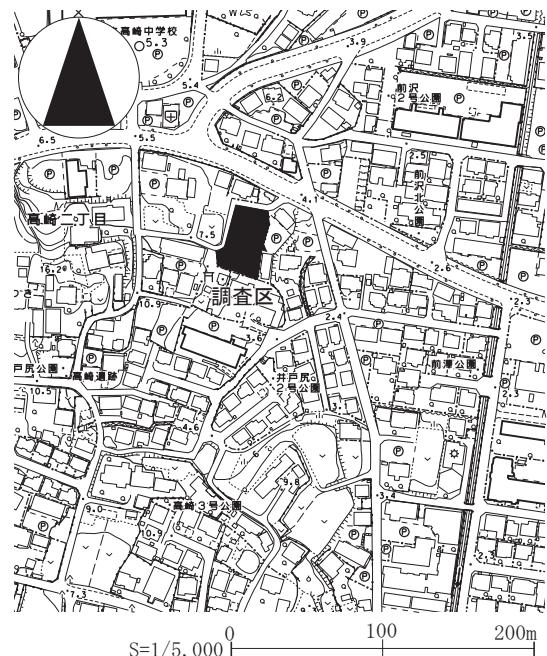
本件は、高崎二丁目地内における共同住宅新築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。令和元年6月4日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、外構工事や給排水管敷設工事で最深1mの掘削を行う内容であった。周辺では当該区の南側で第96次調査を実施しており、現地表面から20cmで遺構を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、当初計画のとおり施工するとの結論に至った。その後、7月26日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、7月31日に発掘調査を実施した。

調査では、住宅建築部分の北側、南西側、南側3か所に調査区を設定し、表土を現地表面から1.4mの深さまで重機により除去したところ、東側に傾斜する沢状の地形に位置すること、現代の削平や攪乱により広く損壊を受けていることが確認され、明確な遺構・遺物を発見することはできなかった。

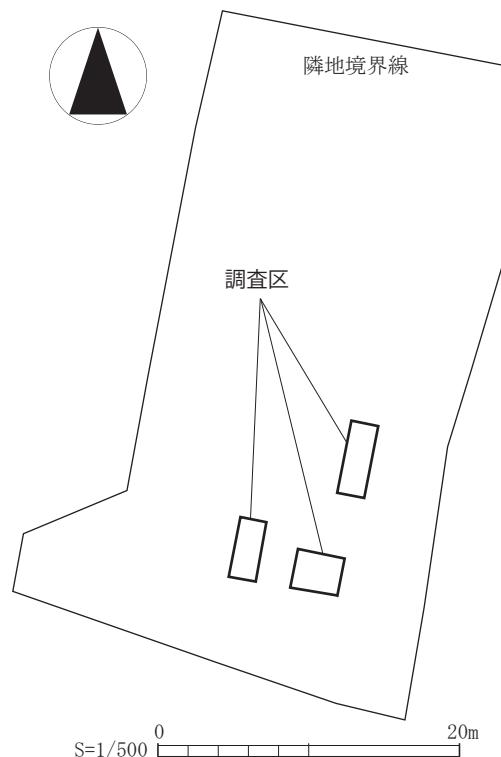
以上から、計画地内に遺構面は存在しないと判断し、当日のうちに写真撮影及び調査区の埋め戻しを行い、現地調査をすべて終了した。



北側調査状況（北から）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

XV 高崎遺跡第121次調査

1 調査に至る経緯と経過

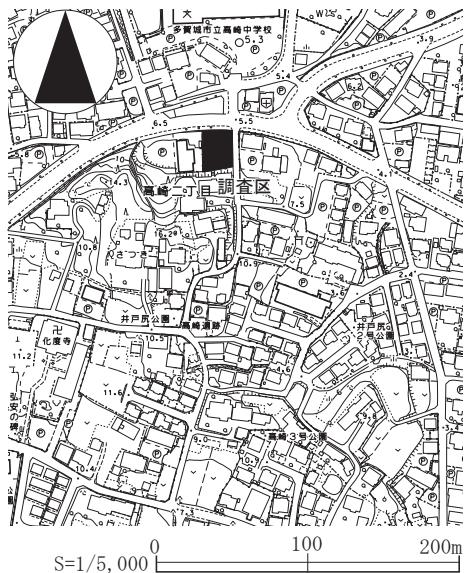
本件は、高崎二丁目地内における擁壁新設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成31年4月26日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画は、擁壁新設工事で最深2.4mの掘削を行う内容であった。周辺では当該区の北側で平安時代の集落跡を発見していることから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、当初計画のとおり施工するとの結論に至った。その後、8月20日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、8月26日に発掘調査を実施した。

調査では、擁壁新設部分の表土を現地表面から1mの深さまで重機により除去したところ、東側に向かつて傾斜する沢状の地形に位置すること、現代の削平や攪乱により広く損壊を受けていることが確認され、遺構・遺物を発見することはできなかった。

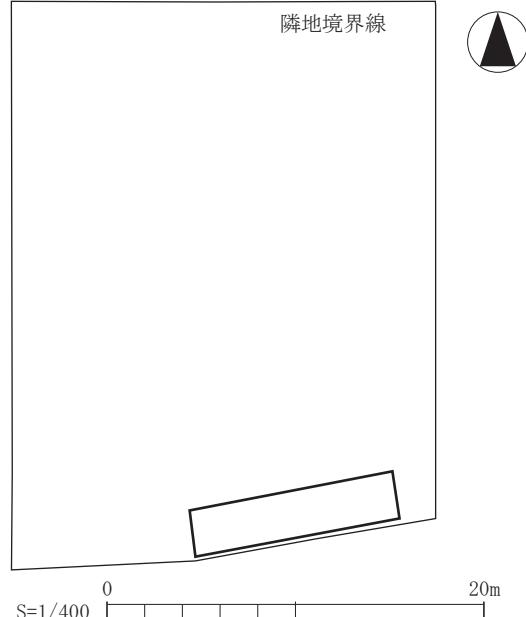
以上から、計画地内に遺構面は存在しないと判断し、当日のうちに写真撮影及び調査区の埋め戻しを行い、現地調査をすべて終了した。



調査状況（東から）



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

XVI 高崎遺跡第122次調査

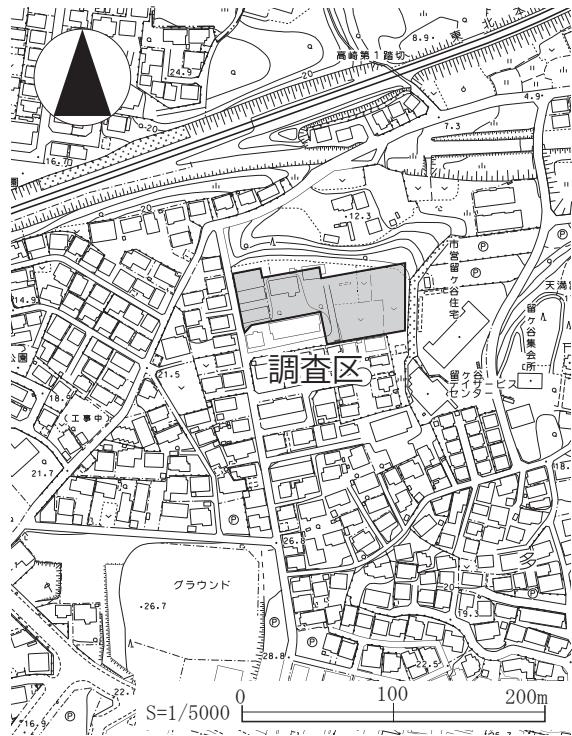
1 調査に至る経緯と経過

本調査は、留ヶ谷一丁目 231 番 2 外 4 筆における宅地造成工事に伴うもので、令和元年 6 月 27 日に地権者より高崎遺跡内における宅地造成と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。この計画は、約 4,000 m² の敷地に幅 6.0 m の道路を建設して宅地 13 区画を造成し、北東部の斜面に擁壁を設置するもので、現地表に最大 2 m の盛土を行い、道路部分への給排水管埋設工事では最大幅約 1 m、最大深約 1.5 m の掘削を、擁壁設置工事では最大幅 4.5 m、最大深 85 cm の掘削を行うというものである。

今回の工事対象地区の南側においては、平成 18 年の第 56 次調査で古代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土器埋設遺構、須恵器窯等を検出し、東側隣接地を対象とした平成 8 年の第 19 次調査では、縄文時代から中世に及ぶ遺構・遺物を発見している。工事対象地区周辺には各時代にわたる遺構が広範囲に分布している可能性が考えられた。

今回の対象地は、既に開発されて集合住宅が建設されていたことから、それらの影響が地下の遺構へ及んでいることが懸念された。そのため、対象地における遺構の有無と残存状況を把握する必要があり、確認調査を実施することとした。

令和元年 9 月 24 日、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、9 月 27 日より現地調査を開始した。道路建設予定地に 2 箇所、擁壁設置部分に 3 箇所のトレンチを設定し、重機により盛土等を除去した。道路建設予定地に設定した T1 トレンチでは、近代以降の工事による削平が地山面まで及んでおり、東端部でコンクリート造りの送電線跡を発見した。その東側の T 2 トレンチでは、西端部をのぞく広い範囲で攪乱が地山面まで及んでいる状況を確認した。9 月 28 日、T 1・T 2 トレンチにおいて遺構の有無を確認。T 1 トレンチでは遺構を確認できなかったが、T 2 トレンチ西端部の地山面において、旧表土に覆われる小ピットを確認した。擁壁設置部分に設置した T 3 トレンチでは 3.0 m 以上掘削しても地山に至らず、T 5 も攪乱が深くまで及んでいたことから調査を中断した。T 4 トレンチでは西半分に地山が現れたが、東半分は T 3 トレンチの方向に攪乱層が落ち込んでいる状況が見られた。10 月 2 日、調査の途中経過について原因者側に説明し、10 月 3 日に T 5 トレンチで攪乱層を除去して遺構がないことを確認し、トレンチの配置図を作成して調査を終了した。



第 1 図 調査区位置図

2 調査成果

T 1 トレンチ

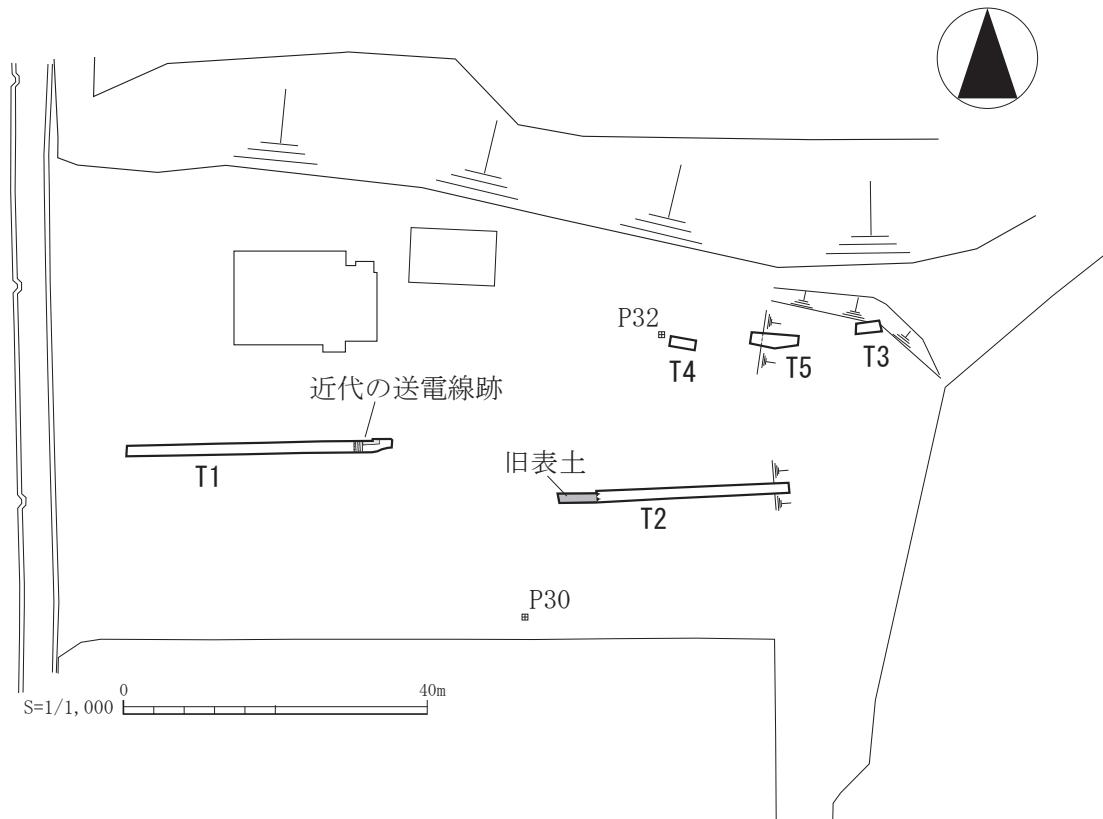
T 1 トレンチは地山面まで削平されており、コンクリートや瓦礫を含む層が地山面を覆っていた。東端部で蓋を伴ったコンクリート製の樋状の施設を発見し、コンクリートや瓦礫を含む層に直接覆われていた。近代の送電線基地に関わる施設と見られる。

T 2 トレンチ

T 2 トレンチの西端部で、現地表の約 80 cm 下が旧表土とみられる灰褐色土、約 95 cm 下が浅黄色の地山（ローム層）となっている。地山上面で黒色土に覆われる直径約 20 cm の小ピットを検出した。遺物は出土していない。

T 3・4・5 トレンチ

T 3 トレンチは 3.0 m 以上掘削しても地山に至らなかった。T 4 トレンチは西半分に地山が現れたが、東半分は T 3 トレンチの方向に攪乱層が落ち込んでいる状況が見られた。T 3・4 トレンチ周辺の現地形は、近年の造成工事によって形成された可能性が高い。T 5 トレンチは現地表より約 1.8 m 下まで攪乱されていた。



第2図 トレンチ配置図

3 まとめ

- (1) 対象地区の西側は既設建物の建設等で地山まで攪乱されており、東側は広い範囲で地形が大きく改変されていた。
- (2) 対象地区の中央部に一部で小ピットを検出した。この周辺が旧地形を残すと見られ、遺構が存在する可能性がある。



上左 : T1 トレンチ 近代の送電線跡（東より）

上右 : T1 トレンチ（西より）

下左 : T2 トレンチ（西より）

下右 : T2 トレンチ西端部土層堆積状況（南より）

XVII 山王遺跡第208次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字前田地内における個人住宅2棟（北側：1区、南側：2区）及び共同通路（3区）建設に伴う本発掘調査である。

平成30年9月13日（2区）と同年10月18日（1区）にそれぞれの地権者より当該地での個人住宅新築計画が、さらに平成31年2月19日にこの2件の住宅に接続する共同通路工事計画（3区）の埋蔵文化財の関わりについて協議書が提出された。計画では、住宅建築の基礎工事の際に地盤改良工事として直径40～60cmの杭状改良を、現地表から深さ6～7mまで打ち込む内容となっていたことから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、工法変更などで遺跡を保存することができないか協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないことから、本発掘調査を実施することとなった。

平成31年3月28日に依頼者と地権者から発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年4月16日から発掘調査に着手した。

調査区は、北から1区（北側住宅）、2区（南側住宅）、3区（共同通路）とし、1区から順に重機による掘削を行った。1・2区は、IV層上面で溝跡などを確認した。3区では、北側から掘削を開始したが、東西に隣接する住宅との距離が非常に近く、安全な勾配を確保しながら掘り下げるこことなったため、調査区の幅が限られたものとなった。3区の掘削を進めていく中で攪乱溝を発見したため、これより南側の遺構は失われていると判断し、間隔をあけて調査区を改めて設定した。そのため北側を3-1区、南側を3-2区とした。3-2区では、III層上面でSK 2703～2705 土壙などを確認し、さらに調査区東壁の土層観察では下層のIV層上面でも小溝跡と思われる遺構を検出し（註）、重機による掘削は13日で終了した。24日には検出作業が完了し、遺構の状況が把握できた。5月8日には基準杭を移設し、これ以降隨時写真や図面などの記録作成を行った。5月14日には、SK 2703～2705の遺物を取り上げ、5月28日には3-2区の調査を完了した。1～3-1区はIV層上面で検出した溝跡の調査を行い、6月3日に調査を終了した。6日に調査を終了し、7日に埋戻しを完了した。

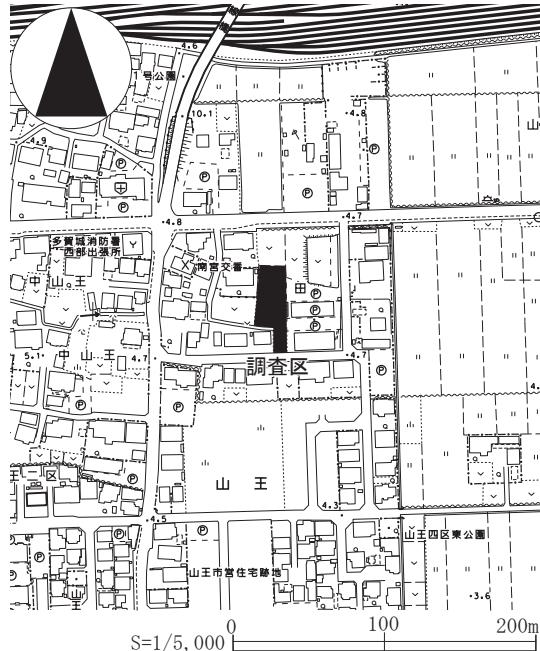
2 調査成果

（1）層序

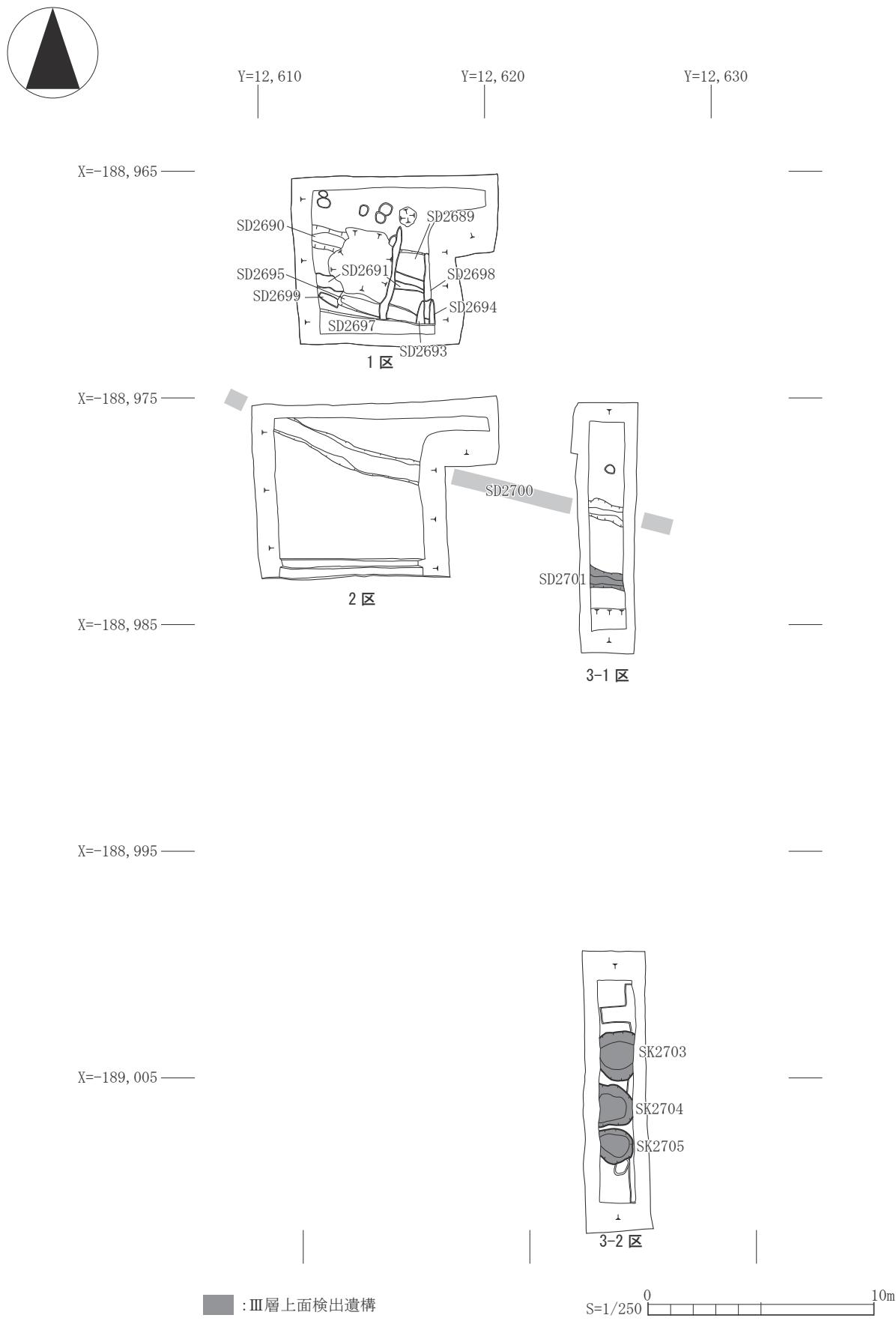
今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

I 1層：表土で厚さは約50cmである。

（註）すでに現地表面から約1m下まで下がっており、さらに調査区幅が約1.5mと狭いことから、これ以上深く掘削が及ぶと安全確保が困難となると判断し、3-2区でのIII層上面の遺構は、断面観察にとどめた。



第1図 調査区位置図

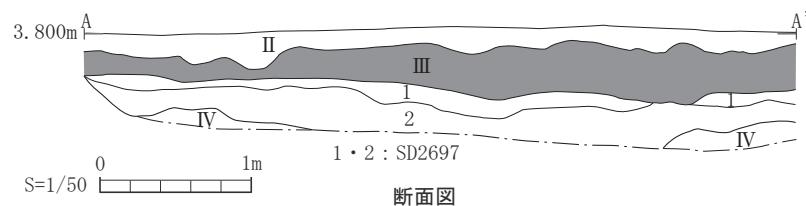
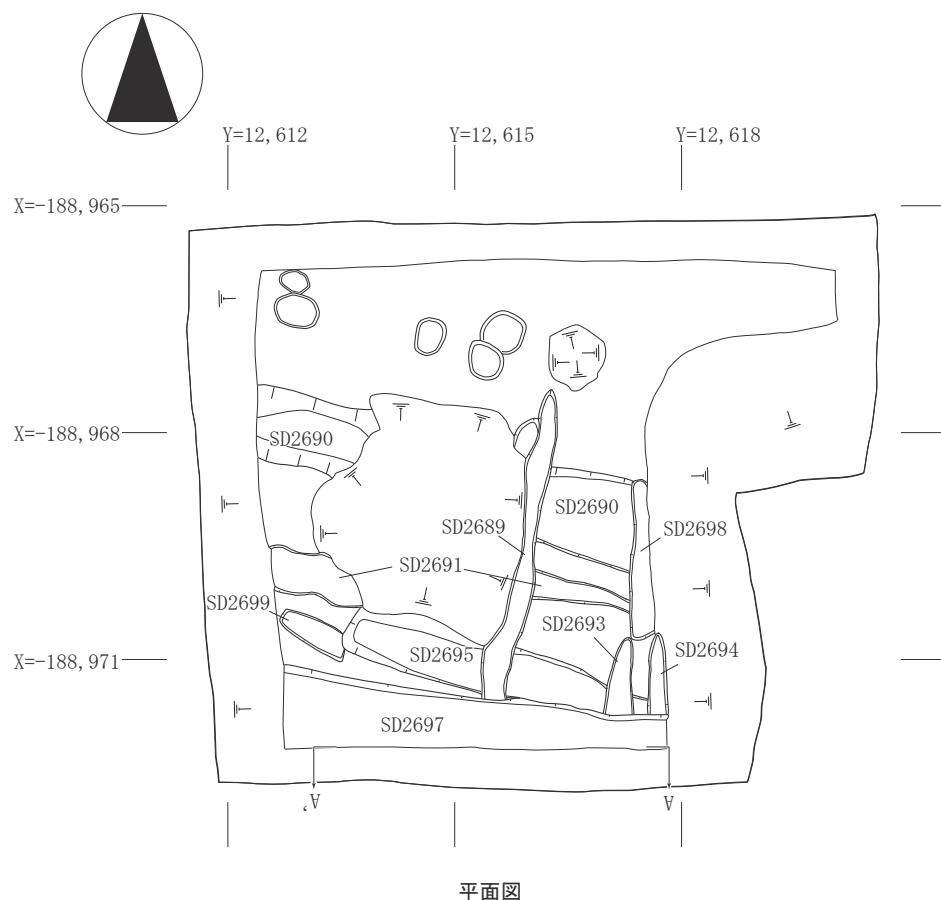


第2図 遺構平面全体図

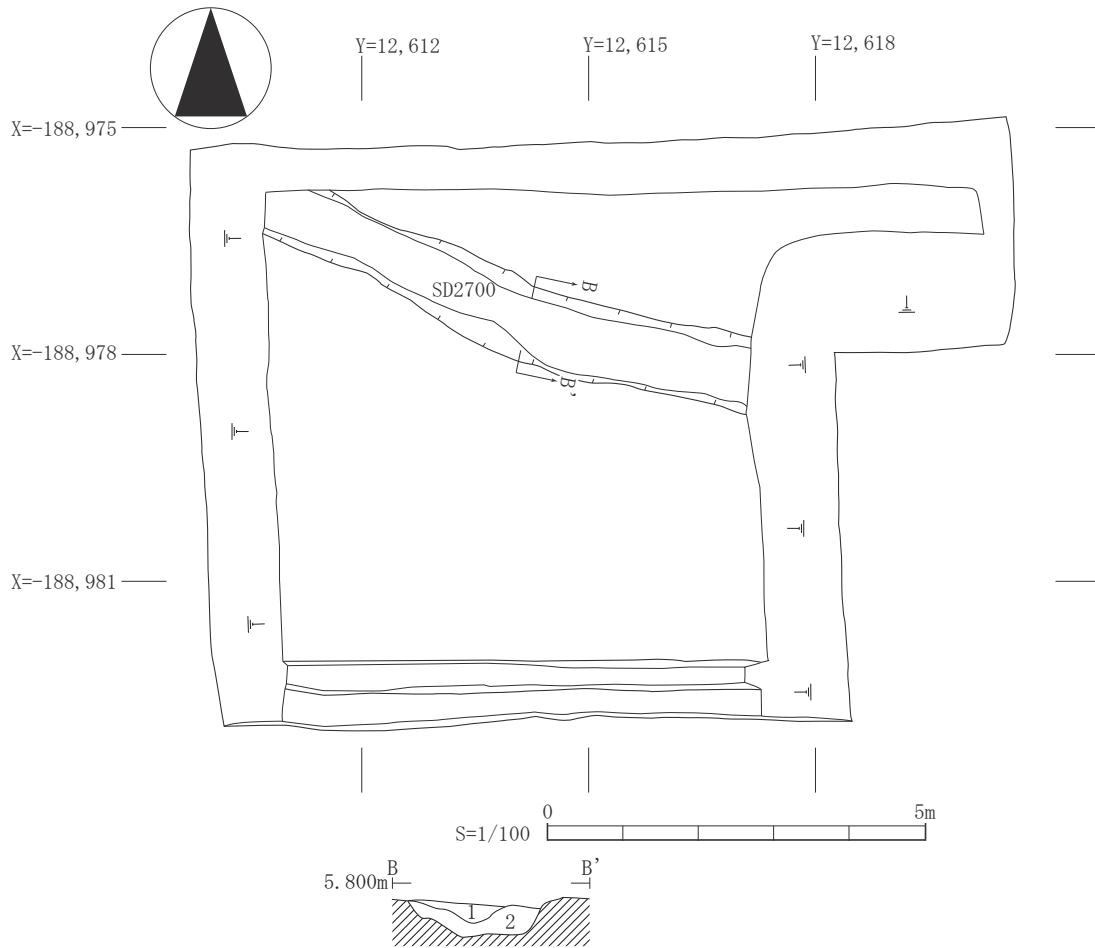
- I 2層：現代の耕作土。厚さは20～43cmである。
- II 層：1区でのみ確認した。褐色(10YR 4/3)粘質土で灰白色火山灰を微量に含む。厚さは15～20cmである。
- III 層：暗赤色(7.5YR 3/3)粘質土で斑状の白色土を少量含む。厚さは9～25cmである。この上面でSD 2701溝跡やSK 2703～2705土壤の遺構検出面となっている。
- IV 層：基盤層である。明黄褐色(10YR 6/6)粘質土で斑状の白色土を少量含む。この上面でSD 2700溝跡や小溝群等の検出面となっている。

(2) 発見した遺構

今回の調査では、III層上面及びIV層上面で遺構を発見した。以下遺構検出面ごとに述べる。



第3図 1区遺構平面図・断面図



第4図 2区遺構平面・断面図

〔IV層上面発見遺構〕

SD 2689 溝跡（第2・3図）

【位置】 1区中央で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】 SD 2690・2691・2695・2697と重複しており、SD 2697より古く、SD 2690・2691・2695より新しい。

【方向・規模】 方向は北で東に11度偏している。規模は長さ2m以上、上幅12～20cm、下幅6～17cmである。

SD 2690 溝跡（第2・3図）

【位置】 1区中央で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】 SD 2689・2698と重複しており、これらより古い。

【方向・規模】 方向は東で南に15度偏している。規模は、長さ2.5m以上、上幅45～60cm、下幅13～54cmである。

SD 2691 溝跡（第2・3図）

【位置】1区の南側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】SD 2698と重複しており、これより古い。

【方向・規模】東で南に6度偏している。規模は、長さ2.4m以上、上幅8～30cm、下幅5～26cmである。

SD 2693 溝跡（第2・3図）

【位置】1区の南東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】SD 2695・2697と重複しており、SD 2697より古く、SD 2695より新しい。

【方向・規模】方向は北で東に7度偏している。規模は、長さ51cm以上、上幅20cm、下幅17cmである。

SD 2694 溝跡（第2・3図）

【位置】1区の南東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】SD 2695・2697と重複しており、SD 2697より古く、SD 2695より新しい。

【方向・規模】方向はほぼ真北である。規模は、長さ53cm、上幅14cm、下幅10cmである。

SD 2695 溝跡（第2・3図）

【位置】1区南側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】SD 2689・2693・2694・2699と重複しており、SD 2699より新しく、これ以外より古い。

【方向・規模】方向は東で南に18度偏している。規模は、長さ2.2m以上、上幅33cm以上、下幅16～26cmである。

SD 2697 溝跡（第2・3図）

【位置】1区南側で発見した東西方向の溝跡である。

【重複】SD 2689・2693・2694・2695と重複しており、これらより新しい。

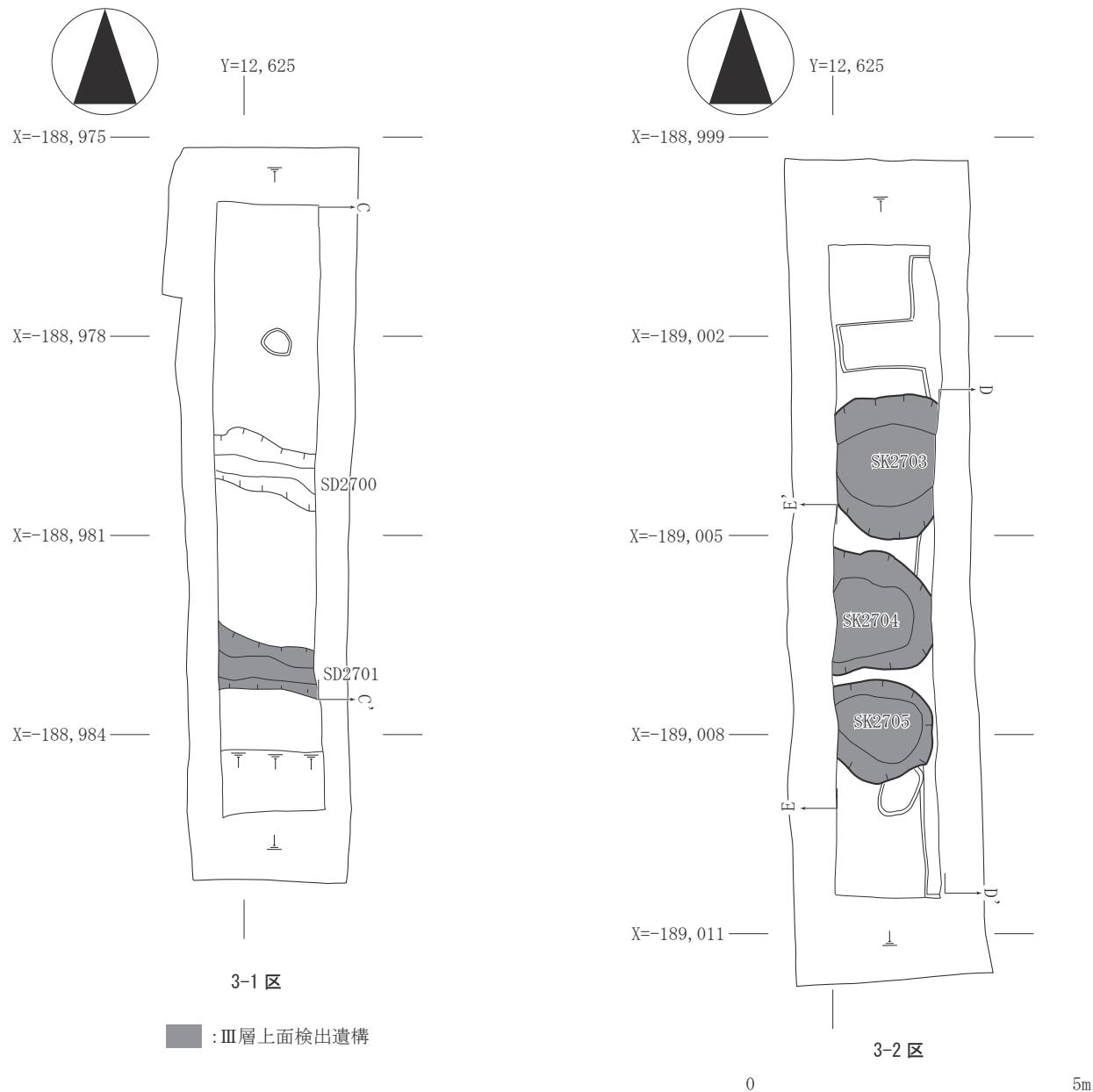
【方向・規模】方向は東で南に7度偏している。規模は、長さ2.5m以上、上幅53cm以上、下幅48cm以上である。

SD 2698 溝跡（第2・3図）

【位置】1区東側で発見した南北方向の溝跡である。

【重複】SD 2690・2691と重複しており、これらより新しい。

【方向・規模】方向はほぼ真北である。規模は長さ1m、上幅16cm以上、下幅14cm以上である。



第5図 3区遺構平面図

SD 2699 溝跡（第2・3図）

【位置】 1区南西側で発見した東西方向の溝跡である。

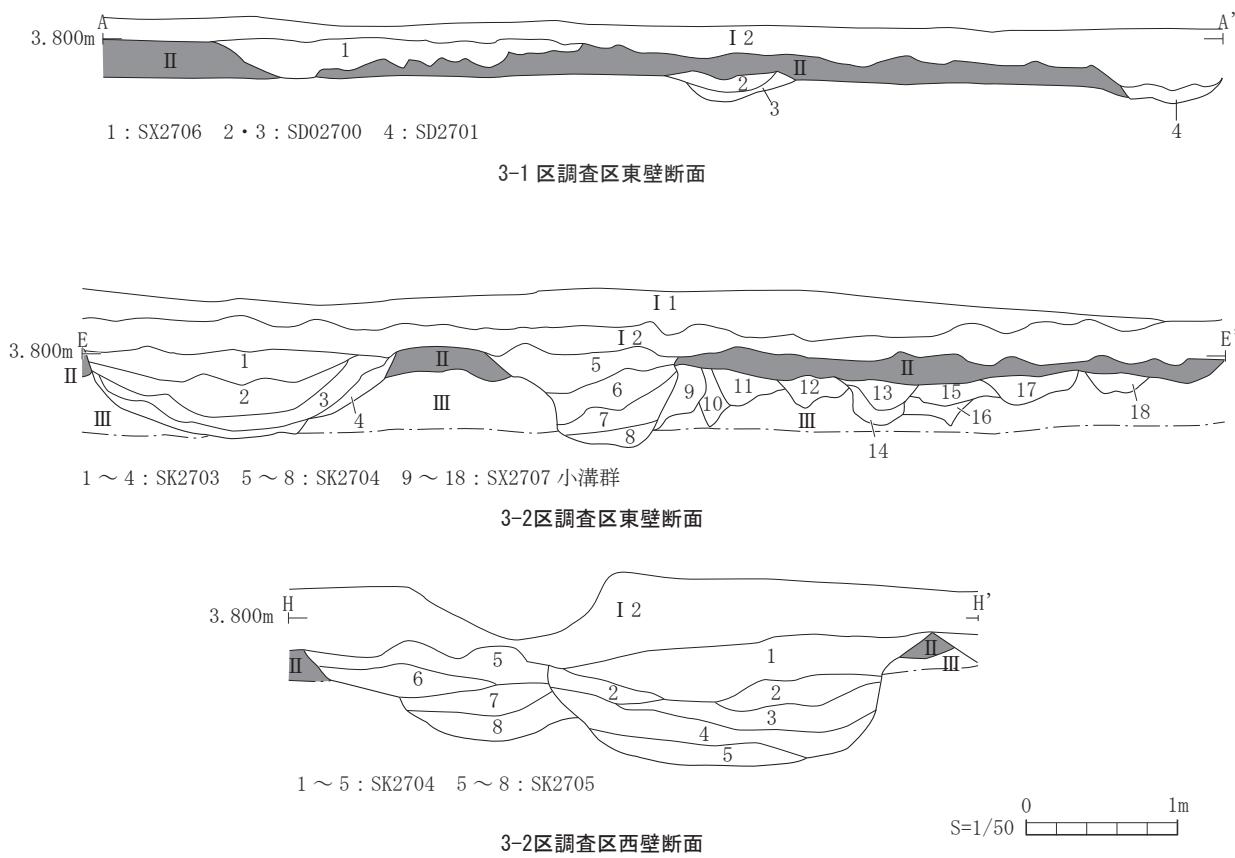
【重複】 SD 2695 と重複しており、こらより古い。

【方向・規模】 方向は東で南に 30 度偏している。規模は長さ 51 cm、上幅 37 cm、下幅 31 である。

SD 2700 溝跡（第2・4・5・6図）

【位置】 2区北側から3-1区中央にかけて発見した東西方向の溝跡である。

【方向・規模】 方向は東で南に 15 度偏している。規模は長さ 15.7 m、上幅 71 ~ 99 cm、下幅 45 ~ 75 cm、深さ 23 cm である。



第6図 3区調査区壁面断面図

【埋土】2層確認できた。1層はIV層に微量の起因する土を粒状に含む黒褐（10YR 3/2）砂質土、2層は少量のIV層に起因する土を斑状に含む黒褐（10YR 2/2）砂質土である。

【底面・壁】底面はやや凹凸しており、壁は斜めに立ち上がる。

S X 2707 小溝群（第7図）

【位置】3-2区南側の断面でのみ確認した小溝群である。東西方向と推測される。

【規模】上幅49～65cm、深さ12～38cmである。

【埋土】いずれも黒色土を斑状に含んでいる粘質土で明黄褐色（10YR 6/6）、にぶい黄褐色（10YR 5/4）、灰褐色（10YR 4/2）で、一部焼土やIV層に起因する土を斑状に含んでいる。

[III層上面発見遺構]

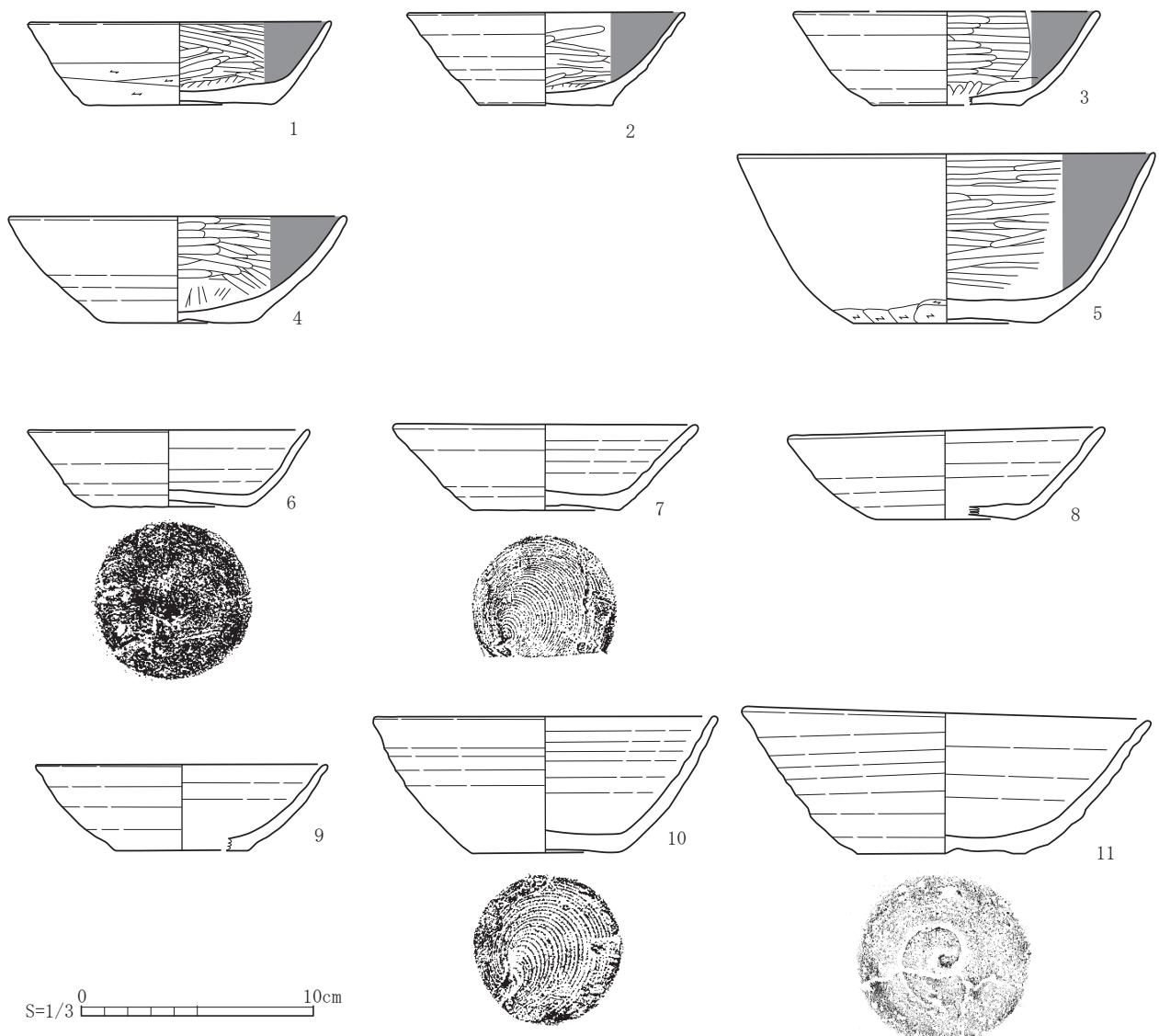
S D 2701 溝跡（第2・5・6図）

【位置】3-1区南側で発見した東西方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は東で南に5度偏している。規模は長さ1.4m以上、上幅0.6～1.0m、下幅22～35cm、深さ13cmである。

【埋土】IV層に起因する土を斑状に含む灰黄褐色（10YR 4/2）粘質土である。

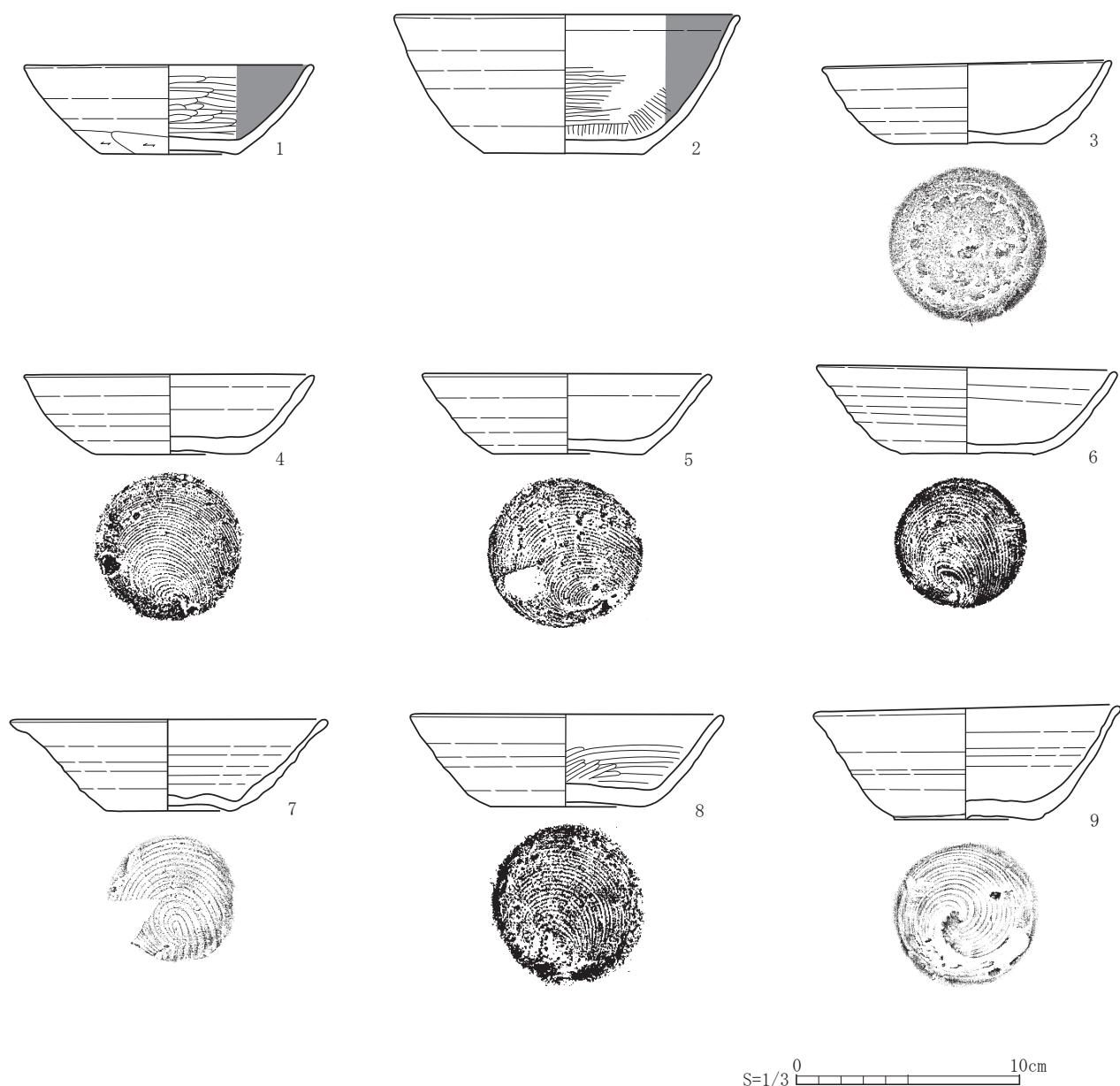
【底面・壁】底面はやや凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。



(単位: cm)

No	種類	調 整		口 径 残存率	底 径 残存率	器 高	写 真 図 版	登録 番 号	備 考
		外 面	内 面						
1	土師器 壺	ロクロナデ、回転ヘラケズリ 底部:回転糸切り→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(13.0) 2/24	8.2 24/24	3.6		R1	B I c
2	土師器 壺	ロクロナデ 底部:ヘラ切り	ヘラミガキ 黒色処理	(12.0) 2/24	5.8 24/24	4.0		R2	B III
3	土師器 壺	ロクロナデ、一部ヘラケズリ 底部:回転ヘラ切り	ヘラミガキ 黒色処理	(13.0) 3/24	(6.6) 10/24	4.0		R26	B III
4	土師器 壺	ロクロナデ 底部:手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(14.4) 4/24	(7.4) 14/24	4.6		R25	B II
5	土師器 壺	ロクロナデ、一部ヘラケズリ 底部:ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(18.0) 2/24	8.0 24/24	7.3		R12	B III a
6	須恵器 壺	ロクロナデ 底部:ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(12.0) 9/24	6.8 24/24	3.3		R6	II a
7	須恵器 壺	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.0) 8/24	(6.4) 17/24	3.7		R7	V
8	須恵器 壺	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.7) 13/24	(5.9) 17/24	4.0	2-3	R20	V
9	須恵器 壺	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(12.6) 6/24	(6.0) 7/24	3.7		R27	III
10	須恵器 壺	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(14.8) 5/24	6.4 24/24	5.9		R4	V
11	土師器 壺	ロクロナデ 底部:ヘラ切り	ロクロナデ	(17.6) 20/24	7.3 24/24	6.3	2-4	R3	III

第7図 SK2703 土壌出土遺物



(単位: cm)

No	種類	調 整		口 径 残存率	底 径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外 面	内 面						
1	土師器 坏	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(13.0) 10/24	6.0 24/24	4.0	R13	3-1	B II
2	土師器 坏	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	(15.5) 14/24	7.2 24/24	6.2	R11	3-2	B II
3	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 14/24	7.0 24/24	3.7	R17	3-3	III
4	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.0) 11/24	6.7 24/24	3.6	R18	3-4	V
5	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.9) 15/24	6.8 24/24	3.6	R19	3-5	V
6	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.4) 22/24	6.0 24/24	4.0	R14	3-6	V
7	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.3) 7/24	(5.8) 21/24	4.1	R21		V
8	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ→ ヘラミガキ	(14.0) 16/24	6.9 24/24	4.0	R16	3-7	V
9	須恵器 坏	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.6) 19/24	6.6 24/24	5.1	R15	3-8	

第8図 SK2704 土壌出土遺物

SK 2703 土壙（第2・5・6図）

【位置】3-2区T中央で確認した不整形の土壙である。

【規模】南北2.1m、東西1.5m以上、深さ59cmである。

【埋土】4層確認した。1層はIV層に起因する粒と炭化物と焼土を含む灰黄褐色（10YR 5/2）粘質土、2層はIV層に起因する粒と炭化物と焼土を含む灰黄褐色（10YR 4/2）粘質土、3層はIV層に起因する粒と炭化物を含む暗褐色（10YR 3/3）粘質土、4層はIV層に起因する土を斑状に含む褐色（10YR 4/3）粘質土である。

【底面・壁】底面は丸く窪んでおり。壁は斜めに立ち上がっている。

【遺物】土師器坏（B I c・B III・B III a）（第7図1～3）、須恵器坏（II a・III・V）（第7図4～8）・高台付坏（第7図9）・双耳坏（第7図10）が出土している。

SK 2704 土壙（第2・5・6図）

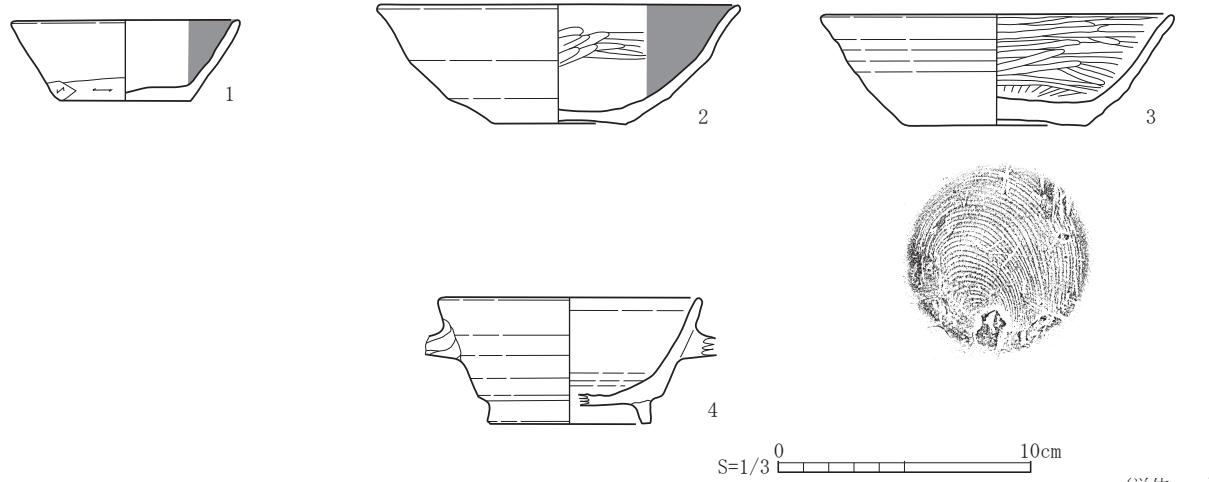
【位置】3-2区中央で確認した不整形の土壙である。

【重複】SK 2705と重複しており、これより新しい。

【規模】南北1.9m、東西1.5m以上、深さ90cmである。

【埋土】5層確認できた。1層はIV層に起因する斑状の土と多量の炭化物を含むにぶい黄褐色（10YR 4/3）粘質土、2層はIV層に起因する斑状の土と少量の炭化物を含む灰黄褐色（10YR 4/2）粘質土、3層はIV層に起因する斑状の土と微量の炭化物を含む灰黄褐色（10YR 4/2）、4層は多量のIV層に起因する斑状の土と微量の炭化物を含む灰黄褐色（10YR 5/2）粘質土、5層は少量のIV層に起因する斑状の土を含む褐灰色（10YR 4/1）粘質土である。

【遺物】土師器坏（第8図1・2）（B II）、須恵器坏（第8図3～9）（III・V）が出土している。



No	種類	遺構	層位	調整		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
				外 面	内 面						
1	土師器 坏	SK2705	1層	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ 底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 内面黒色処理	9.0 24/24	(5.2) 23/24	3.2	2-5	R22	B II
2	土師器 坏		III層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ 内面黒色処理	(14.3) 4/24	5.3 24/24	4.7		R23	B V
3	須恵器 坏		III層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ →ヘラミガキ	(13.8) 11/24	7.2 24/24	4.4	2-6	R5	V
4	須恵器 双耳坏		III層	ロクロナデ 底部：ナデ	ロクロナデ	(10.2) 6/24	(6.4) 10/24	5.0		R24	

第9図 SK2705 土壙及びIII層 出土遺物

SK 2705 土壙（第2・5・6図）

【位置】3-2区南側で発見した不整形の土壙である。

【重複】SK 2704と重複しており、これより古い。

【規模】南北1.5m、東西1.5m以上、深さ56cmである。

【埋土】4層確認した。1層は炭化物と少量のIV層に起因する斑状の土と微量の焼土粒を含むにぶい黄褐色（10YR 5/3）粘質土、2層は炭化物とIV層に起因する土を斑状に含むにぶい黄褐色（10YR 4/3）粘質土、3層はIV層に起因する斑状の土と少量の炭化物を含む灰黄褐色（10YR 4/2）粘質土、4層は炭化物を少量含むにぶい黄褐色（10YR 5/3）粘質土である。

【遺物】土師器壺（第9図1）（B II）が出土している。

3まとめ

今回の調査では、SK 2703・2704 土壙から比較的まとまった資料が出土したので、これを中心に年代の検討を行う。

（1）出土遺物の特徴

SK 2703 土壙出土遺物：破片を含めて195点出土しており、種類は土師器壺（B I c類・B III類・B III a類）・甕（B類）、須恵器壺（II a類・III類・V類）・甕、円面硯、平瓦がある。破片を含む点数については表1のとおりである。そのうち土師器壺は35点出土しており、うち切り離し技法が分かるものは8点あるが、B III類が半数を占め、B V類は全く含まれていない。土師器甕は238点出土しており、判別できるものはすべてB類である。須恵器壺は35点出土しており、うち切り離し技法が分かるものは13点出土している。III類とV類のみで占められ、ほぼ同数である。底径／口径比については、土師器壺で0.44～0.63、須恵器壺で0.41～0.57である。

SK 2704 土壙出土遺物：破片を含めて130点出土しており、出土しているのは土師器壺（B I類・B II類・B III類）、須恵器壺（III類・V類）、製塩土器、丸瓦である。破片を含む点数については表1のとおりである。そのうち土師器壺は31点出土しており、うち切り離し技法が分かるものは10点あるが、B I類が主体を占め、B V類は全く含まれていない。土師器甕は52点出土しており、判別できるものはすべてB類である。須恵器壺は24点出土中、切り離し技法が分かるものは14点出土しており、確認できるものはIII類とV類のみで、III類がV類よりやや多い。底径／口径比については、土師器壺で0.31～0.46、須恵器壺で0.41～0.54である。

（2）遺構の年代

前述したこれらと近い土器様相を示す資料として、9世紀前葉頃の多賀城跡SE 2101 B第III層、9世紀中葉頃の同SK 2167、9世紀後半頃の鴻の池地区第10層と比較する。

SK 2703 土壙出土遺物：須恵器壺の底径／口径比については、多賀城跡SK 2167とはほぼ同じである

SK 2703 土壙		SK 2704 土壙	
土師器	壺	B I c	2
	壺	B I	1
	壺	B II	1
	壺	B III a	1
	壺	B III	3
	甕	B	27
	甕	小計	35
	甕	B	43
	甕	不明	100
	甕	小計	143
須恵器	壺	III	7
	壺	V	6
	壺	不明	22
	壺	小計	35
	甕		25
合計			238
土師器	壺	B I	6
	壺	B II	3
	壺	B III	1
	壺	B	21
	甕	小計	31
	甕	B	17
	甕	不明	35
	甕	小計	52
	須恵器	III	8
	須恵器	V	6
合計			130

表1 SK 2703・2704 土壙出土遺物集計表

が、多賀城跡 S E 2101 B 第III層出土土器の中には本資料の最大値 0.57 よりが大きいものが一定数みられる。土師器坏の底径 / 口径比については、S E 2101 B 第III層及び S K 2167 の方が底径の小さいものが少數認められるが、大部分は本資料とほぼ同じである。一方、多賀城跡鴻の池第 10 層出土土器は、本資料の最小値である 0.44 よりも小さい値を示すものが大部分を占めている。底部の切り離し技法及び再調整技法についてみると、須恵器坏は多賀城跡 S E 2101 B 第III層及び同 S K 2167 が V 類が 1 ~ 3 割認められるのに対して、本資料は 5 割近くありその比率が高い。また土師器坏は本資料に B V 類は認められないが、S E 2101 B 第 III 層及び同 S K 2167 は 1 ~ 2 割程度、多賀城跡鴻の池第 10 層出土土器には 5 割近く確認できる。

以上のことから、本資料は多賀城跡 S E 2101 B 第III層出土土器よりも新しく、同鴻の池第 10 層出土土器よりも古いことがうかがわれ、同 S K 2167 と共に通点が最も多いといえる。このことから、およそ 9 世紀中葉頃とみておきたい。

S K 2704 土壌出土遺物：須恵器坏の底径 / 口径比については、多賀城跡 S K 2167 とはほぼ同じであるが、多賀城跡 S E 2101 B 第III層出土土器の中には本資料の最大値 0.54 よりが大きいものが一定数みられる（註）。底部の切り離し技法及び再調整技法についてみると、須恵器坏は多賀城跡 S E 2101 B 第III層及び同 S K 2167 が V 類が 1 ~ 3 割認められるのに対して、本資料は 4 割程度ありその比率が高い。

以上のことから、本資料は多賀城跡 S K 2167 と共に通点が最も多いといえ、同 S E 2101 B 第III層出土土器よりも新しく、同鴻の池第 10 層出土土器よりも古いことがうかがわれる。ただし、S K 2167 よりも須恵器坏（V 類）の比率が高い点で、新しい要素が見て取れるが、具体的な時間幅を考えるための手掛かりは得られなかったことから、およそ 9 世紀中葉頃としておきたい。

参考文献

- 宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡調査研究所年報1991』1992
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡調査研究所年報1992』1993

(註) 土師器坏の底径 / 口径比については、本資料は 2 点のみと少なく、検討する要素としてはま難しいことから、ここでは取り上げなかつた。また、土師器の底部の切り離し技法及び再調整技法についても、他の比較資料と比べて出土点数が少なく、判断材料としては適さないと判断した。



1 1区全景（西から）



2 2区全景（西から）

写真図版 1



1 3-1区全景（南から）



2 3-2区全景（北から）



第7図8

3 SK2703土壙出土 須恵器坏 (R 20)



第7図11

4 SK2703土壙出土 須恵器坏 (R 3)



第9図1

5 SK2705土壙出土 土師器坏 (R 22)



第9図3

6 Ⅲ層出土 須恵器坏 (R 5)

写真図版2



第8図1

1 SK2704土壌出土 土師器坏 (R13)



第8図2

2 SK2704土壌出土 土師器坏 (R11)



第8図3

3 SK2704土壌出土 須恵器坏 (R17)



第8図4

4 SK2704土壌出土 須恵器坏 (R18)



第8図5

5 SK2704土壌出土 須恵器坏 (R19)



第8図6

6 SK2704土壌出土 須恵器坏 (R14)



第8図8

7 SK2704土壌出土 須恵器坏 (R16)



第8図9

8 SK2704土壌出土 須恵器坏 (R15)

写真図版3

XVII 山王遺跡第209次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字山王三区地内における店舗新築工事に伴う確認調査である。

平成30年10月23日、事業者より当該事業と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、約3,300m²の敷地に約990m²の店舗を建築するもので、現況地盤に17cm盛土をした上で、基礎部分を90cm掘削する内容であった。当該地は、平成3年度に第13次調査が行われ、現地表から約90cmの深さで南北道路跡（西7道路）、東西道路跡（南1道路）などの遺構が発見されており、遺構の広がりと道路跡の位置や状況を把握する必要から確認調査を行うこととなった。

事業者及び地権者から平成31年3月27日に発掘調査の依頼書と承諾書の提出を受け、平成31年4月13日から発掘調査に着手した。調査区は2箇所設定し、西から1区、2区とした。重機で各調査区の盛土・表土を除去し、その際、Ⅱ区西側で第13次調査区の一部を確認した。遺構については、Ⅲ層上面で東西道路跡などを確認した。15日からⅢ層上面で遺構の精査を行うとともに、排水及び遺構観察のための側溝を掘った。側溝での断面観察により道路跡に複数期の変遷があることがわかった。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は令和元年5月31日に終えた。6月3・4日に埋戻しを行い、10日に機材の撤収を完了し、すべての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

I 1層：現代の盛土。山砂を多く含む。厚さは約80cmである。

I 2層：オリーブ黒色(5Y3/2)粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約10cmである。土師器壺(B V類)・高台付壺・甕(B類)、須恵器壺(II類・V類)・甕・瓶、須恵系土器壺、灰釉陶器、綠釉陶器、平瓦などが出土している。

II 層：暗褐色(7.5YR3/4)土である。酸化鉄を含む。厚さは約3cmである。

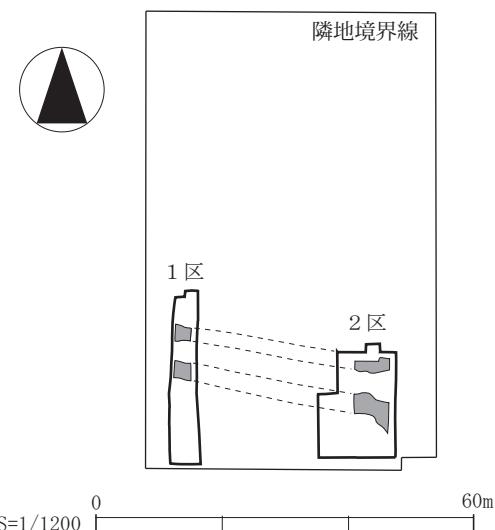
III 層：黒褐色(7.5YR3/1)土である。炭化物を含む。上面が古代の遺構検出面である。厚さは5～20cmである。土師器壺(B V類)・甕、須恵器壺(V類)・甕が出土している。

IV 層：褐灰色(7.5YR4/1)土で、VI層土ブロックを含む。灰白色火山灰ブロックを微量に含む(註)。上面がSD2671溝跡a期・SD2672溝跡a期の遺構検出面である。厚さは5～20cmである。

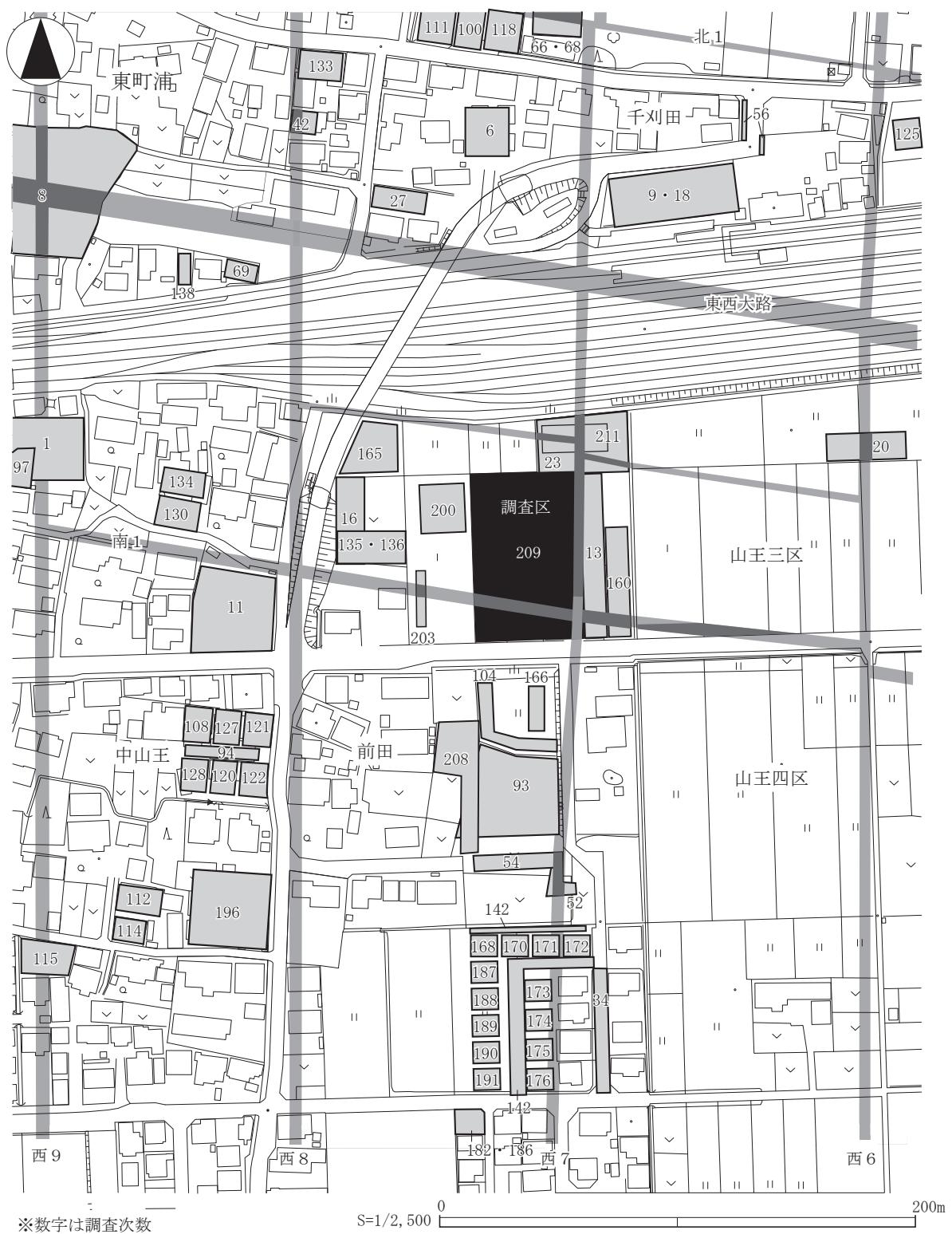
V 層：黒褐色(2.5Y3/2)土で、VI層土ブロック・黒褐色粘質土及び酸化鉄を含む。II区で確認した。厚さは5～10cmである。

VI 層：黄褐色(2.5Y5/4)土である。上面がSD2673～2679溝跡、ピット等の遺構検出面である。

(註) IV層で観察された灰白色火山灰については、微量であることと、III層上面で検出したP1の柱抜き取り穴最上層での灰白色火山灰の自然堆積と層位的矛盾が生じるため、下層に滲みたものと考える。



第1図 調査区配置図



第2図 第209次調査区と周辺の調査区

(2) 発見した遺構

今回の調査では、Ⅲ層上面、Ⅳ層上面、V層上面で遺構を検出した。主な遺構を記載する。

[Ⅲ層上面、Ⅳ層上面]

S X2670南1道路跡A期・B期はⅣ層上面検出で、その他はⅢ層上面検出である。

S X2670南1道路跡（第3～5図）

【位置】 1・2区の北半部に位置する。位置や方向及び規模などから、多賀城南面に施行された道路網のうち、南1道路に相当する。

【変遷】 側溝埋土の検討から3時期の変遷（A期→B期→C期）を確認した。

【道路幅】 C期の道路幅（側溝心々間）は1区で約5.6m、2区で約8.0mある。B期の道路幅（側溝心々間）は1区で約6.7mある。

【路面】 路面堆積層は確認されなかった。

【重複】 A期は柱穴1と重複し、これより古い。C期はSD2678溝跡と重複し、これより新しい。

SD2671溝跡北側溝（第3～5図）

a期： 北側溝で最も古い時期にあたる。2区では調査区外となり確認できなかった。

【規模】 長さは1・2区合わせ34.5m、上幅約1.89m以上、深さ54cm以上である。

【壁・底面】 逆台形である。

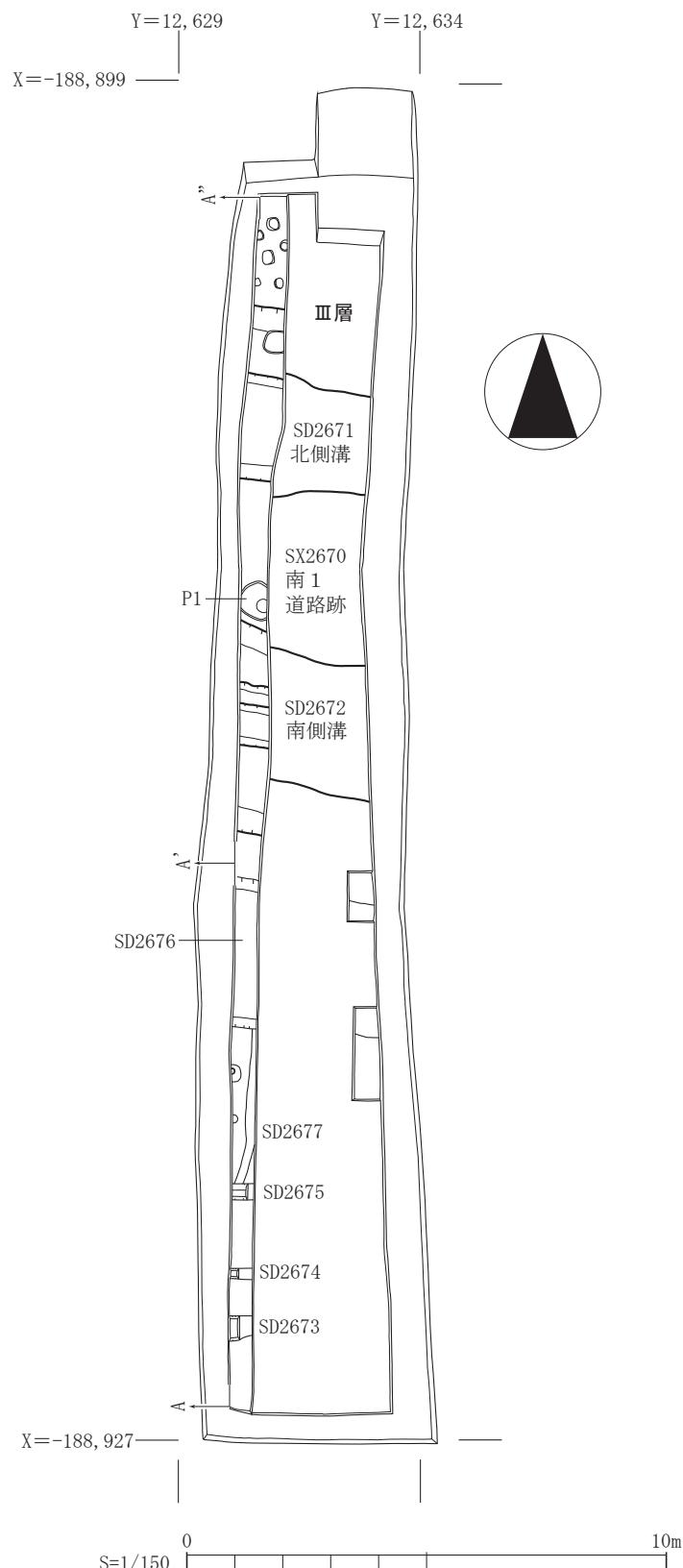
【埋土】 3層確認し、自然堆積である。

【遺物】 土器器坏（BV類）・甕が出土している。

b期： a期と比べて位置を南に移して構築されている。2区では調査区外となり確認できなかった。

【規模】 長さは1・2区合わせ34.5m、上幅3.27m以上、深さ約70cmである。

【壁・底面】 逆台形である。



※Ⅲ層での南1道路跡側溝ラインは第4図のSD2671cの2・3層、SD2672cの7・8層の検出ラインを示している。

第3図 1区平面図

【埋土】5層確認した。1・4層はVI層土ブロックを多く含み人為堆積で、他は自然堆積である。3層に灰白色火山灰ブロック（2次堆積）を含む。

【遺物】土師器壺（B類・BⅡ類）・甕（A類・B類）、須恵器甕、須恵系土器壺が出土している。

c期：b期と比べて位置を南に移して構築されている。

【規模】長さは1・2区合わせ34.5m、上幅は1区で約4.5m、2区で約4.8m、深さ約1.0mである。

【壁・底面】上が開くU字形である。

【埋土】1区では7層確認し、自然堆積である。2区では9層確認し、自然堆積である。

【遺物】土師器壺・甕（A類・B類）、須恵器壺（II類）・甕、丸瓦が出土している。

SD2672溝跡南側溝（第3～5図）

a期：南側溝で最も古い時期にあたる。

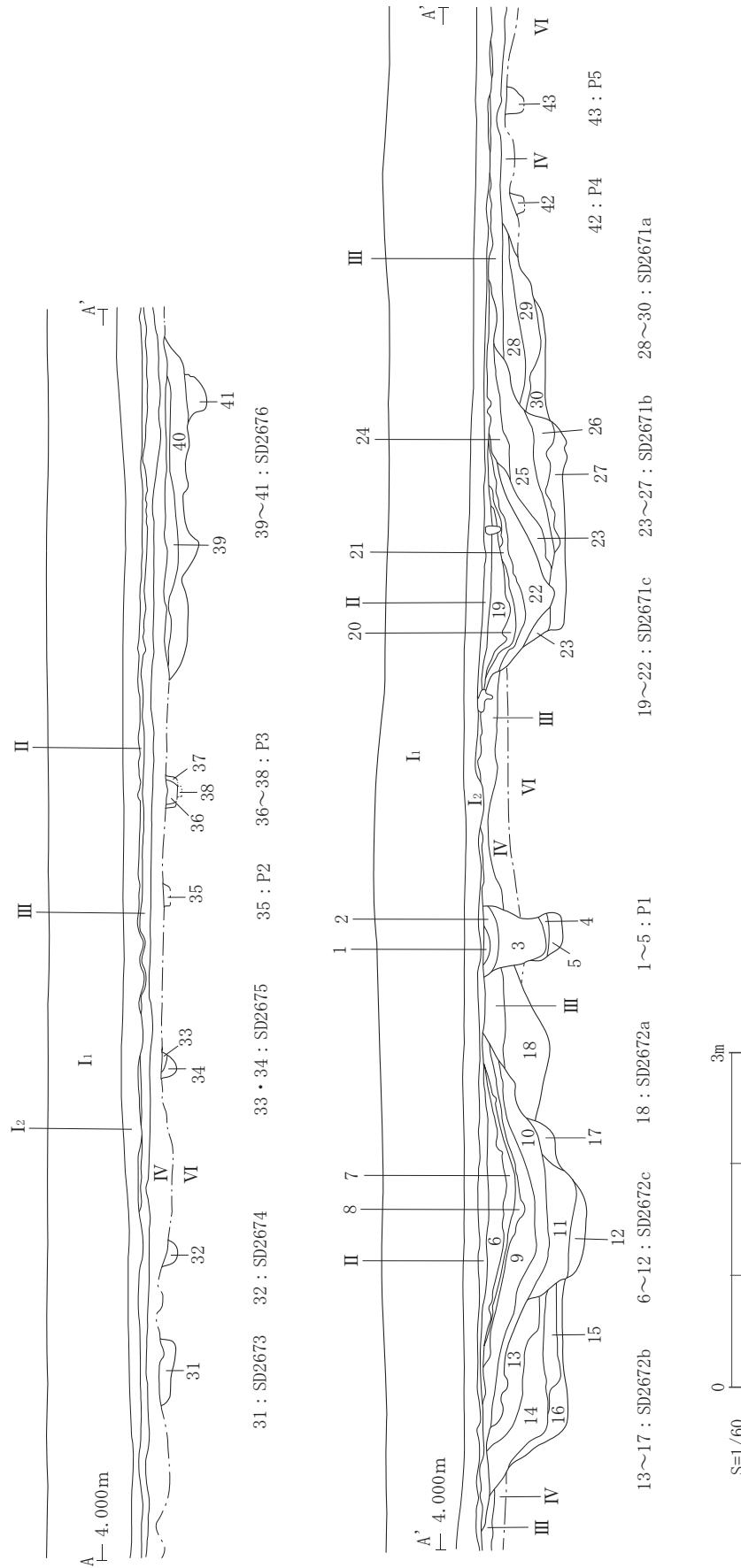
【規模】長さは1・2区合わせ34.5m、上幅約1.4m以上、深さ約60cmである。

【壁・底面】逆台形である。

【埋土】1層確認し、自然堆積である。

【遺物】遺物は出土していない。

b期：a期と比べて位置を南



第4図 1区西壁断面図

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	P1	1	灰白 (7.5Y8/1)	シルト	灰白色火山灰（自然堆積）。
2	P1	2	黒褐 (10YR3/1)	シルト	柱抜き取り穴。柱抜取穴。
3	P1	3	黒褐 (7.5YR3/1)	シルト	炭化物・VI層土ブロックを含む。柱抜取穴。
4	P1	4	暗褐 (10YR3/3)	シルト	炭化物・VI層土ブロックを含む。柱穴掘方。
5	P1	5	暗褐 (10YR3/3)	シルト	炭化物・VI層土ブロックを多く含む。柱穴掘方。
6	SD2672c	1	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	炭化物含む。
7	SD2672c	2	黒 (10YR1.7/1)	粘土	
8	SD2672c	3	黒褐 (10YR2/2)	粘土	
9	SD2672c	4	黒褐 (10YR3/1)	粘土	炭化物を含む。
10	SD2672c	5	黒褐 (10YR3/2)	粘土	炭化物を含む。
11	SD2672c	6	暗灰黄 (2.5Y4/2)	粘土	炭化物を含む。
12	SD2672c	7	黒褐 (2.5Y3/1)	粘土	VI層土ブロックを含む。
13	SD2672b	1	褐 (10YR4/4)	粘土	VI層土ブロックを含む。
14	SD2672b	2	オリーブ黒 (5YR2/2)	粘土	炭化物を含む。
15	SD2672b	3	黒 (5YR2/1)	粘土	
16	SD2672b	4	黒 (2.5Y2/1)	粘土	VI層土ブロックを含む。
17	SD2672b	5	黒褐 (7.5YR2/)	シルト	VI層土ブロックを含む。
18	SD2672a	1	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)	シルト	黒褐色粘土ブロック・VI層土ブロックを含む。
19	SD2671c	1	黒褐 (10YR2/2)	粘土	
20	SD2671c	2	黒 (10YR1.7/1)	粘土	
21	SD2671c	3	黒 (10YR2/1)	粘土	
22	SD2671c	4	黒褐 (7.5YR3/2)	粘土	黒褐色粘土ブロックを含む。
23	SD2671b	1	オリーブ褐 (2.5Y4/4)	シルト	VI層土ブロックを多く含む。
24	SD2671b	2	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	シルト	炭化物を含む。
25	SD2671b	3	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)	シルト	灰白色火山灰ブロックを含む（二次堆積）。
26	SD2671b	4	黒褐 (2.5Y3/2)	粘土	VI層土ブロックを多く含む。
27	SD2671b	5	暗オリーブ褐 (2.5Y3/3)	シルト	
28	SD2671a	1	黒褐 (10YR3/1)	シルト	炭化物を含む。
29	SD2671a	2	黒褐 (10YR3/2)	シルト	
30	SD2671a	3	灰黄褐 (10YR5/2)	粘土	VI層土ブロックを含む。
31	SD2673	1	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物・VI層土ブロックを含む。
32	SD2674	1	暗褐 (7.5YR3/4)	シルト	VI層土ブロックを含む。
33	SD2675	1	黒褐 (2.5Y3/2)	シルト	
34	SD2675	2	オリーブ褐 (2.5Y4/3)	シルト	VI層土ブロックを含む。
35	P2	1	黒褐 (2.5Y3/2)	シルト	VI層土ブロックを含む。
36	P3	1	黒褐 (10YR3/1)	シルト	柱抜取穴。
37	P3	2	暗褐 (10YR3/4)	シルト	VI層土ブロックを含む。柱穴掘方。
38	P3	3	黒褐 (7.5YR2/2)	シルト	柱痕跡。
39	SD2676	1	黒褐 (10YR2/2)	粘土	炭化物を含む。
40	SD2676	2	黒褐 (10YR2/2)	粘土	炭化物・VI層土ブロックを含む。
41	SD2676	3	黒褐 (10YR3/2)	粘土	炭化物・VI層土ブロックを含む。
42	P4	1	褐灰 (10YR4/1)	シルト	VI層土ブロックを含む。
43	P5	1	褐灰 (10YR4/1)	シルト	VI層土ブロックを含む。

1区断面図注記表

に移して構築されている。

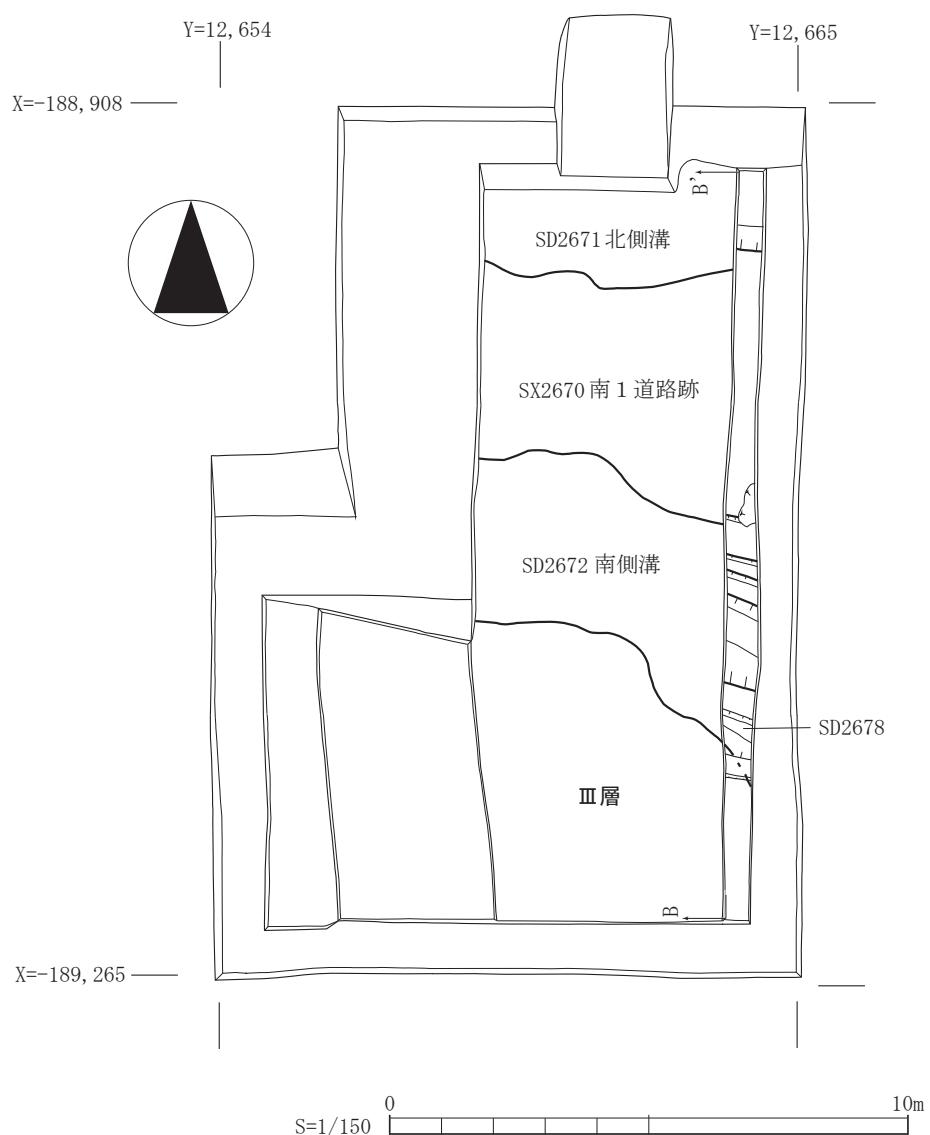
【規模】長さは1・2区合わせ34.5m、上幅3.32m以上、深さ約70cmである。

【壁・底面】逆台形である。

【埋土】1区では5層確認した。1層はVI層土ブロックを多く含み人為堆積で、他は自然堆積である。2区では1層確認し、自然堆積である。

【遺物】土師器壺（B V類）、須恵器甕・壺、須恵系土器壺が出土している。

c期：b期と比べて位置を南に移して構築されている。



※III層での南1道路側溝ラインは第4図のSD2671cの2・3層、
SD2672cの2層の検出ラインを示している。

第5図 2区平面図

【規模】長さは1・2区合わせ34.5m、上幅は1区で約4.5m、2区で約4.8m、深さ約97cmである。

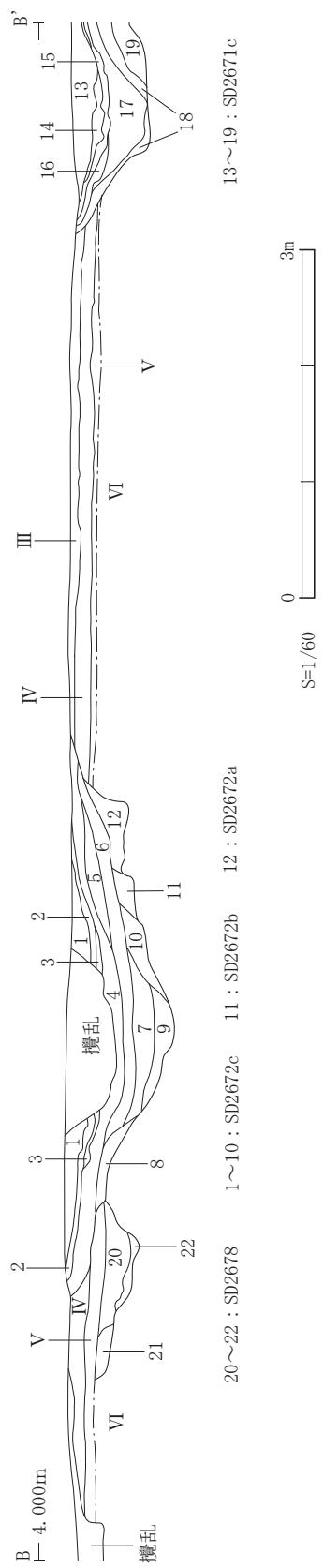
【壁・底面】上が開くU字形である。

【埋土】1区では7層確認し、自然堆積である。1区では9層確認し、8層に灰白色火山灰ブロック（2次堆積）を含む。自然堆積である。

【遺物】土師器壺（B V類）・甕（A類・B類）、須恵器壺（V類）高台付壺・甕・長頸瓶、須恵系土器、平瓦が出土している。

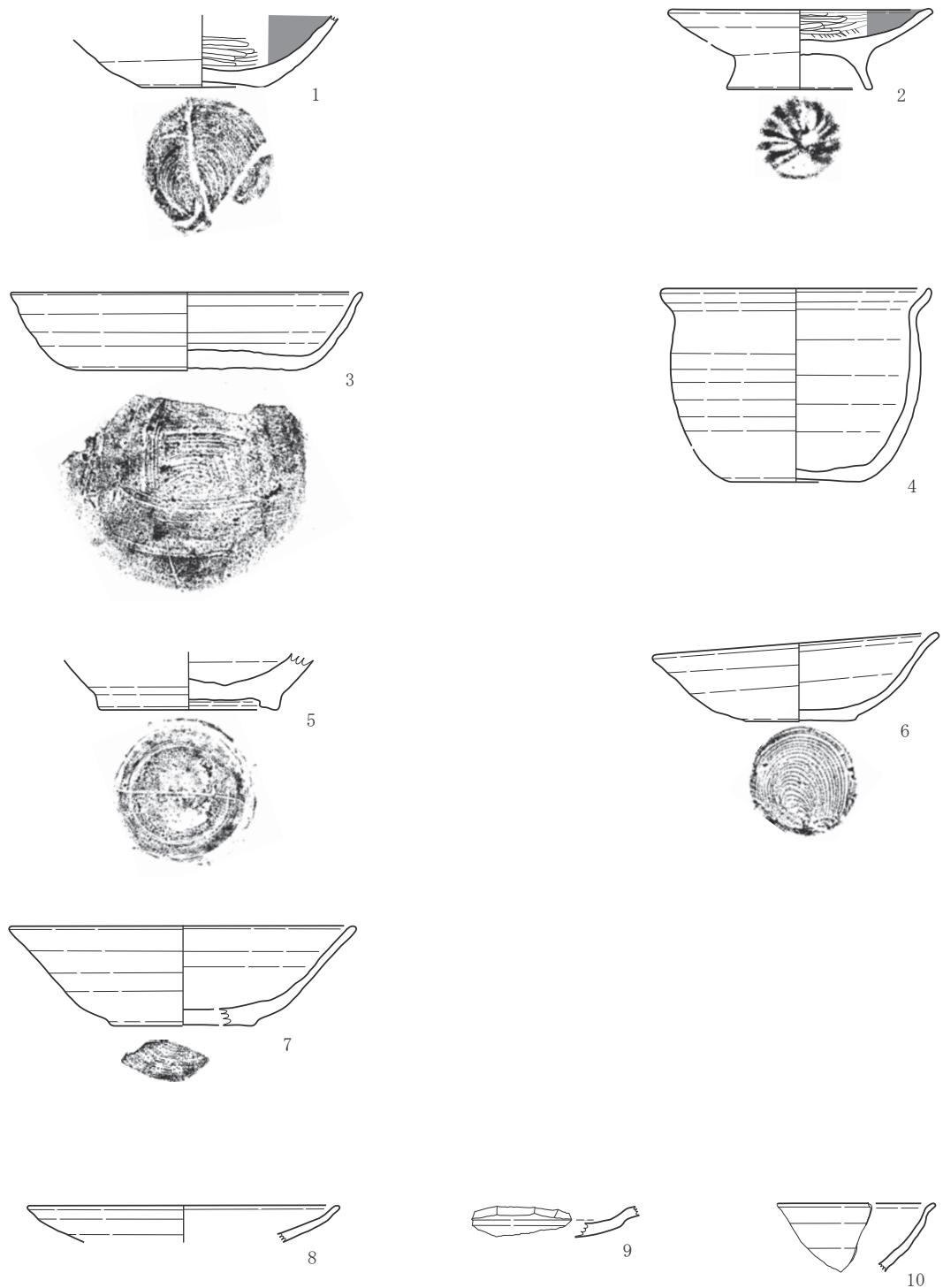
P1 (第3・4図)

【位置】1区の中央部西側に位置する。



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2672c	1	暗褐 (10YR3/4)	シルト	
2	SD2672c	2	黒 (10YR1.7/1)	粘土	
3	SD2672c	3	黒褐 (10YR2/3)	粘土	
4	SD2672c	4	黒褐 (10YR3/2)	粘土	炭化物・黒褐色粘土ブロックを含む。
5	SD2672c	5	暗褐 (7.5YR3/3)	シルト	炭化物・酸化鉄を含む。
6	SD2672c	6	暗褐 (10YR3/3)	粘土	酸化鉄を含む。
7	SD2672c	7	黒 (2.5Y2/1)	粘土	
8	SD2672c	8	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	黒褐色粘土ブロック・VI層土ブロック・灰白色火山灰小ブロックを含む。
9	SD2672c	9	黒 (5Y2/1)	粘土	
10	SD2672c	10	黒褐 (2.5Y3/1)	粘土	VI層土ブロックを含む。
11	SD2672b	1	黒褐 (7.5YR3/2)	シルト	黒褐色粘土ブロックを含む。
12	SD2672a	1	暗灰黄 (2.5Y4/2)	シルト	VI層土小ブロックを含む。
13	SD2671c	1	黒褐 (10YR3/2)	シルト	炭化物を含む。
14	SD2671c	2	黒褐 (2.5Y3/2)	シルト	
15	SD2671c	3	黒 (10YR1.7/1)	粘土	
16	SD2671c	4	暗褐 (10YR3/4)	粘土	VI層土ブロックを含む。
17	SD2671c	5	黒褐 (10YR2/2)	粘土	黒褐色粘土ブロックを含む。
18	SD2671c	6	黄褐 (2.5Y5/3)	シルト	黒褐色粘土ブロックを含む。
19	SD2671c	7	黄灰 (2.5Y4/1)	シルト	黒褐色粘土ブロックを含む。
20	SD2678	1	灰黄褐 (10YR4/2)	シルト	炭化物・VI層土小ブロックを多く含む。
21	SD2678	2	にぶい黄褐 (10YR5/3)	シルト	VI層土ブロックを含む。
22	SD2678	3	にぶい黄褐 (10YR4/3)	シルト	VI層土ブロックを含む。

第6図 2区断面図



第7図 出土遺物

(単位: cm)

番号	種類	遺構	層位	特 徴		口 径 残存率	底 径 残存率	器高	登録 番号	備考
				外面	内面					
1	土師器 壺	-	I	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ヘラミガキ 黒色処理	-	5.9	(3.2)	R10	B V
2	土師器 高台付壺	-	I	ロクロナデ 底部:ナデ	ヘラミガキ 黒色処理	(11.4) 3/24	6.4	3.6	R3	
3	須恵器 壺	-	IV	ロクロナデ 底部:回転糸切り→手持ち ヘラ削り	ロクロナデ	(15.6) 1/24	(10.2) 19/24	3.5	R1	II c
4	土師器 甕	-	III	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(12.0) 5/24	6.3	8.7	R9	
5	須恵器 長頸瓶	-	IV	ロクロナデ 底部:ロクロナデ。ヘラ描 き	ロクロナデ	-	8.0	(2.6)	R2	
6	須恵器 壺	SD2672c (2区)	10	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(12.7) 14/24	4.8	3.5	R8	V
7	須恵器 壺	-	I	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(15.4) 6/24	(6.4) 3/24	4.5	R4	V
8	灰釉陶器 皿	-	I	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.0) 4/24	-	(1.7)	R7	
9	綠釉陶器 皿	-	I	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラミガキ	-	-	(1.4)	R5	
10	灰釉陶器 碗	-	I	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	(3.1)	R6	

出土遺物観察表

【重複】 SD2672a溝跡と重複し、これより新しい。

【柱穴】 圓丸方形である。長軸が約74cm、短軸が71cm以上、深さ70cm以上である。埋土は2層確認した。

【柱痕跡】 円形で、径28cmである。柱抜き取り穴があり、埋土は3層確認し、1層は灰白色火山灰の自然堆積である。

【遺物】 抜き取り穴から土師器壺（B類）・甕、須恵器壺（V類）・甕が出土している。

[V層上面]

SD2677溝跡（第3図）

【位置】 1区の南半部に位置する。

【重複】 SD2675・SD2677b溝跡と重複し、これより古い。

【方向・規模】 方向は南北方向で北で東に約5度偏している。規模は長さ3.23m以上、上幅約15cm以上、深さは未掘のため不明である。底面は凹凸がある。

【埋土】 3層確認し、自然堆積である。

【遺物】 出土していない。

SD2676溝跡（第3・4図）

【位置】 1区の中央部に位置する。

【重複】 SD2677溝跡と重複し、これより新しい。

【方向・規模】 方向は東西方向で東で南に約7度偏している。規模は長さ3.00m以上、上幅約3.1m、深さ36cmである。底面は凹凸がある。

【埋土】 3層確認し、自然堆積である。

【遺物】 出土していない。

S D2675溝跡（第3・4図）

【位置】1区の南半部に位置する。

【重複】S D2677溝跡と重複し、これより新しい。

【方向・規模】方向は東西方向で東で北に約1度偏している。規模は長さ52cm以上、上幅約33cm、深さ13cmである。

【埋土】2層確認し、自然堆積である。

【遺物】出土していない。

S D2674溝跡（第3・4図）

【位置】1区の南半部に位置する。

【方向・規模】方向は東西方向で東で南に約1度偏している。規模は長さ52cm以上、上幅約20cm、深さ15cmである。

【埋土】1層確認し、自然堆積である。

【遺物】出土していない。

S D2673溝跡（第3・4図）

【位置】1区の南部に位置する。

【方向・規模】方向は東西方向で東で北に約1度偏している。規模は長さ52cm以上、上幅40～52cm、深さ14cmである。

【埋土】1層確認し、自然堆積である。

【遺物】出土していない。

S D2678溝跡（第5図）

【位置】2区の南半部に位置する。

【重複】S D2672溝跡より時期は古い。

【方向・規模】方向は東西方向で東で南に約15度偏している。規模は長さ60cm以上、上幅1.50m以上、深さ27cmである。

【埋土】3層確認し、自然堆積である。

【遺物】出土していない。

ピット（第3図）

1区のS X2670南1道路跡の北側と南側から10基検出した。規模は一辺が15～47cmの隅丸方形が多い。抜き取り痕や柱痕跡を確認できたものもある。

3まとめ

多賀城南面に施工された道路網のうち、方格地割の基準となった東西大路に並行する南1道路跡を検出した。道路跡は側溝の検討から3時期の変遷を捉え、B・C期の埋土に灰白色火山灰の2次堆積が認められることから、A期が10世紀前葉以前、B期は灰白色火山灰降下時には機能していたことが推察されることから10世紀前葉頃、C期はそれ以降と推定する。出土遺物は少ないため検討は難しいが、B・C期からは土師器壺（BV類）、須恵器壺（V類）、須恵系土器壺の破片が出土していることからも、上記の年代が

妥当と考える。今回検出した範囲での道路跡の方向は西で北に約10度偏している。II区東側で北側溝は北方向に、南側溝は南方向にそれぞれ曲がる様相が読み取れる。これはII区東側のごく近い地点に南北にのびる西7道路跡との交差点があるためで、すでに山王遺跡第13次調査（多賀城市教育委員会 1993）において西7道路跡がII区の北東方向付近で検出されている。近年、周辺での調査が増え山王遺跡第203次調査（多賀城市教育委員会 2019）で南1道路跡、山王遺跡第211次調査（多賀城市教育委員会 2020）で西7道路跡と東西大路南1間道路跡が検出されている。

なおP1については、柱抜き取り穴の最上層に灰白色火山灰が自然堆積していることから、10世紀前葉以前に廃棄されたことが推定される。なお、今回の調査ではこの柱穴と組むものは発見されていない。

引用文献

多賀城市教育委員会『年報6』多賀城市文化財調査報告書第33集 1993

多賀城市教育委員会『多賀城市内の遺跡2－平成30年度ほか発掘調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第143集 2019

多賀城市教育委員会『山王遺跡ほか』多賀城市文化財調査報告書第145集 2020



1 S D2672C 溝跡（2区） 須恵器壊（R 8）



2 I層 高台付壊（R 3）



3 Ⅲ層 土師器壊（R 9）



4 I層 上：灰紺陶器皿（R 7）

左下：緑紺陶器皿（R 5）

右下：灰紺陶器碗（R 6）

出土遺物



1区全景（北から）



1区S X2670南1道路跡（東から）



1区S D2671北側溝断面（東から）



1区S D2672南側溝断面（東から）



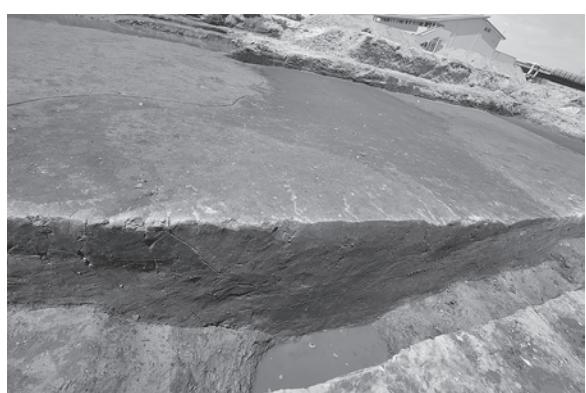
2区 全景（北から）



2区S X2670南1道路跡（東から）



2区S D2671北側溝断面（東から）



2区S D2672南側溝断面（東から）

XIX 山王遺跡第212次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字中山王地先における個人住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。平成31年1月11日、事業者から当該事業計画と埋蔵文化財の関かわりについての協議書が提出された。計画は、基礎工事の際に現況より10cmの盛土を施したのち、深さ6.0mの柱状改良を25本打ち込む内容であった。周辺では当該区の北側で第97次調査を実施しており、表土から深さ約80cmで遺構が検出されていることから、遺跡への影響が懸念された。このため、工法変更による遺跡の保存協議を行ったが、提出された基礎工法以外では十分な地盤強度を得られないと判断されたことから、やむを得ず発掘調査による記録保存を行うこととなった。その後、5月24日に地権者から発掘調査の依頼書・承諾書が提出されたことを受け、6月4日より発掘調査を実施した。

調査では、はじめに重機による住宅建築部分の表土除去を行い、現地表面から約70cmほどで黒褐色土(III層)に到達した。翌5日から作業員による遺構の精査を行い、III層下面から黄橙色粘質土(IV層)上面で遺構を確認し、写真撮影及び掘削を開始した。14日から平面図・断面図の作成を開始し、7月1日までに作業を終了した。翌2日には重機による埋め戻しと機材の撤収を行い、現地発掘調査に係る一切を終了した。

2 調査成果

(1) 基本層序(第3・5図)

I 層：現代の表土や盛土、耕作土などで、厚さは20～50cm。

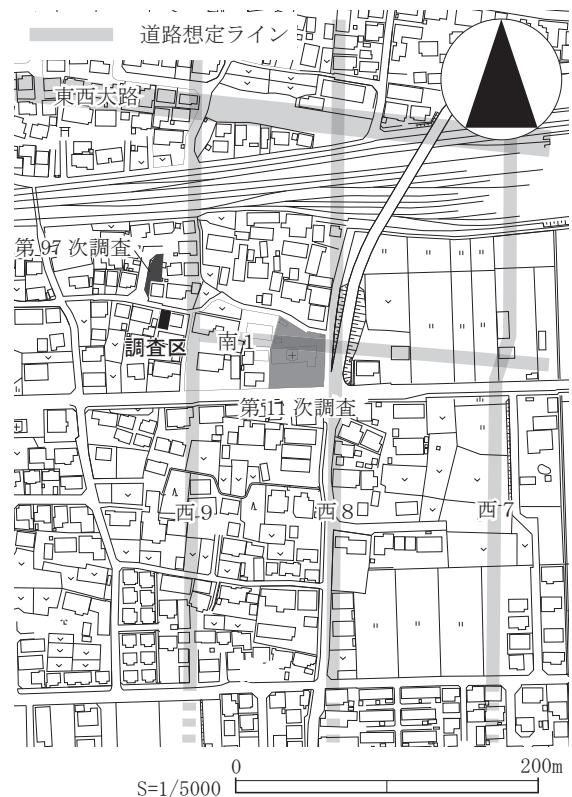
II 層：暗褐色土(10YR3/4)で、厚さは40～50cm。炭化物や黄橙色地山粒を若干含む。

III 1層：黒褐色土(10YR2/2)で、III層全体の厚さは15～25cm。III b層と類似するが、炭化粒を多く含み色調も異なるため細別。調査区南西端に分布。

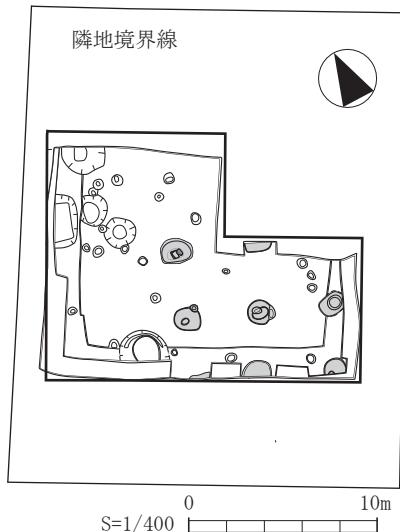
III 2層：暗褐色土(10YR3/3)。炭化物や焼土粒、大型の黄橙色地山ブロックを若干含む。

IV 層：黄橙色粘質土(10YR8/6)で、厚さは20～40cm。炭化物やV層由来ブロックを少し含む。酸化鉄をやや多く含む。古代の遺構確認面。

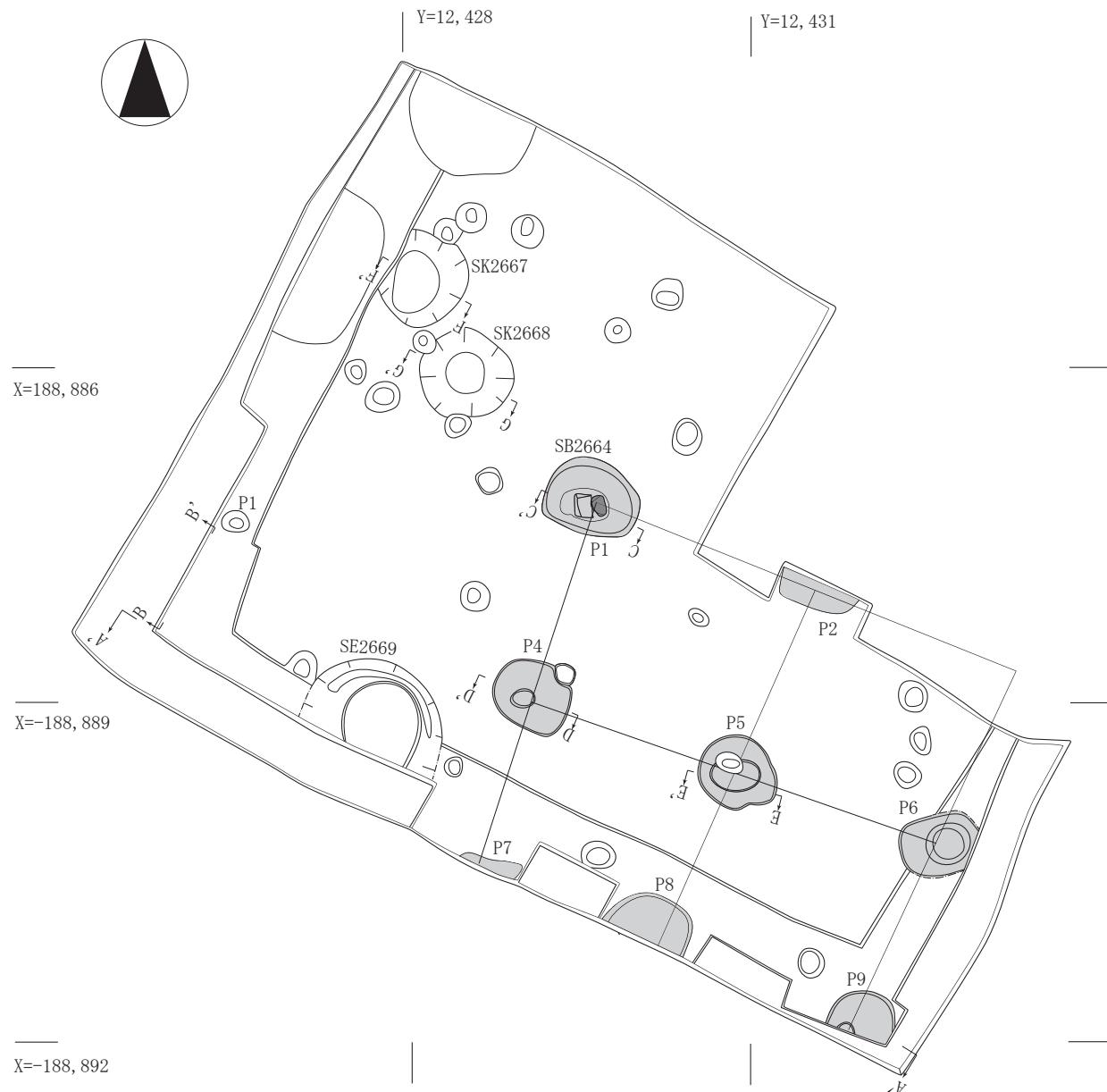
V 1層：浅黄色粘質土(2.5YR7/4)で、V層全体の厚さは25～30cm。黑色粘質粒や大形ブロックを多く含む。砂質土が混じる。酸化鉄を多く含む。



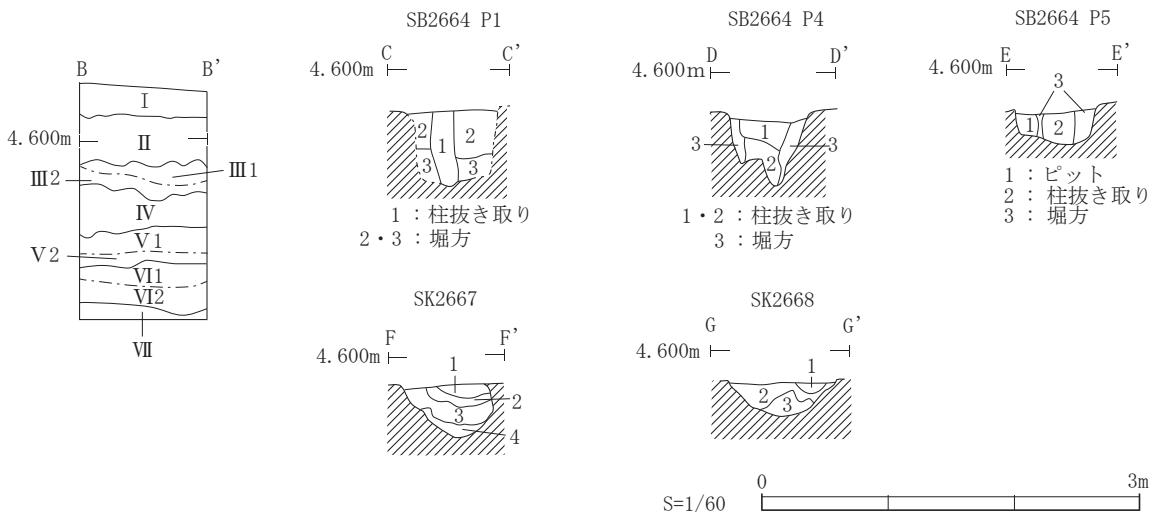
第1図 調査区位置図



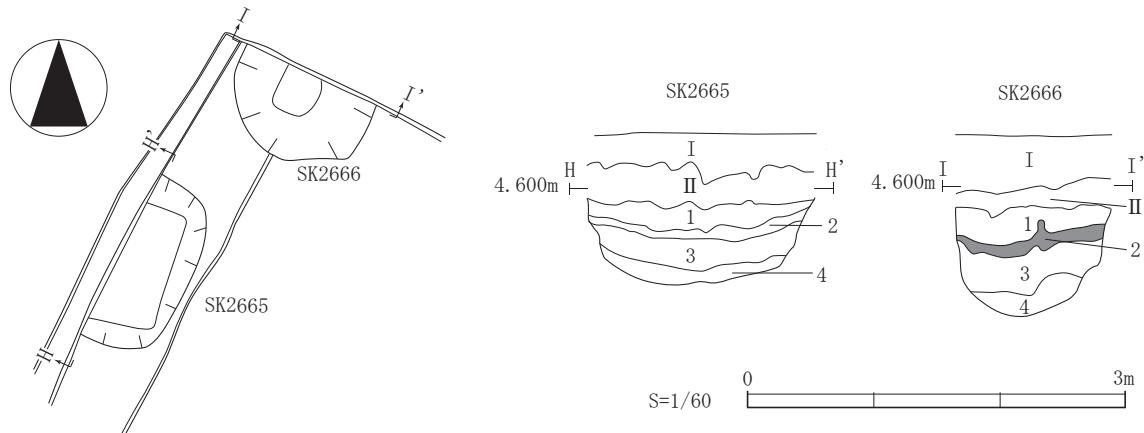
第2図 調査区配置図



第3図 IV層上面検出遺構 平面図・断面図



第4図 IV層上面検出遺構 断面図・基本層序



第5図 III層上面検出遺構 平面図・断面図

V 2 層 : V 1 層と類似するが、黒色ブロックや酸化鉄の含有量が少ないことから細別。

VI 1 層 : 灰黄色粘質土 (2.5YR6/2) で、VI層全体の厚さは 30 ~ 40 cm。黒色粘質ブロックを若干含む。
酸化鉄を若干含む。

VI 2 層 : VI 1 層と類似するが、黒色ブロックや酸化鉄を含まないことから細別。

VII 層 : 緑灰色粘土 (7.5GY5/1)。

(2) 発見遺構と遺物

【IV層上面発見遺構】

S B 2664 掘立柱建物跡 (第3・4図)

【位置】調査区東側で検出した。

【調査状況・重複】調査区西壁にかかる P 6 と南壁にかかる P 8 ・ P 9 は検出範囲を掘削した。調査区北壁にかかる P 2 と南壁にかかる P 7 は掘立柱の並びから存在が予想されたため、一部調査区を拡張し検出した。P 4 ・ P 5 はそれぞれ小ピットに切られる。

【桁行・梁行】8基の柱穴跡から、東西2間以上、南北2間以上の総柱建物と推定される。

【柱痕跡・抜き取り穴の確認】柱穴1基 (P 6) で柱痕跡を、柱穴3基 (P 1 ・ P 4 ・ P 5 ・ P 9) で柱抜き取り穴を確認した。P 1 の底面に木製基礎板2点 (第7図13・14、写真図版1) が据えられていた。

【方向・規模】中央柱列で測ると西で北に約19度偏している。東西の柱間はP 4 ・ P 5 ・ P 6 で約2m、南北の柱間はP 1 ・ P 4 で1.95mである。

【堀方】 平面は隅丸方形または橢円形である。P 1 は長辺 86 cm、短辺 65 cm、検出面からの深さ 58 cm、P 4 は長辺 71 cm、短辺 60 cm、検出面からの深さ 48 cm、P 5 は長辺 68 cm、短辺約 65 cm、検出面からの深さ 28 cm である。P 6 は長辺約 75 cm、短辺約 55 cm、検出面からの深さ 32 cm である。柱抜き取り穴の埋土は灰黄褐色からにぶい黄褐色を呈し、黄橙色粒・ブロックをやや多く含む。炭化物が一部混じり、灰白色火山灰ブロックを多く含む。P 9 は黒褐色土で埋められている。堀方埋土は灰黄褐色からにぶい黄褐色で、黄橙色ブロックを多く含む。灰白色火山灰ブロックは混じるものもある。

【遺物】 P 1 の 3 層底面付近から古墳時代後期の非ロクロ土師器器坏（第 6 図 4）が、その他の柱穴で上層から土器片が出土している。

S K 2667 土壙（第 3・4 図）

【位置】 調査区北西側で検出した。

【調査状況・重複】 遺構西側の一部が排水用側溝により壊されている。小ピットと重複しこれより古い。西側の一部が S K 2665 と重複していた可能性がある。

【形状・規模】 平面はやや不整形な円形である。底面は起伏があり壁は緩やかに立ち上がる。長短辺ともに約 80 cm、検出面からの深さは 41 cm である。

【埋土】 4 層に分けられる。全体にしまり・粘性がある。4 層は黒褐色で、IV 層由来の黄橙色拳大ブロックを含む人為埋土である。2・3 層は暗褐色で、炭化粒を少し含む。2 層には黄橙色粒・ブロックが特に多く混じる。1 層は黒褐色で、黄橙色ブロックを少し含む。

【遺物】 上層（1 層）から土器片が少量出土した。

S K 2668 土壙（第 3・4 図）

【位置】 調査区北西側で検出した。

【調査状況・重複】 小ピット 2 基と重複しこれより古い。

【形状・規模】 平面は円形である。底面は若干の起伏があり壁は緩やかに立ち上がる。長軸約 82 cm、短軸 80 cm、検出面からの深さは 29 cm である。

【埋土】 3 層に分けられる。全体にしまり・粘性がある。1・3 層は IV 層由来の人為埋土とみられ、灰白色火山灰ブロックを少し含む。2 層は暗褐色で、黄橙色粒・ブロックを若干含む。

【遺物】 上層（1・2 層）から土器片が少量出土した。

S E 2669 井戸跡（第 3・4 図）

【位置】 調査区南端で検出した。

【調査状況・重複】 調査区南壁にかかるため遺構北半部のみ検出した。南半部が排水用側溝により壊されている。小ピット 2 基と重複しこれより新しい。

【形状・規模】 平面は円形である。底面は平坦で壁は袋状に立ち上がり、北側上部は段を設けて広がる。東西辺約 1.3 m、南北辺 82 cm 以上、深さは 1.22 m である。

【埋土】 3 層に分けられる。下層（5 層）は VII 層の緑灰シルト土が堆積。中層（4 層）は黒褐色で、混入物は少ない。しまりはなく、粘性も弱い。上層（3 層）は暗褐色の III 層土の自然堆積とみられ、IV 層由来の細粒を少し含む。しまり・粘性若干あり。

【遺物】 井戸枠は出土しなかったが、底面から曲物の一部（第 8 図 15）が出土した。

【Ⅲ層上面発見遺構】

S K 2665 土壙（第5図）

【位置】調査区北西端で検出した。

【調査状況・重複】調査区西壁にかかるため遺構東半部のみ掘削した。調査部分はすべて排水用側溝にかかっているものの、遺構下部は残存した。重複はしていないが、東側の一部がS K 2667と重複していた可能性がある。

【形状・規模】平面は方形である。底面は平坦で壁は急角度で立ち上がり、丁寧に構築されている。南北辺1.42m、東西辺59cm以上、断面上の深さは68cmである。

【埋土】4層に分けられる。全体として暗褐色で、しまり・粘性は弱い。4層は大小様々な黄橙色粒・ブロックを多く含む。3層は黄橙色粒・ブロックや、炭化粒・ブロックを若干含む。2層は他の土層とは異なり、にぶい黄褐色で、しまり・粘性がある。黄橙色粒・ブロックや炭化粒・ブロックを若干含む。1層は黄橙色粒を少し含み、炭化粒や焼土粒を若干含む。

【遺物】出土していない。

S K 2666 土壙（第5図）

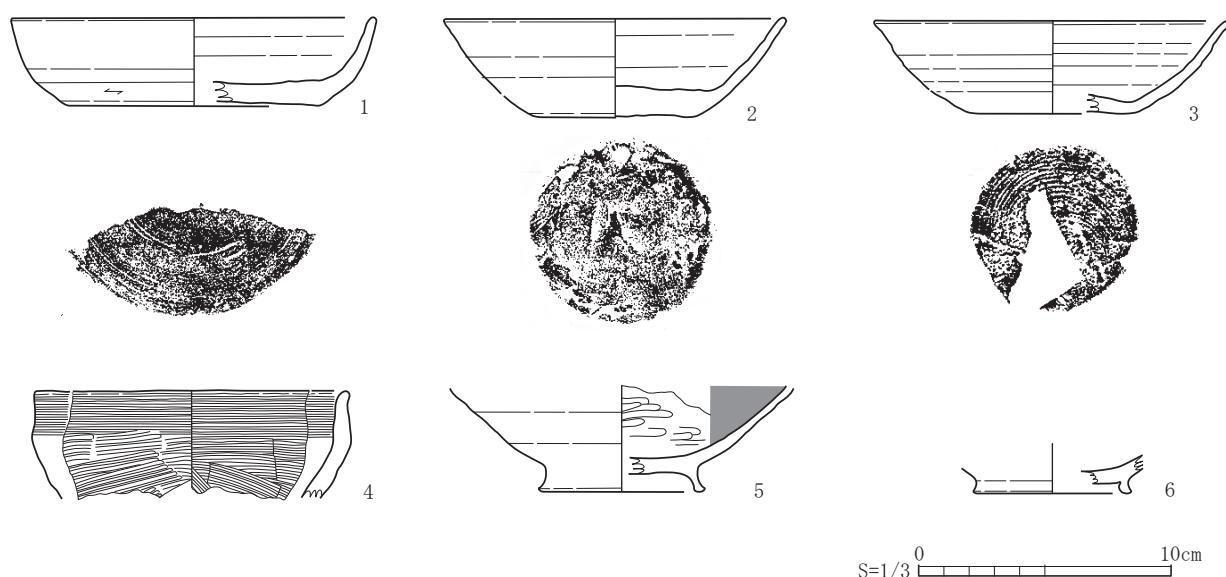
【位置】調査区北西端で検出した。

【調査状況・重複】調査区北壁にかかるため遺構南半部のみ掘削した。重複はない。

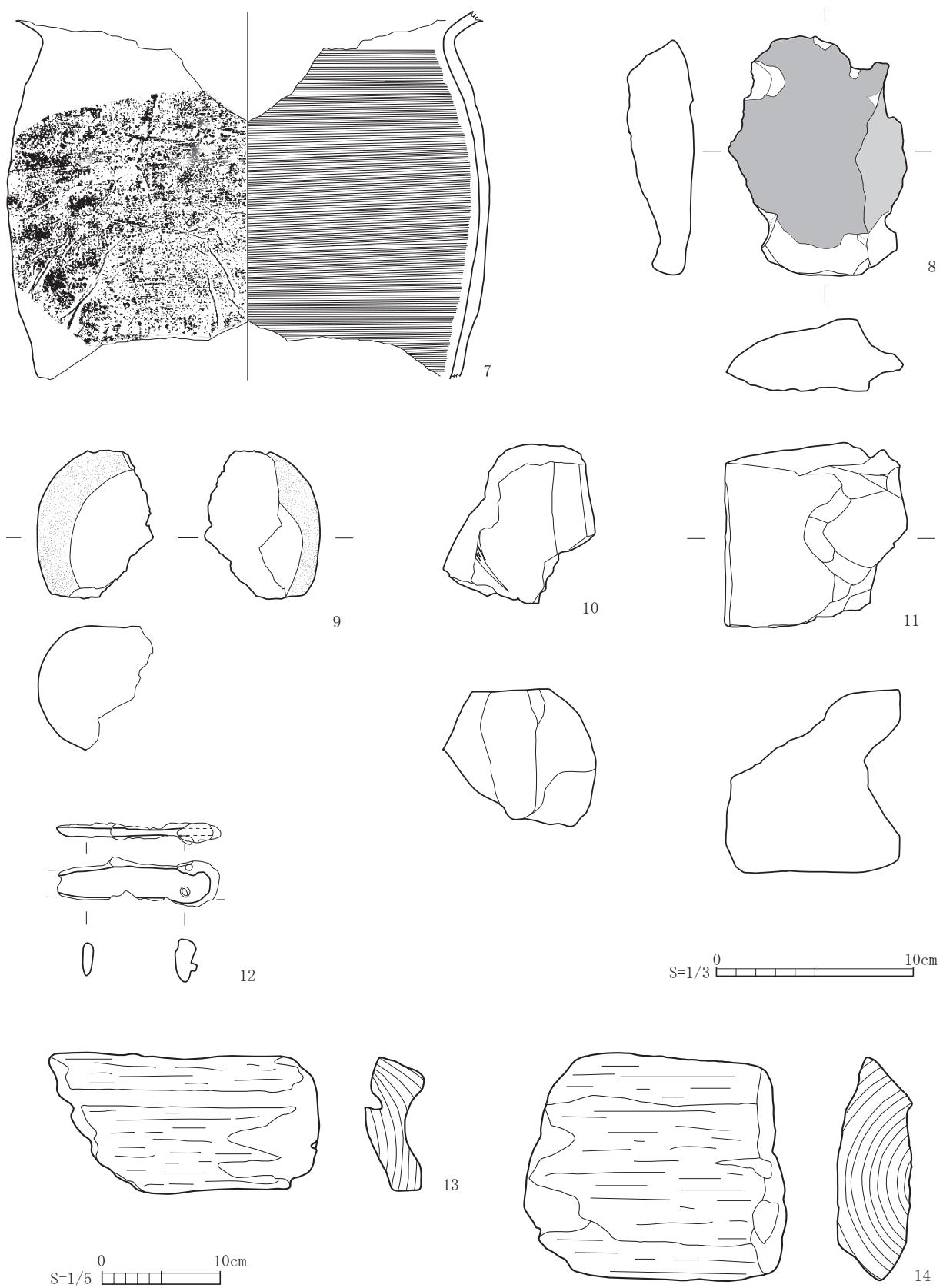
【形状・規模】平面は楕円形である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。東西辺1.15m、南北辺70cm以上、深さは87cmである。

【埋土】4層に分けられる。全体的に炭化粒が混じる。4層はしまりのある黒褐色粘質土で、IV層由來の黄橙色拳大ブロックを含む人為埋土である。3層は暗褐色で、黄橙色粒を若干含む。2層は黒色で、被熱を受けた痕跡が明瞭に認められる炭化物の層である。2・3層土のしまり・粘性は弱い。1層は暗褐色粘質土で、黄橙色粒や焼土粒を若干含む。

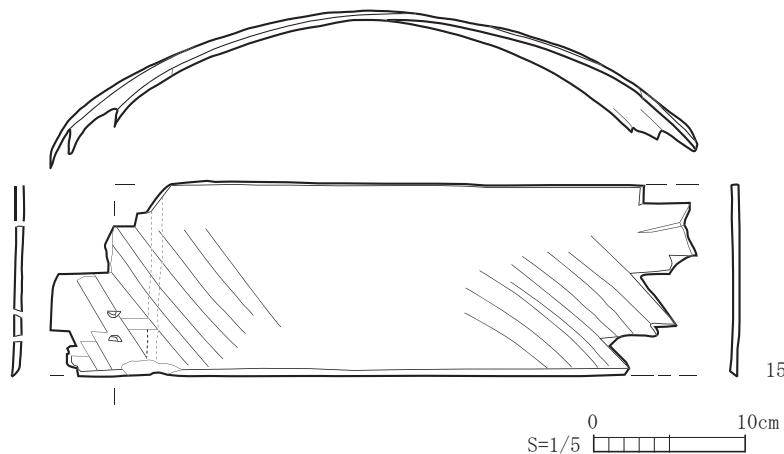
【遺物】4層から須恵器の大型甕片が、3層から土師器甕（B類）が出土した。2・3層からは、鉄製刀子や炭化物の付着したものを含む石材片3点が出土したほか、古代の土器片、中世の陶器片も出土した（第7図）。



第6図 出土遺物実測図（1）



第7図 出土遺物実測図（2）



第8図 出土遺物実測図（3）

(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	備考
			外面	内面					
1	須恵器 壺	検出面	ロクロナデ、回転ヘラケズリ 底部:回転ヘラ切り	ロクロナデ	(14.3) 4/4	(10.1) 9/24	3.5	R1	III類
2	須恵器 壺	P 1 床直	ロクロナデ 底部:回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.3) 11/24	7.0 24/24	3.9	R2	III類
3	須恵器 壺	検出面	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.9) 2/24	(6.4) 18/24	3.8	R3	V類
4	土師器 壺	SB2664 P1 3層	口縁:ヨコナデ 体部:ハケメ	口縁:ヨコナデ 体部:ヘラナデ	(12.4) 4/24	—	—	R7	古墳時代後期
5	土師器 高台付壺	検出面	ロクロナデ 底部:回転ヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	—	(4.6) 12/24	—	R6	
6	灰釉陶器 椀皿類	検出面	底部:回転ヘラケズリ	施釉	—	(6.4) 4/24	—	R8	
7	土師器 甕	SK2666 3層	体部:ロクロナデ 格子タタキ痕あり 胴中位以下スス付着	ロクロナデ	—	—	—	R5	B類
					最大長	最大幅	最大厚		
8	石製品 不明	SK2666 3層			12.2	9.1	3.9	R14	凝灰岩製
9	磨石	SK2666 3層			7.5	5.9	6.2	R12	砂岩製
10	台石	SK2666 3層			8.0	7.9	6.5	R13	凝灰岩製
11	磨石	SK2666 2層			9.4	9.4	9.3	R15	砂岩製
12	鉄製 刀子	SK2666 3層			(8.2)	2.4	1.2	M1	先端、下端 欠損
13	木製 礎板	SK2664 P1 底面			22.8	11.5	4.5	W1	木取り
14	木製 礎板	SK2664 P1 底面			22.2	19.1	6.3	W2	木取り
15	木製 曲物側板	SE2669 底面			(41.3)	12.8	0.5	W3	井戸枠に転用

第9図 出土遺物観察表

3 まとめ

今回の調査では、以下の成果が得られた。

- (1) IV層上面でS B 2664 挖立柱建物跡、S K 2667・2668 土壙、S E 2669 井戸跡を発見した。S B 2664 挖立柱建物跡は、柱抜き取り穴に灰白色火山灰が多く入ることから、10世紀前葉以降に廃絶したものと考えられる。S K 2668 土壙についても、同様に埋土中に灰白色火山灰が入ることから、10世紀前葉以降のものと考えられる。S K 2667 土壙とS E 2669 井戸跡については、年代を考えるための遺物が出土しなかったことから、不明としておきたい。
- (2) III層上面でS K 2665・2666 土壙を発見した。S K 2666 は無釉陶器甕が出土していることから、中世に属すると判断した。
- (3) この他、遺構の年代に属さない遺物として、S B 2664 P 1 底面から7世紀前半の非ロクロ土師器坏（第6図4）が、検出面から8世紀後半頃の須恵器坏（III類）（第6図1）が出土した。

参考文献

多賀城市教育委員会「山王遺跡第97次調査」『新田・山王遺跡ほか』2018 多賀城市文化財調査報告書第137集



遺構検出状況（南より）



S K 2666 完掘（南より）



S K 2665・S K 2667・S K 2668 完掘（北より）



S E 2669 完掘（北より）



S B 2664 P 1 硙板出土状況（北より）

写真図版 1



SB 2664 完掘 (南より)



調査区完掘 (北より)

写真図版2



1 検出面 須恵器壺 (R1)



2 P1 須恵器壺 (R2)



3 検出面 須恵器壺 (R3)



4 左上：SK2666 土師器壺 (R5)

右上：SK2666 鉄製刀子 (M1)

下：SB2664 土師器壺 (R7)

右下：検出面 灰釉陶器 (R8)



5 SK2666 出土石製品 (R12 ~ 15)

写真図版 3

XX 山王遺跡第217次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字西町浦地内における個人住宅新築工事に伴う確認調査である。

平成31年2月22日、事業主より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、住宅建設の基礎工事の際に、地盤改良として直径40cm、深さ7mの杭状改良を行う内容であった。当該地の東側で実施した第148次調査では、現地表から約80cm下で遺構を発見したことから、遺跡への影響が懸念された。

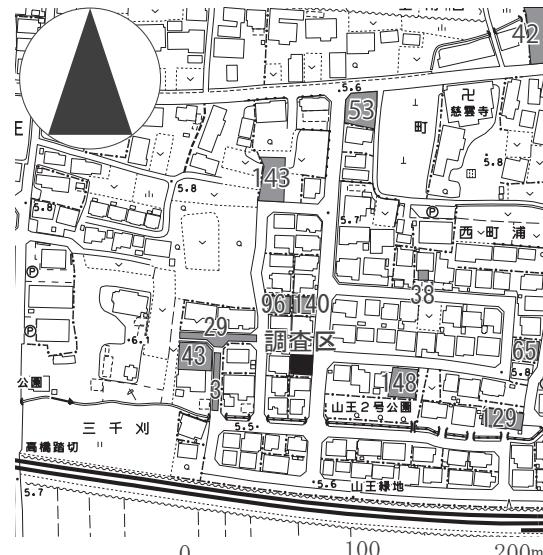
そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された計画以外では住宅の地耐力を得られないことから、申請された工法で行うこととなった。

令和元年9月20日に事業主から発掘調査の依頼書、地権者から承諾書の提出を受け、令和元年9月26日から発掘調査に着手した。重機で表土を除去し、現地表から深さ約1.25mまで掘削を行ったが、遺構や遺物は確認できなかった。27日に平面図と調査区北壁の断面図を作成した後、埋戻しを行い、すべての調査を終了した。

2 調査成果

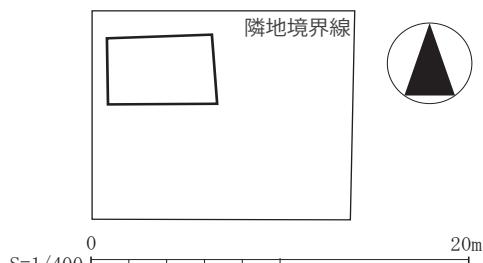
(1) 層序

- I 1層：現代の盛土。山砂を多く含む。厚さは約50cmある。
- I 2層：灰黄褐色(10YR4/2)粘土で、現代の水田耕作土である。調査区東半部で確認した。厚さは約20cmである。
- I 3層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)土で、暗褐色粘土ブロックを含む。厚さは約25～40cmである。
- II 層：暗緑灰色(10G3/1)土で、暗褐色粘土ブロックを含む。厚さは15～20cmである。
- III 層：黒褐色(2.5Y3/2)粘土で、V層土ブロックを含む。厚さは5～10cmである。
- IV 層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂で、V層土ブロックや暗褐色粘土ブロックを含む。調査区西半部で確認した。厚さは5～10cmである。
- V 層：黄褐色(2.5YR5/3)土で、暗褐色粘土ブロックを含む。



※数字は過去の調査次数

第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区全景（西から）

XXI 山王遺跡第218次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字中山王地内における個人住宅新築工事に伴う本発掘調査である。

令和元年7月30日、事業者より当該地での個人住宅新築計画と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、住宅建設の基礎工事の際に、地盤改良として直径80cm、深さ10.5mの杭状改良を行う内容であった。当該地の東側で実施した第98・99次調査では、現地表から約90cm下で遺構を発見したことから、遺跡への影響が懸念された。

そのため、他の工法を採用することで、地下の埋蔵文化財を保護できないか協議を行ったが、当初提出された計画以外では住宅の地耐力を得られないことから、申請された工法で行うこととなった。

事業者から令和元年11月10日に発掘調査の依頼書、地権者から11月12日に承諾書の提出を受け、令和元年12月2日から発掘調査に着手した。重機で盛土・表土を除去し、II層上面で遺構の検出作業を行い、溝跡と土壙を発見した。平面図・断面図作成、写真撮影などの記録は12月13日に終えた。17・18日に埋戻しを行い、機材の撤収を完了し、すべての調査を終了した。

2 調査成果

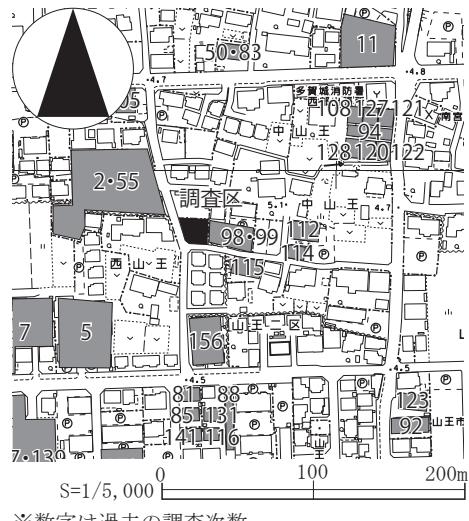
(1) 層序

I 1層：現代の盛土。海砂や山砂を多く含む。厚さは約90cmある。

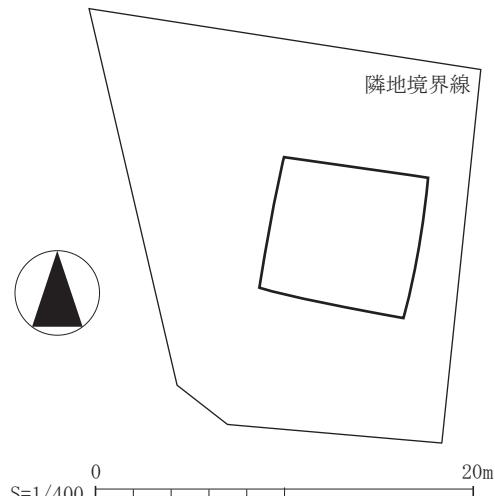
I 2層：オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土で、現代の水田耕作土である。厚さは約15cmである。土師器坏（B V類）・甕（B類）、須恵器坏・甕が出土している。

II 層：オリーブ灰色（5GÝ5/1）土である。上面が古代の遺構検出面である。厚さは約75cmである。土師器坏・甕（B類）、須恵器坏・甕が出土している。

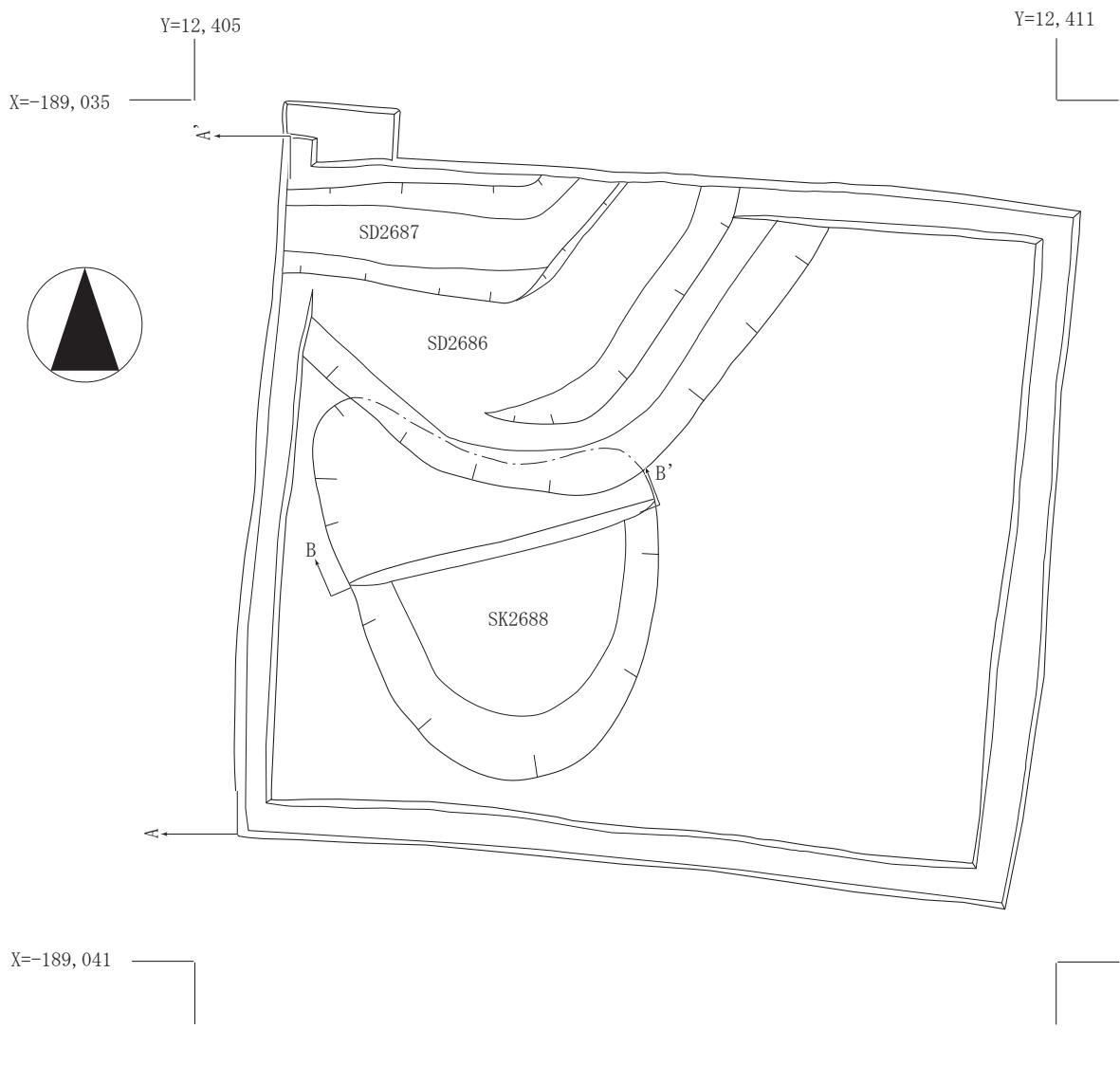
III 層：黒褐色（2.5Y2/1）粘土である。下層を確認するため調査区北西隅を掘り下げたが、遺構や遺物は確認できなかった。厚さは約20cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図 遺構平面図

(2) 発見した遺構と遺物

SD2686溝跡（第3・4図）

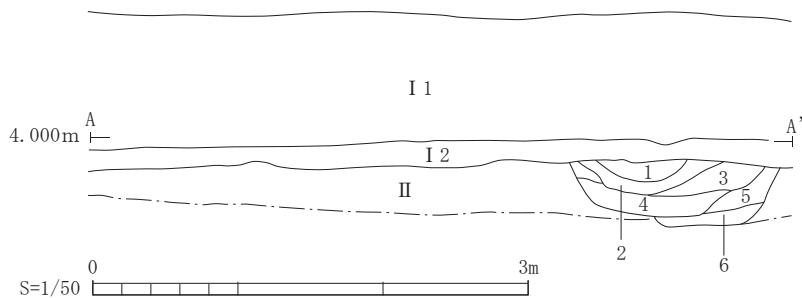
【位置】調査区の北西部に位置する。

【重複】SD2687溝跡、SK2688土壙と重複し、これより新しい。

【方向・規模】屈曲しており、方向は南北方向で北に約50度、東西方向で東に約35度にそれぞれ偏している。規模は長さ4.7m以上、上幅1.35m、深さ38cmである。南東側の壁面はテラス状になる。なお、北側の壁面は排水及び遺構観察のための側溝掘削のため図化できなかった。

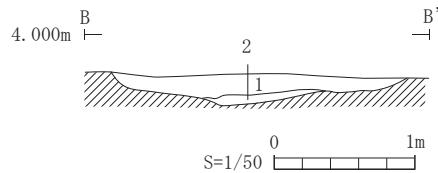
【埋土】4層確認し、自然堆積である。

【遺物】出土していない。



No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD2686	1	黒 (2.5Y2/1)	粘土	
2	SD2686	2	黒褐 (2.5Y2/1)	粘土	
3	SD2686	3	暗オリーブ (5Y4/3)	シルト	炭化物を含む。
4	SD2686	4	灰オリーブ (5Y4/2)	粘土	炭化物を含む。
5	SD2687	1	灰 (7.5Y5/1)	シルト	II層土ブロック・灰白色火山灰ブロックを含む。
6	SD2687	2	灰 (7.5Y4/1)	粘土	灰白色火山灰ブロックを含む。

第4図 調査区西壁断面図



第5図 S K2688土壌断面図

S D2687溝跡（第3・4図）

【位置】調査区の北西部に位置する。

【重複】S D2686溝跡と重複し、これより古い。

【方向・規模】屈曲しており、方向は南北方向で北で西に約84度、東西方向で東に約45度にそれぞれ偏している。規模は長さ2.7m以上、上幅85cm以上、深さ42cmである。S D2686溝跡より若干北寄りにあり、屈曲も類似する。

【埋土】2層確認し、灰白色火山灰ブロックを含む。自然堆積である。

【遺物】2層から須恵器甕が出土している。

S K2688土壌（第3図）

【位置】調査区の西部に位置する。

【重複】S D2686溝跡と重複し、これより古い。

【平面形・規模】不整楕円形である。規模は、東西2.20m、南北2.82m以上、深さ22cmである。

【埋土】2層に区分でき、1層はオリーブ黒色 (7.5Y3/1) 土、2層は灰色 (7.5Y4/1) 土で、2層に灰白色火山灰ブロックを含む。自然堆積である。

【遺物】出土していない。

3 まとめ

今回の調査では、溝跡2条、土壙1基を検出した。遺物は土師器・須恵器で量は少ない。

遺構の年代については、S D2687溝跡とS K2688土壙の埋土に灰白色火山灰（2次堆積）を含んでいることから、火山灰の降下した10世紀前葉以降と考えられる。



調査区全景（南から）



調査区西壁断面（東から）



S D2686溝跡（東から）



S K2688土壙（西から）

XXII 市川橋遺跡第98次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、城南二丁目3番1における個人住宅建設に伴うもので、平成30年11月21日に地権者より市川橋遺跡内における住宅建築と埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、基礎工事の際に直径600mm、長さ6.5～7.8mのコンクリート杭を54本打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。城南地区は、平成9・10年度に大規模確認調査、平成10～14年度に土地区画整理事業が実施されており、その事前の発掘調査の結果、当該地北側の隣接地で現在街路となっている部分は古代およびそれ以降の河川跡であり、墨書き土器など多数の土器類が出土することを確認している（多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合：2004）。

このため、工法変更等により遺構の保存が図れないか協議を行ったが、住宅の基礎構造の強度を得るために申請した内容で工事を実施したいとの希望があり、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。

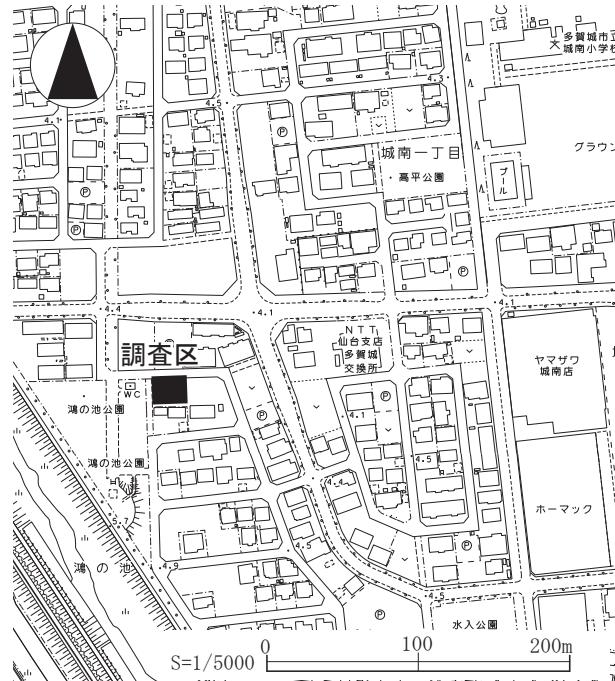
令和元年5月24日、調査に関する承諾書及び依頼書の提出を受け、6月5日より現地調査を開始した。はじめに重機により盛土及び水田層の除去を行い、それらはすべて場外の文化財用地に搬出した。盛土及び水田層はそれだけで2.5mに及ぶことから、その下の河川跡は部分的な調査にせざるを得なかった。6月5日の午後には河川堆積土が現れ、重機で掘り下げたが土器の破片が数点出土したのみであった。6月7日は雨天のため調査できず、休日明けの6月10日に堆積土の掘削を続行したところ河川の底面付近に至り、粗砂層上からウマの頭蓋骨、粗砂層からは多くの土器類が出土した。6月11日、出土遺物と堆積土の関係を精査して断面図を作成し、光波測距器により平面図を作成した。6月12日、調査区全景写真を撮影した後調査器材を搬出し、埋戻しを開始。6月13日、調査区の埋戻しが完了し、野外調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

本調査区には、城南地区土地区画整理事業時の厚い盛土整地層があり、その下が区画整理事業実施以前の表土である水田層となっている。遺構はその下で検出することができた。各層の内容については以下のとおりである。

I 1層：暗オリーブ色砂。区画整理事業に伴う山砂主体の盛土整地層。厚さ1.9m。



第1図 調査区位置図

I 2層：オリーブ黒色土。区画整理事業直前の攪乱層。厚さ 20 cm。

II 1層：灰色粘質土。区画整理事業実施以前の水田耕作土。厚さ 20 cm、

II 2層：灰オリーブ色粘質土。区画整理事業実施以前の水田床土。厚さ 25 ~ 30 cm。

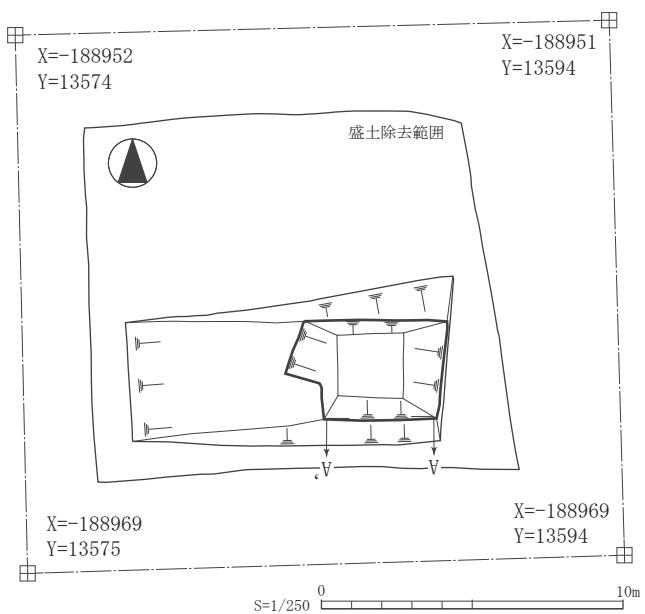
III 層：オリーブ褐色粘土。SX 3582 河川跡の底面で検出したもので、本調査区の基盤層と考えられる。

(2) 発見した遺構と遺物

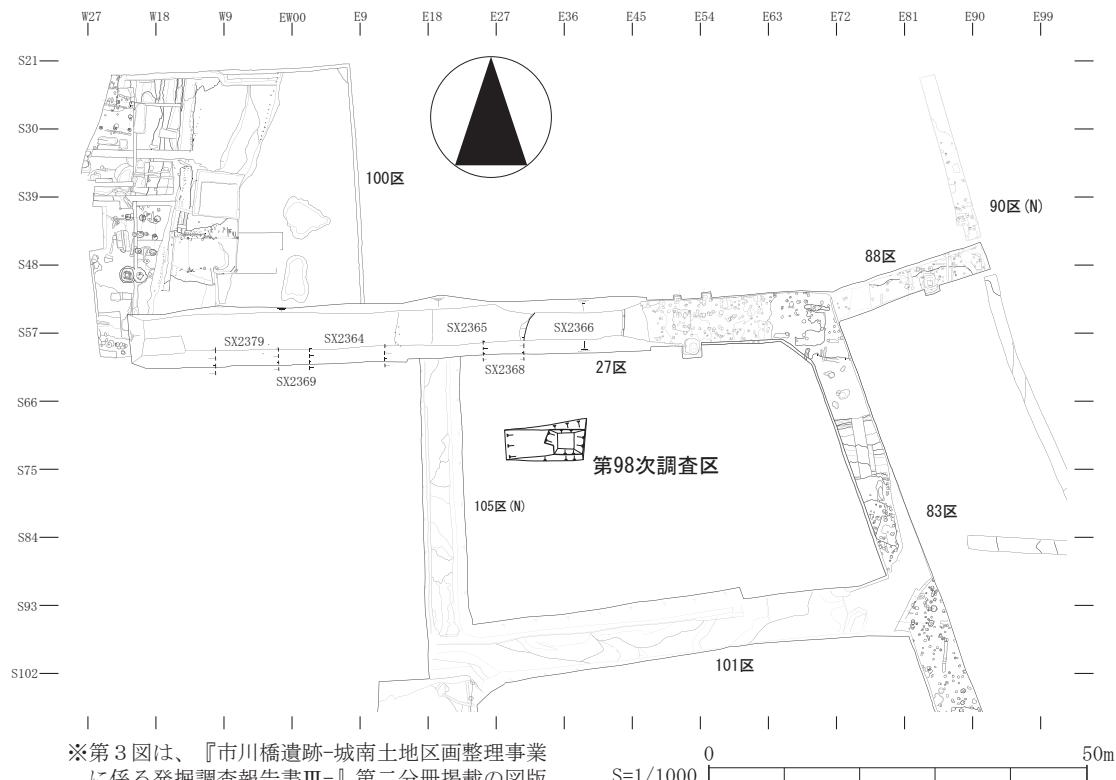
今回の調査で発見した遺構は河川跡 1 条である。堆積土が東西に大きく傾斜して堆積している状況であり、複数の河川に細分できる可能性はあるが、1 条の河川跡として報告する。

SX 3582 河川跡

SX 3582 は、調査区の東側で発見した河川跡である。検出した範囲は東西約 3.5 m、南北約 3.0 m にとどまったが、その北壁と南壁の土層堆積状況より南北方向の河川であり、底面までの深さは 2.6 m である。堆積層は黄褐色、灰色、黒褐色、オリーブ黒色等の砂を主体とした自然堆積層で、大別で 4 層、細別で 27 層に区分できる。細別の 1 ~ 5 層はおおよそ水平に堆積しているが、6・7 層は東側に大きく傾斜



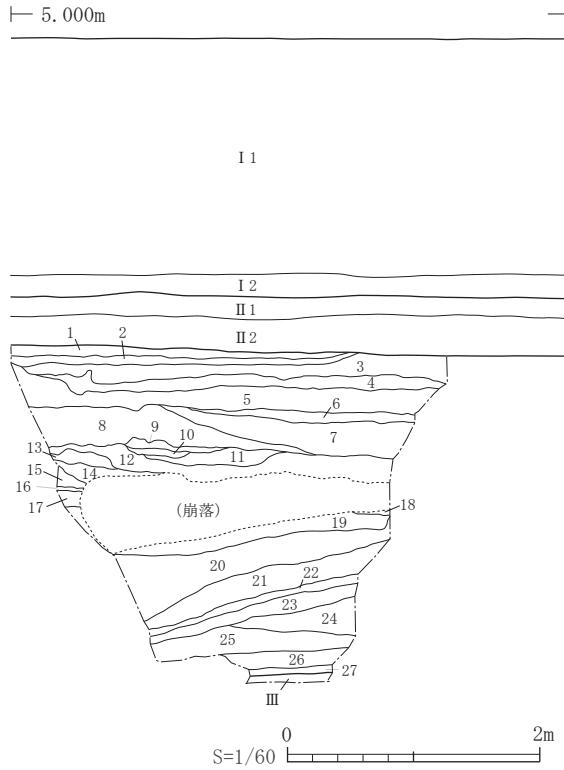
第2図 平面図



※第3図は、『市川橋遺跡-城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III-』第二分冊掲載の図版を加工し、第98次調査の測量座標を日本測地系に変換して合成

第3図 調査区と周辺地区の遺構

表1 出土遺物集計表



層名	土色	土質	特徴	遺物取上
I 1	暗オリーブ	5Y4/3	砂	
I 2	オリーブ黒	5Y3/1	砂質土	
II 1	灰	5Y4/1	粘質土	
II 2	灰オリーブ	5Y4/2	粘質土	
III	オリーブ褐	2.5Y4/3	粘土	
1	灰	10YR4/1	粘質土 底面に粗砂多く含む	
2	褐灰色	10Y4/1	砂質土	
3	灰黄褐	10YR5/2	砂質土	
4	灰	10Y4/1	砂	
5	灰	10Y4/1	砂質土 砂の粗い層含む	
6	灰	10Y4/1	砂	
7	黒褐	2.5Y3/1	砂質土 砂の薄層多く含む	
8	黄褐	2.5Y5/3	砂	
9	灰	7.5Y4/1	砂質土	
10	黄褐	2.5Y5/3	粗砂	
11	灰	7.5Y4/1	砂質土	
12	灰	7.5Y4/1	砂	
13	黄褐	2.5Y5/3	砂	
14	黒褐	2.5Y3/1	砂質土	
15	灰	5Y5/1	砂 小石の薄層含む	
16	黒褐	2.5Y3/1	粘質土 均質	
17	灰	5Y5/1	砂 小砂利の薄層含む	
18	黒	7.5Y2/	粘質土 砂の薄層含む	
19	黒	7.5Y2/	粘質土 均質	
20	オリーブ黒	10Y3/	砂質土 木片多く含む	
21	オリーブ黒	10Y3/	砂質土 木片含む	
22	オリーブ黒	10Y3/	砂	
23	オリーブ黒	10Y3/	砂質土 粘質土の薄層含む	
24	灰	10Y4/1	砂 粘質土の薄層含む	
25	灰	10Y4/1	砂	
26	オリーブ黒	10Y3/1	粘質土 木片多く含む	
27	オリーブ黒	10Y3/1	粗砂 下層に砂利を含む	

種別	器種	部位	分類	点数		
				4層	2層	1層
土師器	壺	口.体	A	0		
			B	24	1	
			不明		1	
		底	A	0		
			B I	5		
	高台付壺	底	B II	20	1	
			B III	0		
			B IV	0		
			B V	22		
			両面ヘラミガキ	2		
須恵器	甕	口.体	A	2		
			B	6	2	1
		底	不明	6	1	1
			A	2		
			B	0		
	瓶	底	不明			
			口.体		21	1
			I	2		
			II	5		
			III	27	1	
須恵系土器	壺	口.体	IV	0		
			V	21		1
		底	高台付壺		2	
			蓋		2	
			瓶	口.体	1	3
	甕	底	底	0		
			口.体		23	1
		底	底	0		
			口.体		21	
			底		1	
瓦	丸瓦	口.体	壺		3	
			底		10	
	平瓦	底	小型壺		5	1
			小皿		4	
	高台付壺	口.体	口.体	0		
			底	1		
緑釉陶器	楕(皿)	底	緑釉陶器 楕(皿)		1	
			丸瓦	II B	2	1
	平瓦	底	平瓦		0	
			弥生土器		1	
	合計		合計	224	15	5

分類 A : 非クロクロ調整

B : クロクロ調整

I : 回転ヘラケズリ

II : 手持ちヘラケズリ

III : ヘラ切

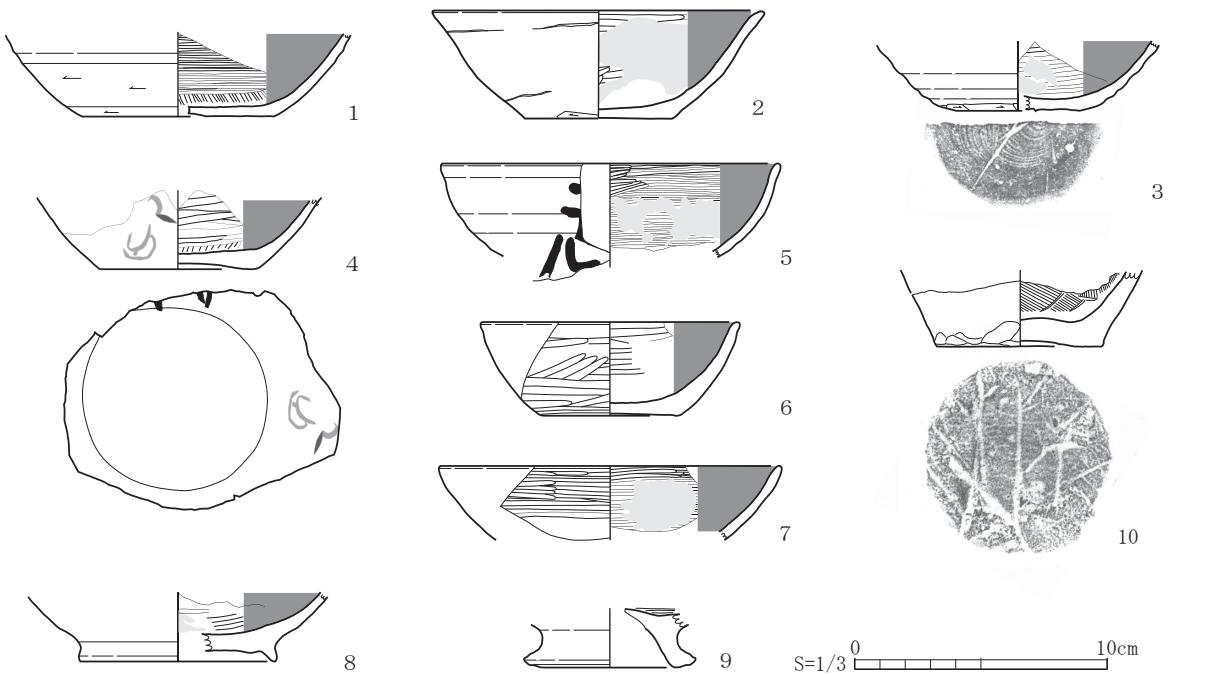
IV : 静止糸切り

V : 回転糸切り

第4図 S X 3582土層断面図

して堆積している。崩落のため図示できなかつたが、18・19層上には粒子の大きな粗砂層があり、この河川跡の底面上に堆積した27層は砂含む厚さ6cmの粗砂層である。また、26層や18・19層は、粗砂層上面に堆積した厚さ10cm以上の粘質土層である。

遺物は、第4層の最下層（27層）から整理用テン箱（54×34×60mm）で12箱、土師器、須恵器、須恵系土器、転用硯、墨書き器、瓦、動物遺体が出土し、第2層から綠釉陶器が出土している。土器類は大部分が破片であり、壊類が多く、それより大きな甕類が少ないという傾向がある。壊類の内1/4以上残存するものが、土師器では21点、須恵器では28点、須恵系土器では15点あり、須恵系土器は破片数に対して残存状況の良好なものが多いという傾向が認められる（表3）。以下、それらの内容について説明する。



(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
			外 面	内 面						
1	土師器 壊		体:ロクロナデ→回転ヘラケズリ 底:ヘラ切→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理		(7.5) 7/24			R64	底:ヘラ描き
2	土師器 壊		体:ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底:糸切り	ヘラミガキ→黒色処理	(14.2) 2/24	(6.3) 12/24	4.7		R8	
3	土師器 壊		体:ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底:糸切り	ヘラミガキ→黒色処理		(5.4) 11/24			R24	底:ヘラ描き
4	土師器 壊		体:ロクロナデ→手持ちヘラケズリ 底:回転糸切り	ヘラミガキ→黒色処理		(7.0) 24/24			R9	体:墨書き
5	土師器 壊		体:ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ→黒色処理	(15.6) 4/24				R10	体:墨書き
6	土師器 壊		体:ロクロナデ→ヘラミガキ 底:ヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理	(11.8) 3/24	(6.4) 7/24	4.3		R70	
7	土師器 壊		体:ロクロナデ→ヘラミガキ 底:ヘラミガキ	ヘラミガキ→黒色処理	(15.6) 2/24				R69	
8	土師器 高台付壊		体:ロクロナデ 底:糸切り→ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理		(9.0) 3/24			R84	
9	土師器 高台付壊		体:ロクロナデ	ヘラミガキ→黒色処理	(7.8) 3/24				R71	
10	土師器 甕		体:不明 底:木葉痕	ヘラナデ			7.6 24/24		R12	

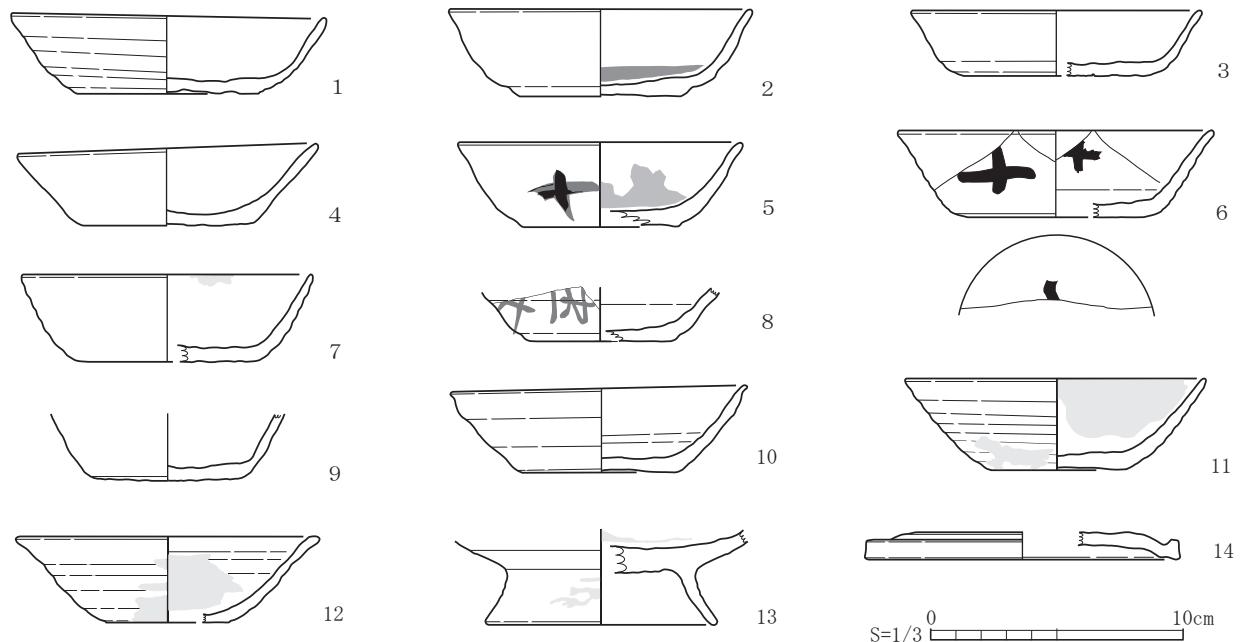
第5図 出土遺物(1)

土師器 土師器には壺、高台付壺、甕がある。

壺は、すべてロクロ調整を行ったもので、B II類（第5図2・3・11）とB V類（4）が多く、B I類も少数出土している（1）。大部分が内面をヘラミガキし、黒色処理したものであるが、外面も口縁部から体部にかけてヘラミガキしたものが数点出土している（6・7）。高台付壺は2点出土しており、やや高めの小さい高台がつくものが1点ある（9）。

甕は、A類とB類があり、前者には底部に木葉痕を残すものが1点ある（10）。

須恵器 須恵器には壺、高台付壺、瓶、甕がある。



(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録番号	備考
			外 面	内 面						
1	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	14.2 16/24	8.3 24/24	3.6		R2	
2	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	13.6 12/24	7.6 17/24	3.6		R5	
3	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	13.2 8/24	8.6 12/24			R6	
4	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	13.6 12/24	7.6 17/24	3.6		R3	
5	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 4/24	(7.0) 6/24	3.9		R7	体: 漆書き
6	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 1/24	(9.2) 10/24	4		R21	体・底: 墨書き
7	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 4/24	(8.6) 10/24	4		R76	
8	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ		(6.8) 7/24			R22	
9	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: ヘラ切り	ロクロナデ		(7.2) 24/24			R36	体: 墨書き
10	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: 回転糸切り	ロクロナデ	13.4 23/24	7.1 24/24	3.9		R1	
11	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: 回転糸切り	ロクロナデ	13.8 15/24	6.2 24/24	4.2		R4	
12	須恵器 壺		体: ロクロナデ 底: 糸切り	ロクロナデ	(13.6) 7/24	(5.6) 9/24	4.0		R14	
13	須恵器 高台付壺		体: ロクロナデ 底: 回転ヘラケズリ	ロクロナデ		(6.2) 6/24			R88	
14	須恵器 蓋				(14.2) 1/24				R42	

第6図 出土遺物（2）

壺は、Ⅲ類（第6図1～9）やV類（10～12）が多く出土している。

高台付壺は、外側に開く高い高台がつくものが1点ある。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを行った後に高台を貼り付け、ロクロナデを施して仕上げたものである（13）。

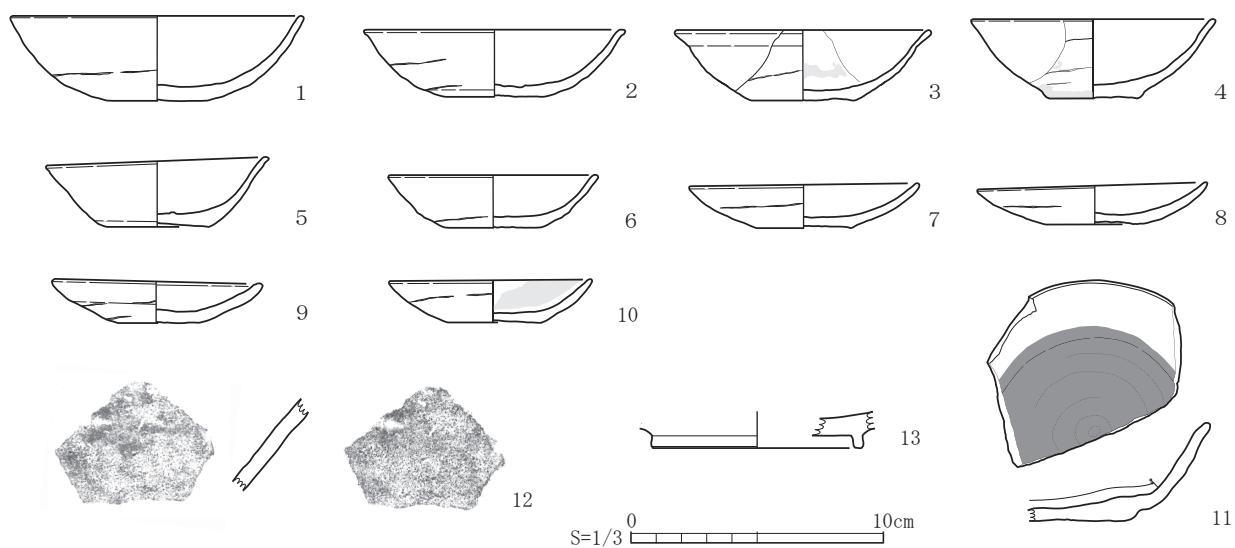
瓶は、体部の破片が1点出土している。胎土は灰白色で割れ口は滑らかであり、大戸窯製品（福島県会津若松市）と考えられる。

甕は、ほとんどが体部の破片であり、頸部に波状文を施したものが1点ある。

蓋は、天井部が低い扁平な器形のものが1点ある（14）。

須恵系土器 須恵系土器には壺、高台付壺、小型壺、小皿がある（註）。

壺は、口径11.0cm、器高4.4cmのものから、口径13.2cm、器高3.9cmのものがある（第7図1～4）。



（単位：cm）

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率 □/△	底径 残存率 □/△	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外 面	内 面						
1	須恵系土器 壺		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	(13.2) 2/24	(4.6) 24/24	3.9		R15	
2	須恵系土器 壺		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	(12.0) 6/24	(4.9) 24/24	2.2		R26	
3	須恵系土器 壺		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	(11.6) 2/24	(4.6) 13/24	3.2		R74	油煙
4	須恵系土器 壺		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	(11.0) 2/24	(4.4) 11/24	3.6		R75	油煙
5	須恵系土器 小型壺		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	10.0 24/24	4.6 24/24	3.0		R16	
6	須恵系土器 小型壺		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	(9.4) 8/24	(4.4) 14/24	2.4		R19	
7	須恵系土器 小皿		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	10.4 24/24	4.4 24/24	2.0		R27	
8	須恵系土器 小皿		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	10.5 24/24	4.5 24/24	1.8		R28	
9	須恵系土器 小皿		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	9.9 16/24	3.7 24/24	1.9		R18	体：ヘラ描き
10	須恵系土器 小皿		体：ロクロナデ 底：回転糸切り	ロクロナデ	9.3 24/24	4.3 24/24	2.0		R17	
11	転用硯								R5	
12	弥生土器								R95	
13	緑釉陶器 椀（皿）		底：削り出し高台				(8.2) 1/24		R94	

第7図 出土遺物（3）

小型壺は、それより小さめで、口径が小皿に近いものである（5・6）。内外面ともロクロナデ調整が施されており、内面は平滑であるが、外面には粘土紐巻き上げ痕を残すものが多い。

小皿は、口径9.3～10.5cmで、器高が2.0cm以下の扁平なものである（7～10）。壺、小型壺と同様、外面に粘土紐巻き上げ痕を残すものが多い。

転用硯 転用硯は須恵器壺を転用したものが3点出土している。第7図11はロクロからヘラ切りで切り離した須恵器壺の内面底部を硯面としたもので、ロクロナデによる同心円状の凸部に、墨を磨ることで生じた摩耗痕が観察できる。その痕跡と墨は残存した内面底部のほぼ全面に及んでいる（写真図版3-1）。その外の2点は、須恵器壺の内面に墨痕が観察できるのみである。

墨書き土器 墨書き土器は4点出土している。第5図4は土師器壺の体部外面の二箇所に墨痕があるが、文字ではない可能性もある。第5図5は土師器壺の体部外面に墨書きがあるが判読できない。第6図6は須恵器壺の体部内外面と底部に墨書きがある。体部の墨書きは内外面とも「十」であり、底部の墨書きは不明である。第6図8は須恵器壺の体部に「□平カ」の墨書きがある。

そのほか、墨ではなく漆で文字を書いたものが1点ある。第6図5は須恵器壺の体部外面に「十」と書いたもので、漆は濃い部分は黒色であるが、薄い部分は茶色を呈している。

ヘラ描き土器 ヘラ描き土器は焼成前の土器に文字や記号を描いたもので、文字を書いたものが1点、記号を描いたものが5点出土している。第7図9の須恵系土器小皿には体部外面に正位で「登カ口」と二字縦書きで記されている。第5図1は土師器壺の底部に釘状のもので「×」、3も土師器壺の底部に「一カ」がある。

付着物がある土器 付着物がある土器として、油煙が付着したものが21点、オリーブ色や褐色の付着物があるものが48点ある。油

煙は、土師器壺・高台付壺、須恵器壺、須恵系土器壺・小型壺の各部位に付着が認められるもので、灯明皿として使用された痕跡を明瞭に残しているものがある（写真図版3上段中央）。オリーブ色や褐色の付着物があるものは、土師器壺、須恵器壺・瓶・甕、須恵系土器壺・小型壺に付着が認められるもので、その部位は内面がほとんどである。

緑釉陶器 緑釉陶器は椀または皿の底部破片が1点出土している（第7図13）。高台は削り出しによる幅の狭い輪高台で、内外両面に灰オリーブ色の緑釉が施されている。内面底部には粗いヘラミガキが施されている。胎土は軟質で灰白色を呈している。削り出し高台であることと、胎土の特徴から平安京近郊の製品と考えられる（前川：1989）。

表2 付着物がある土器一覧表

種別	器種	付着物A			付着物B			合計
		内面	外面	内外面	内面	外面	内外面	
土師器	壺		4		24			28
	高台付壺	1						1
須恵器	壺	4	1	5	17		1	28
	高台付壺			1				1
	瓶				1			1
	甕				3			3
須恵系土器	壺	2	1		1			4
	小型壺	1	1		1			3
	皿							0
合計		8	7	6	47		1	69

(註) 須恵系土器の壺、小型壺、小皿の区分については、出土した完形品及び全体の形状が明らかな復元資料10点を対象とした口径と器高のまとまりによるものである。口径は約11cmが境界となって大型品と小型品に区分でき、その内の小型品の器高は約2cmが境界となってやや深い器形と浅い器形に区分できたことによるものである。よって小型品のやや深いものを小型壺、浅いものを小皿とし、小型壺と類似した大型品を壺とした。

動物遺体 動物遺体は、ウマが10点、ウシが1点、シカが1点、不明が1点、合計13点出土している。それぞれの部位と数量は、ウマ頭蓋骨（下顎骨を含まない）1、下顎第臼歯（左）1、下顎骨破片1、肩甲骨（右）、橈骨（右）1、尺骨（右）1、脛骨（右）2、脛骨（左）1、1中足骨（左）1、ウシ橈骨（左）1、シカ中手骨（左）1である。ウマ頭骨は長さ475mm、幅185mmであり、前頭部には85×45mm、後頭部には65×45mmの穿孔がある。その位置や範囲は、脳髄を摘出したとされる大阪府城山遺跡出土ウマに類似している（松井：1987）。

弥生土器 弥生土器は深鉢の体部破片が1点出土している。目の細い縄文がわずかに観察できる（第7図12）。縄文土器や弥生土器は、本地区の南東約500mの調査区において、古代の河川堆積土から約30点の小破片が出土している（多賀城市教育委員会：2006）。

3 考察

（1）出土した土器の概要

出土した遺物のうち、土師器坏はすべてロクロ調整を行ったもので、BⅠ類も少数あるが、BⅡ類とBⅤ類が主体となっている。このような土師器坏の組み合わせは多賀城跡第61次調査の第10層出土土器に見られるところであり、年代は9世紀後半に位置づけられている（宮城県多賀城跡調査研究所：1992）。

須恵器坏は、再調整を行わないⅢ類とV類であり、Ⅲ類がやや多い。このような須恵器坏の組み合わせが一致する出土例は明らかでないが、Ⅲ類よりV類が多くなっていく傾向があり、9世紀後半とされる多賀城跡第61次調査第10層出土土器の段階ではⅢ類は確認できないことから、年代は9世紀後半以前と考えられる。

このような土師器坏と須恵器坏の年代は、10世紀前葉以降に出現すると考えられている須恵系土器坏等年代と大きく乖離するものである。本調査で出土した土器類のうち、土師器坏と須恵器坏の占める割合は合わせて86.9%であり、須恵系土器坏類の13.1%を大きく上回ってはいるものの、破片数自体が多いこと、一方出土点数が少ない須恵系土器に完形品やそれに近い資料が多いなど、層位的には同一の層から出土したものではあるが、土器の出土状況に大きな相違が認められる（表3）。出土した遺構が河川跡ということからすれば、須恵系土器が含まれる河川にそれ以前の土師器や須恵器が何らかの原因で混入した可能性も想定できるが、須恵系土器についても同様に一括資料とは言い難い側面を有しているといえよう。このような状況ではあるが、年代的に古い土師器や須恵器はSX3582の年代を考える上で特に支障はないので、以下、須恵系土器を中心にSX3582の年代の検討を進めることとする。

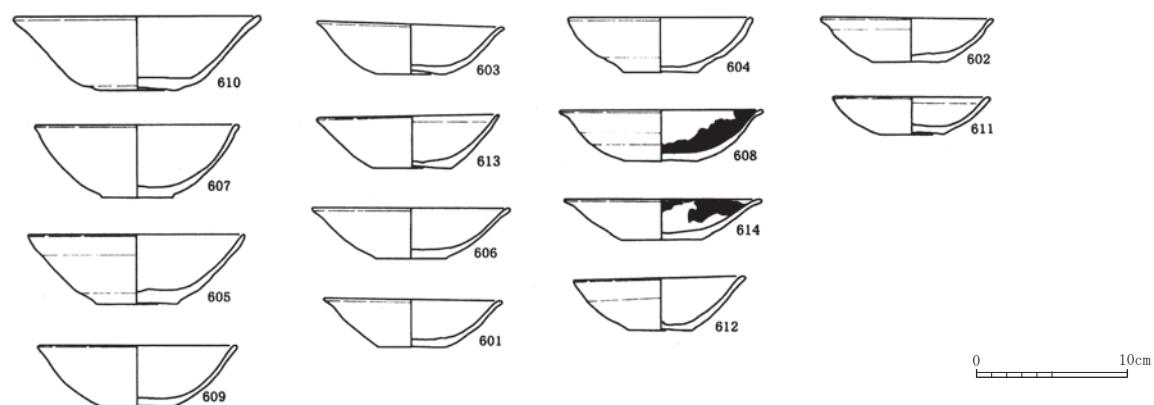
須恵系土器については、多賀城跡出土土器の変遷の中で、大型の坏類に限られる土器群がE群、大型の坏類と小型の坏類の両者で構成される土器群がF群に分類され、E群は10世紀前半、F群は10世紀中頃という年代が、長い間この時期の土器の基準となっていた（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所：1982）。その後、第61次調査では、8世紀中頃から12世紀中頃に至る安定した遺物包含層を検出し、灰白色火山灰降下以降坏類では須恵器がわずかとなり、第7層では土師器が25%、須恵系土器が75%、第6層では土師器が15%、須恵系土器が85%となって、須恵系土器が大半を占めるとされている（宮城県多賀城跡調査研究所：1992）。年代観についても進展があり、政府跡のSK058、SK078土壤、政府

表3 坏類の残存状況

	総点数	残存率				
		4/4	3/4	2/4	1/4	<1/4
土師器	75	0	1	4	16	54
須恵器	78	1	2	5	20	50
須恵系土器	23	4	2	3	6	8
合計	176	5	5	12	42	112

多賀城市埋蔵文化財調査センターでは、坏類の残存率を口縁部、底部ごと24分割した円周上で計測し、出土土器の観察表内に記載している。この表では、口縁部と底部の残存率を合算し、二分して得た全体の残存率を、分母を4として示した。

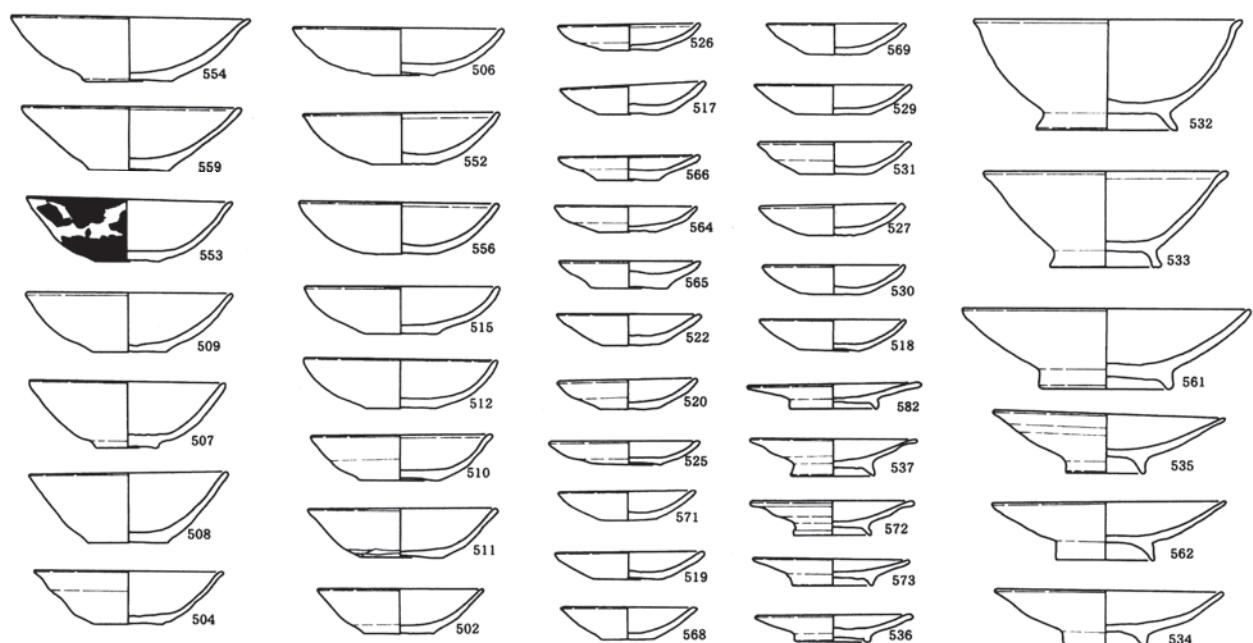
SX1812 7層



SX1812 5層



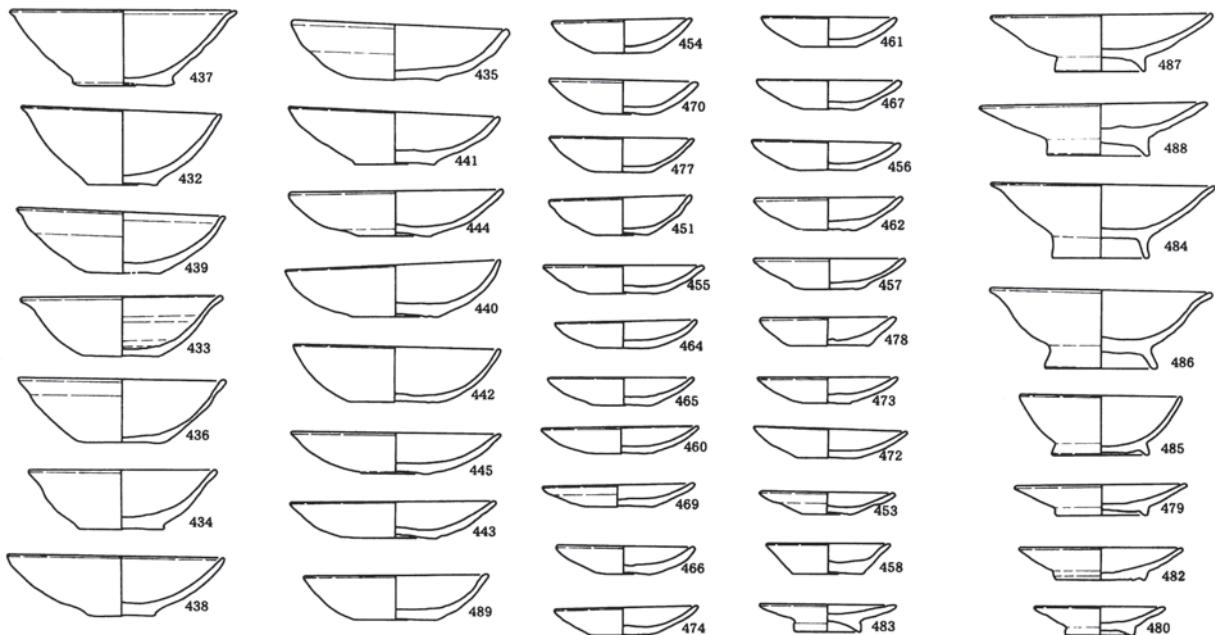
SX1812 4層



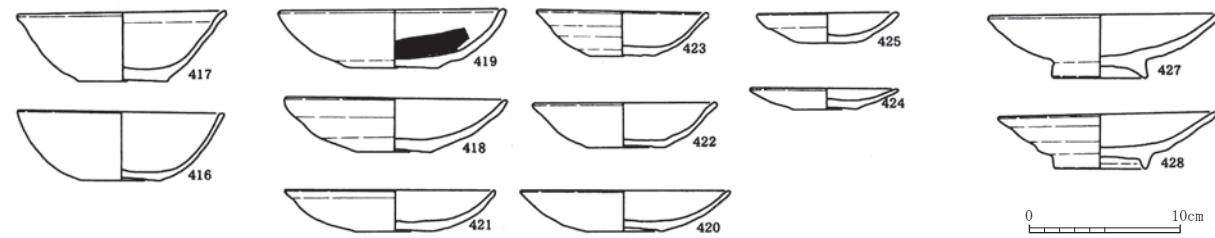
第8図 SX1812出土土器（1）

地区北側のS E 1066 井戸跡出土土器の再検討では貿易陶磁や国産施釉陶器の研究成果を取り入れ、10世紀後半から12世紀に至る新しい土器編年が示されている（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所：2010）。

SX1812 3層



SX1812 2層



SX1812 1層



第9図 SX1812出土遺物（2）

(2) 須恵系土器の検討

S X 3582 から出土した須恵系土器のうち、全体の形状が明らかな資料は壺4点、小型壺2点、小皿4点であり、その特徴は以下のとおりである。

壺：口径11.6cm、器高3.2cmのものから口径13.2cm、器高3.9cmのものがある。器形は、内湾して丸みを帯びる壺a（第7図1・2）と体部中頃に変曲点がある壺b（3・4）がある。

小型壺：口径10.0cm、器高3.0cmの深い小型壺a（5）と、口径9.4cm、器高2.4cmの浅い小型壺b（6）がある。法量は小皿とほぼ一致する。

小皿：口径9.9cm、器高1.9cmのものから口径10.4cm、器高2.0cmのものがある。体部がやや内湾気味に立ち上がる小皿a（第7図7・8）と、わずかに屈曲する小皿b（第7図9・10）があるが、いずれも扁平で、小型壺の器形とは完全に異なる。

以上のようなS X 3582出土土器と同様の特徴を有するものを本調査区周辺から抽出すると、城南土地区画整理事業に伴う発掘調査で発見したSD 1767、SD 1768（南北大路の東・西側溝）、SX 1812（南

北大路を横断する河川)、S X 1778 (南北大路東側溝と河川の間の落ち込み) 等がある (多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地地区画整理組合: 2004)。特に S X 1812 第 4 層出土資料に類似するものがあり、第 8 図 512・552・556 は壺 a、第 8 図 509 は壺 b、第 8 図 518・520 は小皿 b に対応する。また、S X 1812 第 3 層出土資料においても、第 9 図 442 は壺 a、433・434 は壺 b、第 9 図 460 は小皿 a、462 は小皿 b に対応する。S X 3582 河川跡から出土した須恵系土器の一括性については、出土状況からは明確にできなかつたが、一応 S X 1812 第 3・4 層出土資料の中に類例を求めることができる。

次に、各個体の法量を把握するため、口径と器高で代表させた法量分布図を遺構単位で作成する。S X 1812 は 6 枚の層から須恵系土器が層位的に出土しているのでそれを核とし、同様な分布状況を示す土器群を配置すると、次のような a ~ d 群にまとめることができる。

a 群: 口径 10.4 ~ 16.4 cm のもので、小型品を全く含まない

..... S X 1812 第 7 層出土土器

b 群: 口径 10 cm 以下の小型品が少數含まれる

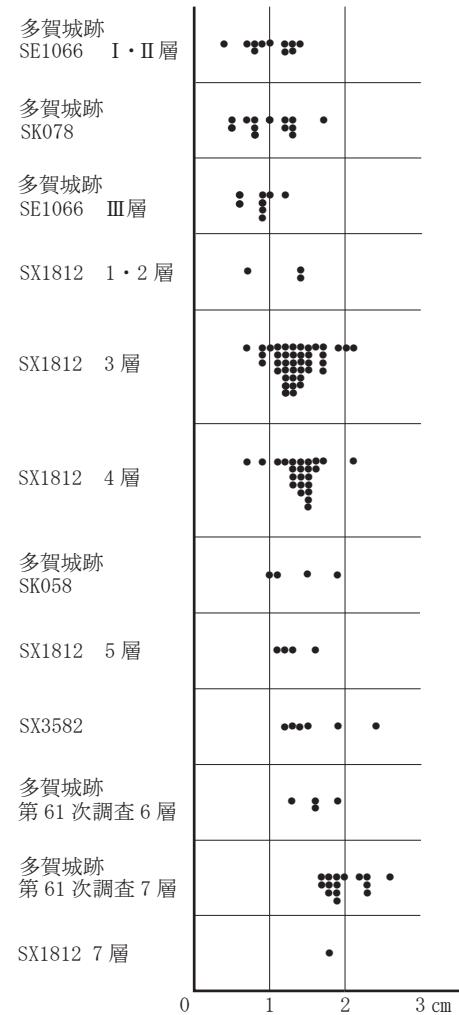
..... S X 1812 第 5 層、多賀城跡第
61 次調査第 6・7 層出土土器

c 群: 口径 10 cm 前後の小型品が多数含まれ、大型品と小
型品それぞれのまとまりが現れ始める

..... S X 1812 第 1 ~ 4 層出土土器、
多賀城跡 SK 058

d 群: 口径 8 ~ 9 cm の小型品の扁平化が進んで皿形となり、
壺と小皿による明瞭な法量分化が認められる。

..... 多賀城跡 SK 078、S E 1066 出
土土器



第 10 図 小皿の深さ

次に、a ~ d 群の壺類の器形については次のような変化を見出すことができる。

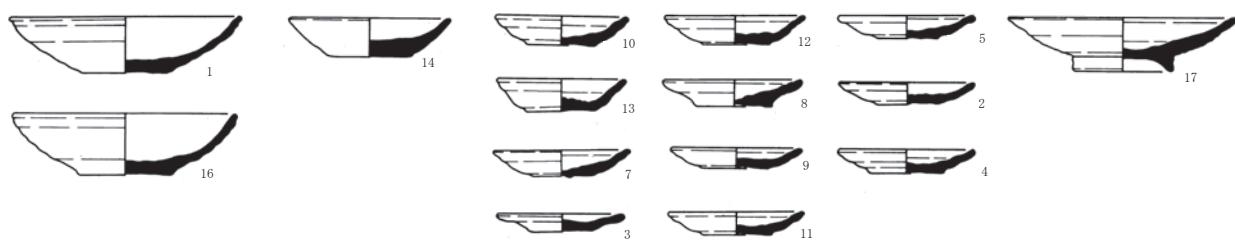
① b 群の S X 1812 第 5 層出土土器に大型品と小型品ともに器高のやや浅い個体が現れる (第 9 図 586・588)。大型品の深目の壺と浅目の壺、小型品の深目の壺と浅目の壺の組成は c 群の S X 1812 第 1 層まで見られる。

② c 群の S X 1812 第 4 層、SK 058 では大型品の浅目の壺に体部の内湾するものが現れ (第 9 図 506・512・515・556 など)、d 群の SK 078、S E 1066 にも見られる。

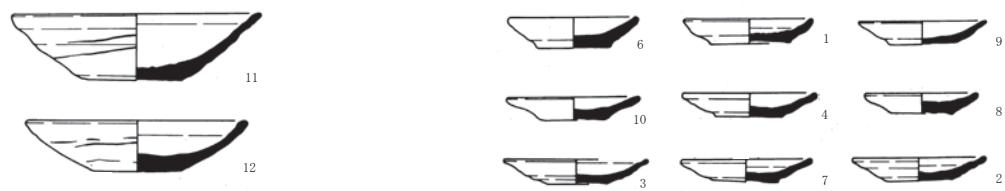
③小型品の浅目の壺は、b 群から d 群にかけて次第に深さを減じ、扁平化が進む。口径 3 cm 以下の小型の器種を対象として内面の深さの変化を観察したところ、a 群から d 群へという変遷に対応し、小型品は浅く扁平な器種が主体となっていくことがわかる (第 10 図)。

a ~ c 群が S X 1812 の層序とも対応していること、内面の深さが扁平化の傾向をたどることなどから、

SK1066 I・II層



SE1066 III層

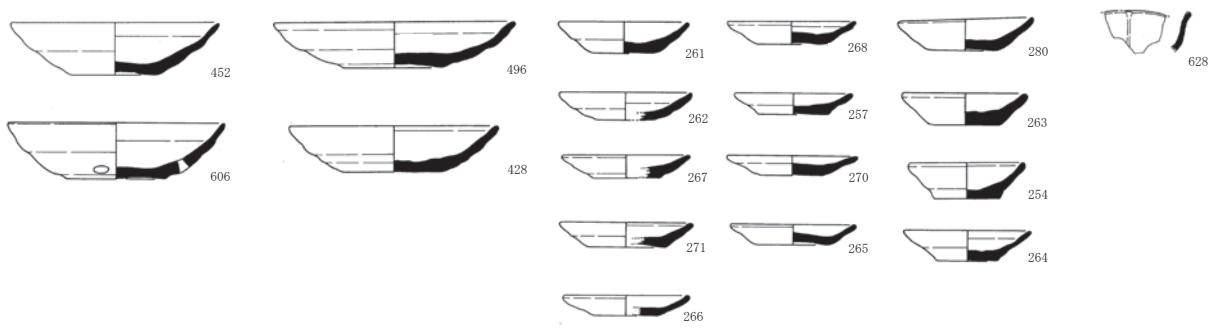


SE1066 IV層

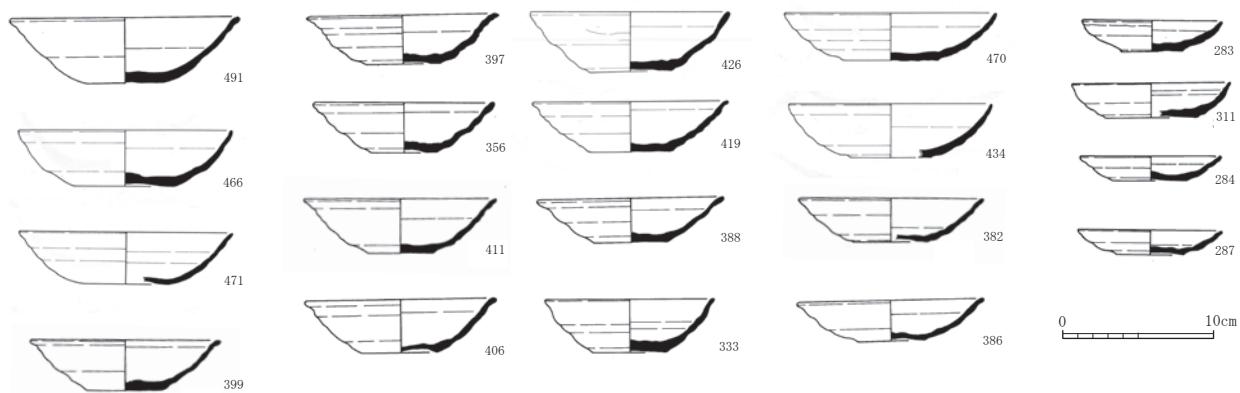


※第11図の内、SE1066は『宮城県多賀城跡調査研究所年報1978 多賀城跡－昭和53年度発掘調査概報－』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所(1979)、SK058・SK076は『多賀城跡 政序跡 図録編』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所(1980)より複写し、加工して作成。

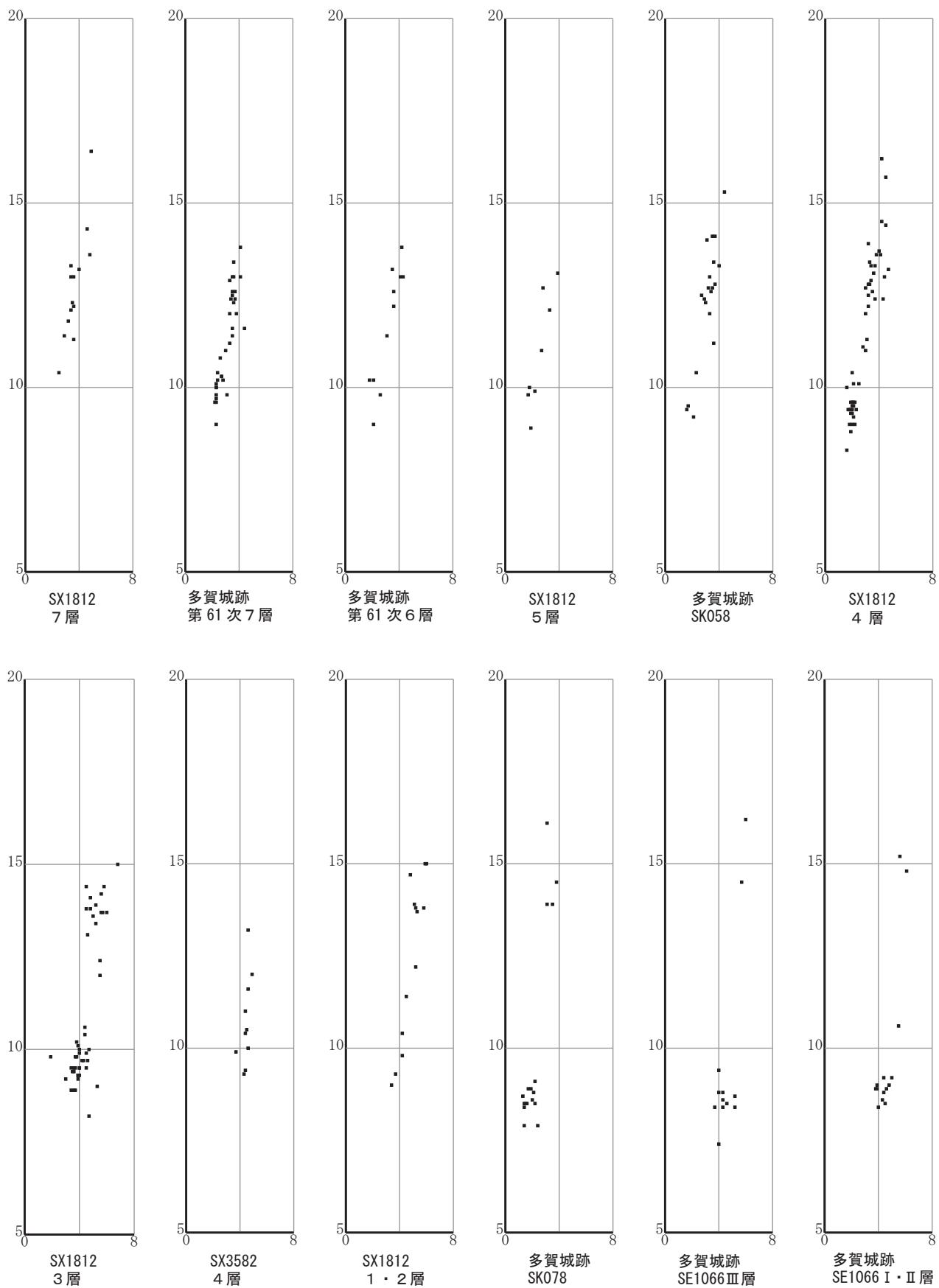
SK078



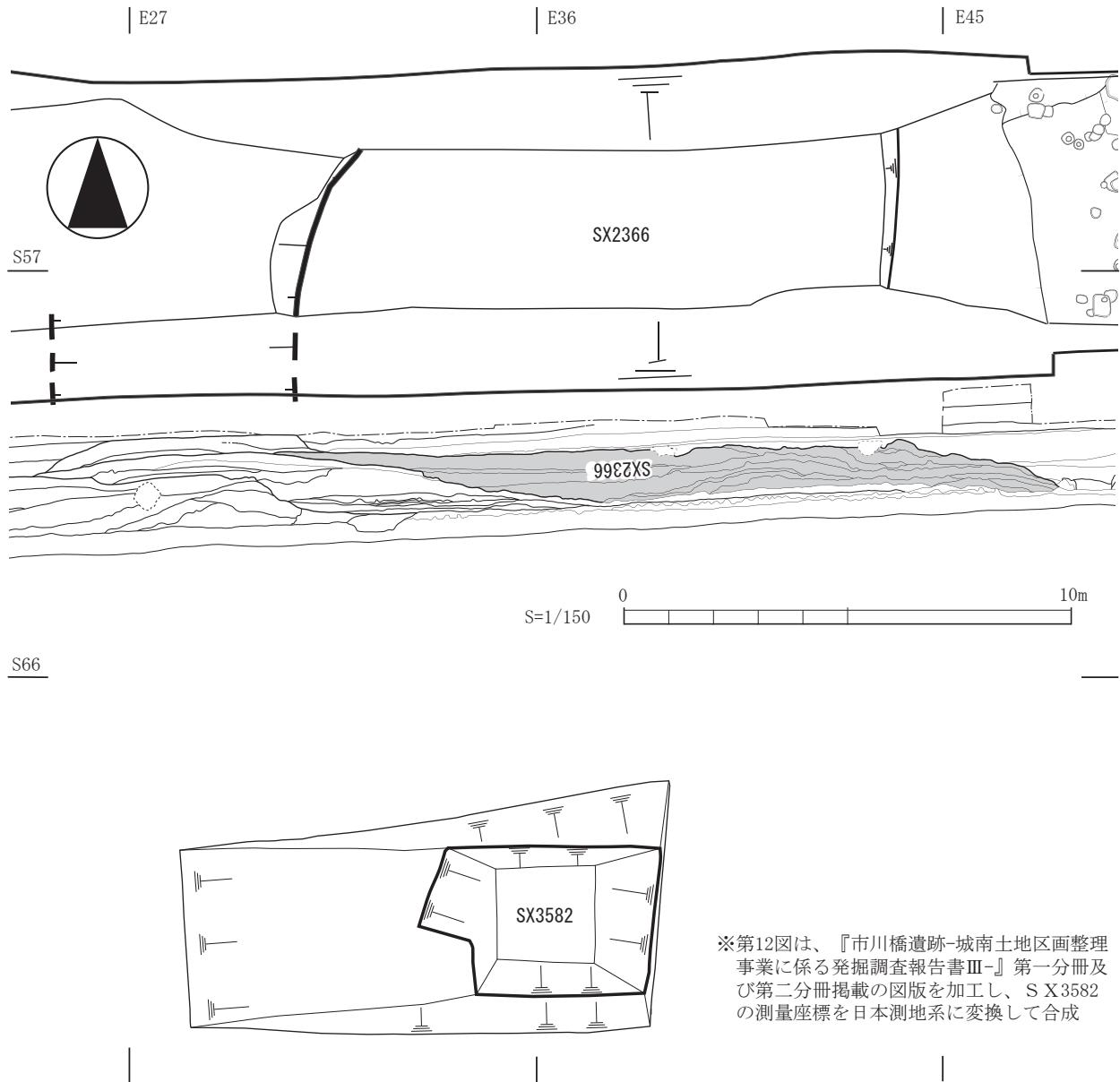
SK058



第11図 多賀城跡出土土器



第12図 須恵系土器坏法量分布図



第13図 SX3582とSX2366の位置関係

a～d群は時期差を伴った土器群と位置づけることができる。器形の変化とも矛盾しない。

年代については、b群の多賀城跡第61次調査第7層が10世紀前葉を上限とし、10世紀中頃以降と考えられている。それより古いa群は、須恵系土器が大型の壺類のみで構成されるという特徴から10世紀前半と考えられる。d群はSE1066の堆積層I層から白磁皿、III層から白磁碗が出土している。SE1066はIII層が人為的に埋戻した層、I・II層が埋め戻した後の自然堆積層であるが、出土した土器に大きな相違は認められず、白磁の碗と皿も大宰府分類のII-1a類であることから区分しないで扱うことが可能（太宰府市教育委員会：2000）である。白磁の年代は11世紀後半から12世紀前半頃とされていることから、出土した土器にも白磁碗・皿の年代と同様幅を持たせた11世紀後半から12世紀前半頃とせざるをえない。c群については実年代に関わる直接的な手掛かりがないので、10世紀後半から11世紀前半にかけての年代を想定しておきたい（註）。

※第12図は、「市川橋遺跡-城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III-」第一分冊及び第二分冊掲載の図版を加工し、SX3582の測量座標を日本測地系に変換して合成

以上の検討の結果、本調査区周辺及び多賀城跡の須恵系土器を主体とする土器群は、a群からd群に分類したとおり10世紀前半から12世紀前半にかけて変化していった状況をたどることができた。問題としたSX3582出土の須恵系土器は、器形の特徴や、法量変化のあり方などからc群に位置付けることが妥当であり、年代は10世紀後半から11世紀前半と考えられる。

(3) 遺構の年代と性格

「1 調査に至る経緯と経過」でも触れたように、本調査区周辺では平成9・10年度に大規模確認調査、平成10～14年度に発掘調査を実施しており、東西約70mの範囲で7時期におよぶ南北方向の河川跡を確認している。それらのうち、本調査区に延びてくると見られるのは最も東側に位置するSX2366で、SX3582との間隔が約15mという位置関係から見ても同一の河川である可能性が高い。SX2366は灰白色火山灰降下時の河川であるSX2368と重複し、それより新しいことから10世紀前葉以降の河川とは認識していたが、今回の調査で須恵系土器の年代を検討した結果、10世紀後半から11世紀前半にかけてという具体的な年代を得ることができた。

SX2366をはじめ、南北大路東側の南北方向の河川については、多賀城南面を北西から南東の方向に延びていた河川を、南北大路の南延長線上を流れるように改修し、東西・南北大路とともに、計画的なまちづくりの一環で整備した運河と考えている。SX2366より古い10世紀前葉以前のSX2365からは大量の土器が出土し、その中には祭祀遺物である人面墨書き土器が多数含まれることから、祭祀を行う祓いの場でもあったと考えている。SX2366・3582から祭祀に係る遺物は出土しておらず、祓いの場としての性格がどの時期まで継続したのかは明らかではない。

次に、出土遺物の中で、出土状況が良好であった動物遺体のウマ頭蓋骨について触れておきたい。松井章は、官の馬牛が死んだ場合、皮、肉、角、脳を取りという養老律令の中の廐牧令の規定や、脳を皮鞣しに使用するという延喜式の記載を紹介し、大阪府城山遺跡出土のウマの頭蓋骨を開けられた穿孔を脳髄摘出時に開けられたものとした（松井：1987）。SX3582から出土したウマの頭蓋骨の穿孔も、松井が示した城山遺跡出土ウマと同様に脳髄摘出時の痕跡と考えられ、廐牧令に見える官の馬牛の死体利用が、多賀城においても行われていたことを伺わせる。本遺跡周辺において、同様の痕跡を残すウマの報告例はないが、多賀城南辺築地の南側150～250mの地点を対象とした市川橋遺跡の調査では、ニホンジカとイノシシの頭蓋骨それぞれ2点に意図的に穿孔されたものがあり、皮を剥いた後に骨髄を摘出した痕跡と理解されていることから（宮城県教育委員会：2001）、ウマ・ウシに限らず、ニホンジカやイノシシの脳髄も皮鞣しに使用されていたことが伺われる。動物の死体利用については、骨を加工した卜骨、骨鏃、装身具、刀子の柄などが本遺跡周辺から多量に出土していることからも明らかのように（多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合：2004）、動物との多様な関わりが知られ、解体作業の場やそれに従事した人々の存在など、多賀城南面に形成されたまち並みの実像を解明する上で重要な視点になると考えられる。

(註) 多賀城政府跡周辺地区では既に10～12世紀の土器編年を行っており、a～d群の中に位置付けた資料の年代を示している。かつて、大型の壺類と小型の壺類の両者で構成される土器群として10世紀中頃とされていたSK058、SK078の年代観は、SK058が10世紀後半、SK078が10世紀後半から11世紀中頃という年代幅の中で11世紀前半を中心とした年代に修正され、SE1066については、11世紀後半から12世紀前半という年代幅の中で11世紀後半に位置付けられている（宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所：2010）。SK078とSE1066を時期差と捉えているが、それぞれの須恵系土器に大きな違いは見い出せない。11世紀前半に位置付けたSK078の年代は、10世紀後半から11世紀中頃とされる白磁皿XI類の年代観に依っているが、須恵系土器が壺や小型壺の完形品を多数含むのに対し、口縁部の小片にすぎない白磁皿を一括資料と捉えることができるかどうか疑問である。

4 まとめ

- (1) 東西大路と南北大路の道路角から南東約 100 メートルの地点を調査し、南北方向の河川跡を検出した。
- (2) 河川の年代は 10 世紀後半から 11 世紀前半と考えられる。

参考文献

- 多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地区画整理組合『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III—』2004
- 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書IV—縄文・弥生・古墳時代・中世以降の考察編1』2006
- 太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡X V-陶磁器分類編-』2000
- 前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」『古代文化 第41巻第5号』1989
- 松井章「養老厩牧令の考古学的考察—斃れ馬牛の処理をめぐって—」信濃史学会『信濃 第39巻第4号』1987
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡 本文編』1982
- 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政府跡 補遺編』2010
- 宮城県多賀城跡調査研究所「III. 貿易陶磁器」『宮城県多賀城跡調査研究所年報2005 多賀城跡』2006
- 宮城県教育委員会『市川橋遺跡の調査—県道「泉—塩釜線」関連調査報告書III—』2001
- 宮城県教育委員会『山王遺跡III—仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書—多賀前遺物編』1996
- 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1978 多賀城跡—昭和53年度発掘調査概報—』1979
- 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991 多賀城跡』1992



調査地区全景（西より）



調査開始前の状況



河川跡調査状況



SX3582土層堆積状況



ウマ出土状況



須恵系土器出土状況

写真図版 1



第6図10



第6図1



第6図4



第6図11



第7図5



第7図10



第7図7

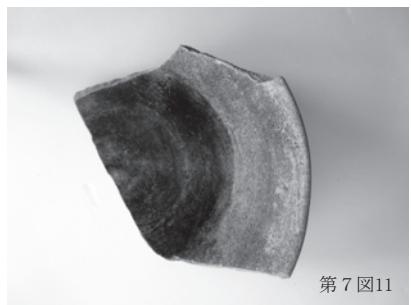


第7図8

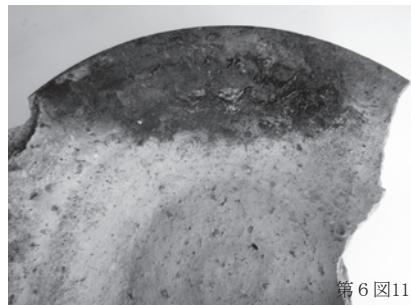


SX3582 出土須恵系土器

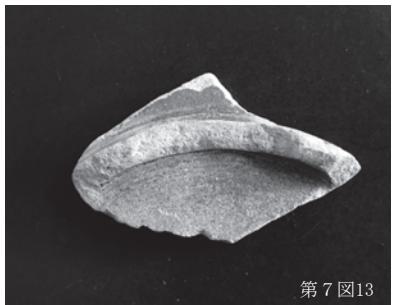
写真図版2



第7図11



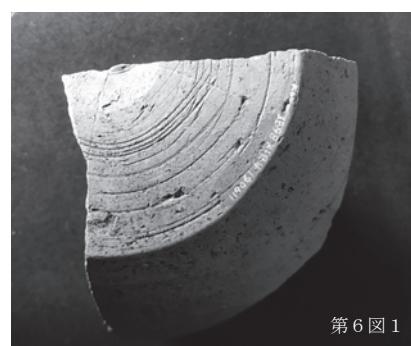
第6図11



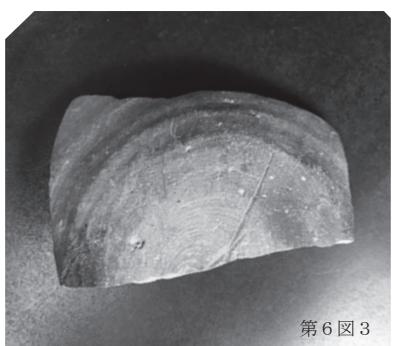
第7図13



第7図9



第6図1



第6図3



R19



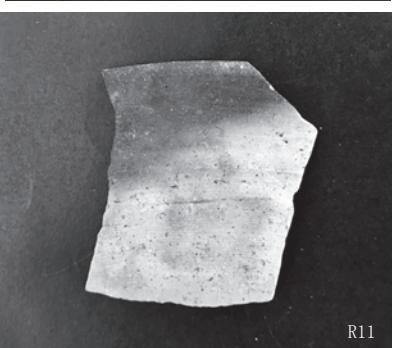
R56



R57



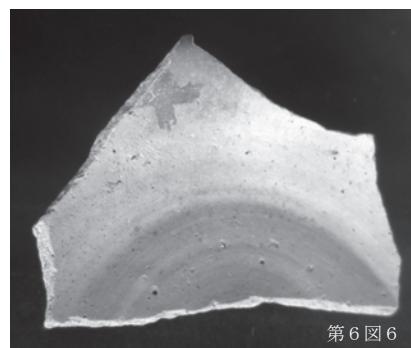
第5図5



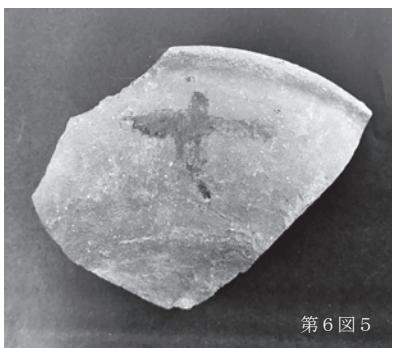
R11



第5図4



第6図6



第6図5

R19・56・57 (ヘラ描き)、R11 (墨書き) : 土師器坏

写真図版3



1 a



1 b



1. ウマ頭蓋骨 2. ウマ脛骨（右） 3. ウマ橈骨（右） 4. ウマ中手骨（左） 5. ウマ脛骨（右）
6. ウシ橈骨（左） 7. ウマ脛骨（左） 8. ウマ下顎第4前臼歯（左） 9. ウマ下顎骨破片
10. 不明 11. ウマ尺骨（右） 12. ウマ肩甲骨（右） 13. シカ中手骨（左）

写真図版4

XXIII 安楽寺遺跡第2次調査

1 調査に至る経緯と経過

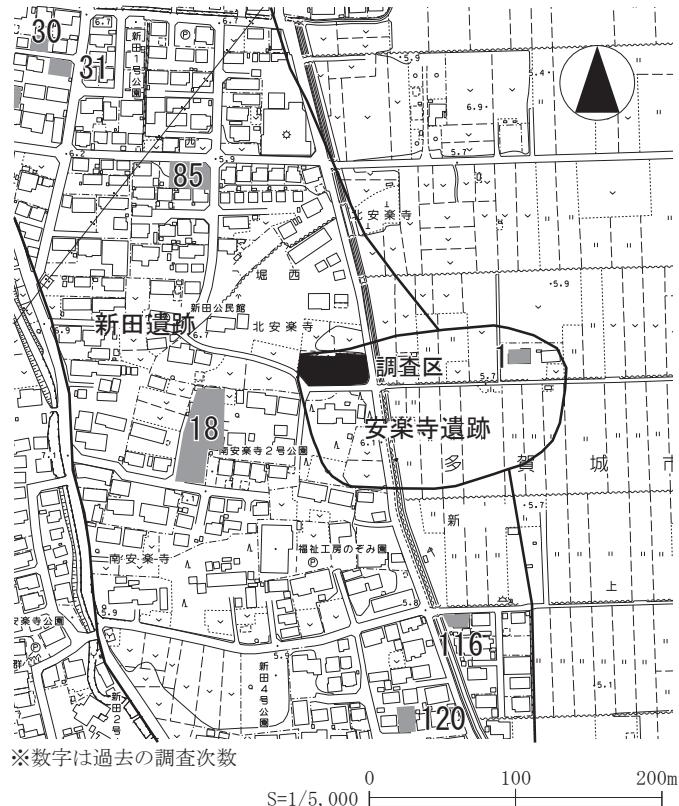
本件は、新田字堀西地内における建売住宅新築に伴う確認調査である。令和元年10月11日に事業計画者から当該事業と埋蔵文化財の関かわりについての協議書が提出された。計画では、現地表面から5cmの盛土をし、基礎部分で盛土後の地表面から35cm掘削するものであった。当該地周辺では調査実績が少ないため、遺構確認面の深さが把握できておらず、さらに計画面積が広いことから、遺構を確認する調査が必要と判断された。

このため、事業計画者と協議を行い、結果、当該地の確認調査を実施することになった。12月3日、事業計画者から発掘調査の依頼書と承諾書が提出されたのを受け、12月9日から現地調査を開始した。最初、重機による表土除去作業を行い、翌日から作業員による遺構確認作業を行った。10日に遺構確認状況の写真を撮影し、翌日に平面図及び断面図作成などの測量を行い、12月13日調査区の埋戻しを重機で実施し、現地作業のすべてを終了した。

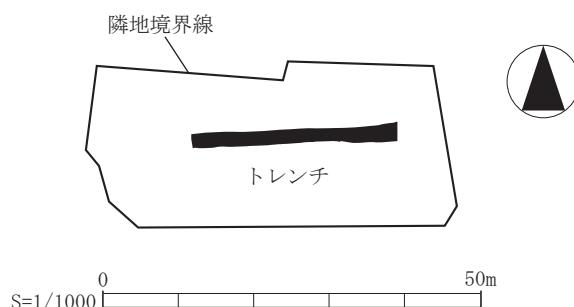
2 調査成果

(1) 層序

- I 層：現代の盛土。厚さは1m50cm。
- II 層：明褐色土層で、厚さ20～30cm、
- III 層：オリーブ褐色土層で、20cm。
- IV 1層：青灰色土層で粘質がある。
- IV 2層：青灰色土層でやや粘質がある。
- IV層の厚さは30～40cmである。
- V 層：緑灰色土で厚さは20cm。



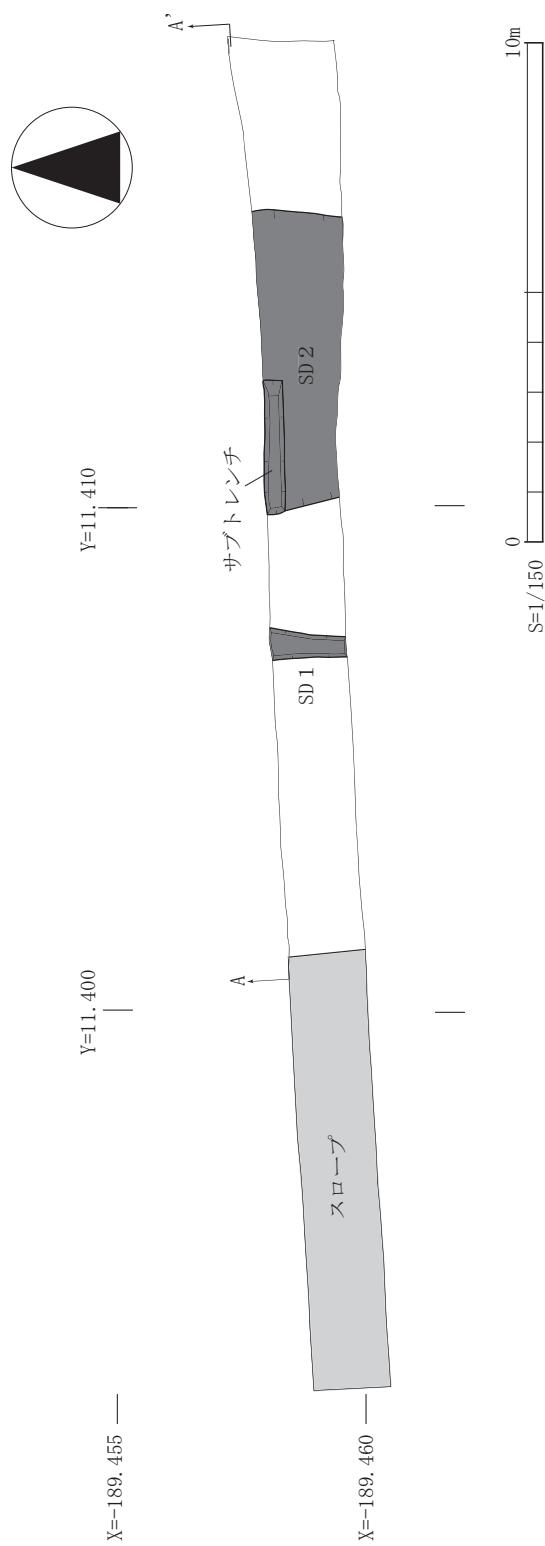
第1図 調査区位置図



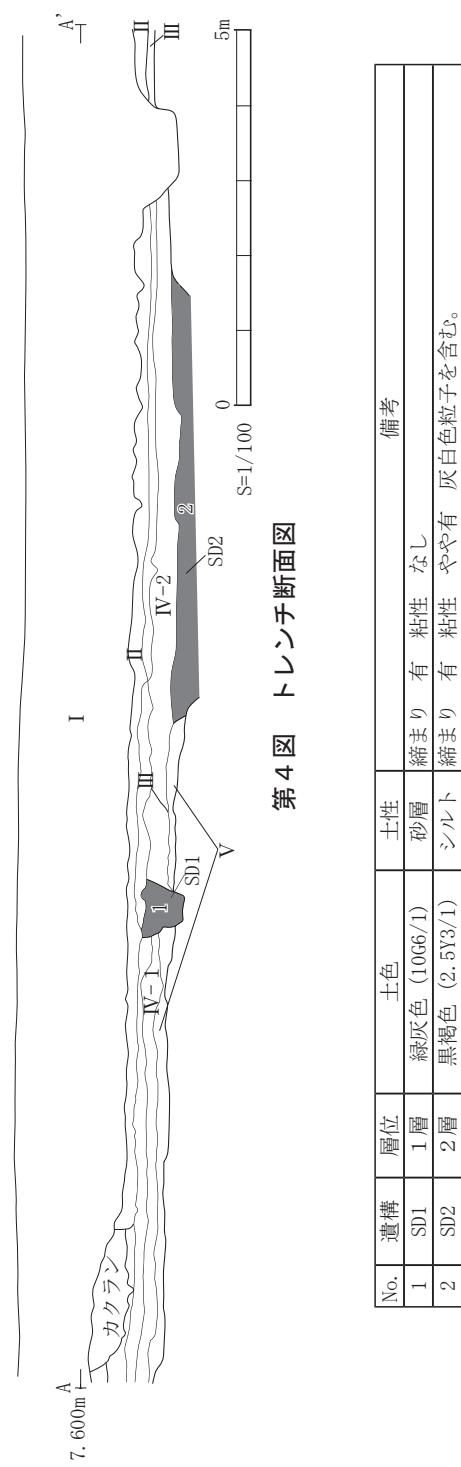
第2図 トレンチ配置図

(2) 発見した遺構

今回の調査で溝跡2条を検出した。Ⅲ層を掘りこんでいるSD1を確認した。幅45～60cm、深さ75cmの溝である。埋土は、緑灰色の砂層であった。さらに、V層を掘りこんでいるSD2を発見した。幅5.6～6.0mの黒褐色土の溝である。SD2よりもSD1が新しく、2時期あることがわかつたが、両遺構から遺物が出土しなかつたため、遺構の時期は不明である。



第3図　トレンチ平面図



第4図　トレンチ断面図

No.	遺構	層位	土色	土性	備考
1	SD1	1層	緑灰色 (10G6/1)	砂層 縮まり	なし
2	SD2	2層	黒褐色 (2.5Y3/1)	シルト 縮まり	やや有 粘性 やや有 灰白色粒子を含む。



トレンチ全景（東から）



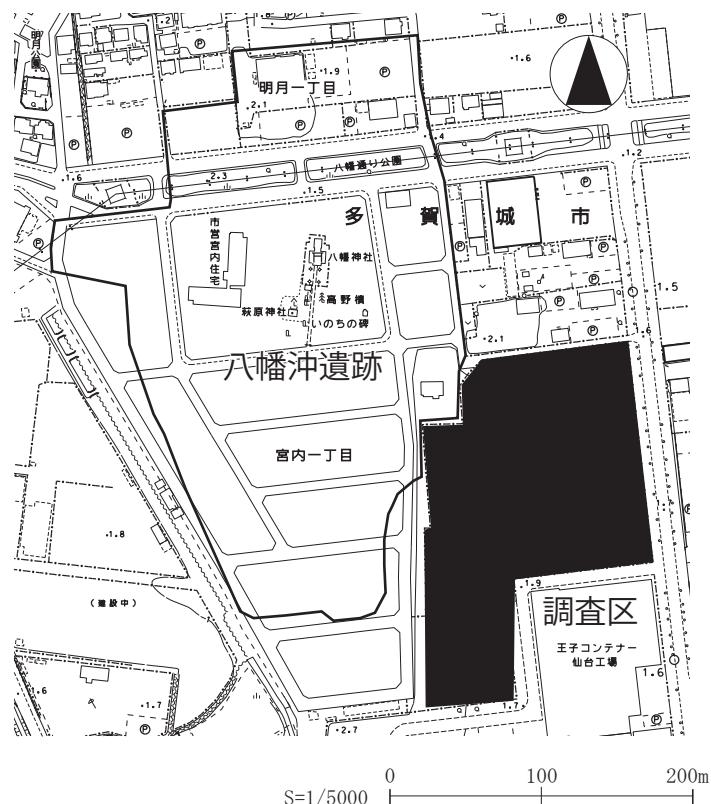
S D 2 検出状況（南西から）

XXIV 八幡沖遺跡隣接地

1 調査に至る経緯と経過

本件は、多賀城市宮内地内における事業所新築工事における確認調査である。令和元年11月25日付で事業者から当該地における埋蔵文化財の関わりについての協議書が提出された。計画では、21,939.78 m²の範囲に事務所と整備工場と洗車場を建築し、その他の範囲はアスファルト舗装をするものである。工事箇所は八幡沖遺跡の範囲外であるが、工事面積が広大であり、さらに当該地西側において平成26年度に遺跡の範囲の確認のための試掘調査が行われた結果、遺跡の範囲が拡がったため、工事箇所にも遺跡が広がっている可能性が想定された。そのため、確認調査が必要と判断された。

調査は、12月17日と1月28日に実施した。工事箇所を重機で掘削した。調査の結果、厚く盛土がされ、深い地点で2m20cmあり、浅いところでも90cmあり、遺構を確認できなかった。また、遺物も出土しなかった。当該箇所には、遺跡が拡がっていなかったことを確認した。



第1図 調査区位置図



調査区全景

報告書抄録

ふりがな 書名	たがじょうしないのいせき 2 多賀城市内の遺跡 2							
副書名	平成31年度ほか発掘調査報告書 新田遺跡 高崎遺跡 山王遺跡 市川橋遺跡 安楽寺遺跡 八幡沖遺跡隣接地							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第144集							
編著者名								
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1 TEL: 022-368-0134							
発行年月日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にいだいせき 新田遺跡 (第127次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざうしろ 宮城県多賀城市新田字後132番1	042099	18012	38度 17分 53秒	140度 57分 31秒	20181105 ~ 20181226	58m ²	資材置場 造成
にいだいせき 新田遺跡 (第129次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざみじゆふくじ 宮城県多賀城市山王字南寿福寺6番 1、6番4、7番1、8番1	042099	18012	38度 17分 56秒	140度 57分 52秒	20190227 ~ 20190319	120m ²	集合住宅 新築
にいだいせき 新田遺跡 (第130次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざにし 宮城県多賀城市新田字西20番3	042099	18012	38度 17分 43秒	140度 57分 45秒	20190306	9 m ²	個人住宅 新築
にいだいせき 新田遺跡 (第131次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざにし 宮城県多賀城市新田字西20番6	042099	18012	38度 17分 43秒	140度 57分 45秒	20190306	9 m ²	建壳住宅 新築
にいだいせき 新田遺跡 (第132次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざにし 宮城県多賀城市山王字北寿福寺72番 3	042099	18012	38度 18分 3秒	140度 58分 1秒	20190409 ~ 20190410	250m ²	共同住宅 新築
にいだいせき 新田遺跡 (第133次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざしんうしろ 宮城県多賀城市新田字新後2番5	042099	18012	38度 17分 55秒	140度 57分 45秒	20190509	8 m ²	個人住宅 新築
にいだいせき 新田遺跡 (第135次)	みやぎけんたがじょうしにいだあざしんうしろ 宮城県多賀城市新田字新後12番7、 12番8、14番14	042099	18012	38度 17分 58秒	140度 57分 44秒	20190821 ~ 20190920	73m ²	個人住宅 新築
にいだいせき 新田遺跡 (第136次)	みやぎけんたがじょうしにんぐあざこうしん 宮城県多賀城市南宮字庚申228番、 229番2番、230番、231番、295番1 番、298番、299番、300番、301番	042099	18012	38度 18分 5秒	140度 57分 53秒	20190827 ~ 20190907	440m ²	宅地 造成
にいだいせき 新田遺跡 (第138次)	みやぎけんたがじょうしきんのうあざまつしまはら 宮城県多賀城市山王字松島原1番 1、2番、3番1、山王字三千刈1 番4	042099	18012	38度 17分 57秒	140度 58分 3秒	20191015 ~ 20191101	200m ²	宅地 造成
たかさきいせき 高崎遺跡 (第116次)	みやぎけんたがじょうしひがしたなか 宮城県多賀城市東田中一丁目403・ 458番、高崎字樋の口82番	042099	18018	38度 17分 37秒	140度 59分 34秒	20190307	15m ²	個人住宅 新築
たかさきいせき 高崎遺跡 (第117次)	みやぎけんたがじょうしたかさき 宮城県多賀城市高崎一丁目229番1	042099	18018	38度 18分 10秒	141度 0分 9秒	20190305	44m ²	宅地 造成
たかさきいせき 高崎遺跡 (第118次)	みやぎけんたがじょうしたかさき 宮城県多賀城市高崎一丁目116番22	042099	18018	38度 18分 8秒	141度 0分 6秒	20190306	30m ²	個人住宅 新築
たかさきいせき 高崎遺跡 (第119次)	みやぎけんたがじょうしとめがや 宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目224番 1	042099	18018	38度 18分 11秒	141度 0分 13秒	20190722	10m ²	建壳住宅 新築
たかさきいせき 高崎遺跡 (第120次)	みやぎけんたがじょうしたかさき 宮城県多賀城市高崎二丁目49番	042099	18018	38度 17分 54秒	140度 59分 47秒	20190731	48m ²	共同住宅 新築
たかさきいせき 高崎遺跡 (第121次)	みやぎけんたがじょうしたかさき 宮城県多賀城市高崎二丁目16番4	042099	18018	38度 17分 46秒	140度 59分 43秒	20190820	30m ²	擁壁 設置

たかさきいせき 高崎遺跡 (第116次)	集落				
たかさきいせき 高崎遺跡 (第117次)	集落				
たかさきいせき 高崎遺跡 (第118次)	集落				
たかさきいせき 高崎遺跡 (第119次)	集落	古代		土師器	
たかさきいせき 高崎遺跡 (第120次)	集落	古代			
たかさきいせき 高崎遺跡 (第121次)	集落				
たかさきいせき 高崎遺跡 (第122次)	集落				
さんのういせき 山王遺跡 (第208次)	集落・都市	古代	溝跡、土壙	土師器、須恵器	古代の土壙を発見した。
さんとくいせき 山王遺跡 (第209次)	集落・都市	古代、中世	南1道路 跡、柱穴、 溝跡	土師器、須恵器、瓦	南1道路跡を発見した。
さんとくいせき 山王遺跡 (第212次)	集落・都市	古代、中世	掘立柱建物 跡、井戸跡	土師器、須恵器、木 製品、陶磁器	古代の掘立柱建物跡、中世の 土壙を発見した。
さんとくいせき 山王遺跡 (第216次)	集落・都市	古代、古墳	溝跡	土師器	
さんとくいせき 山王遺跡 (第217次)	集落・都市				
さんとくいせき 山王遺跡 (第218次)	集落・都市	古代	溝跡、土壙	土師器、須恵器	
いちかわばしいせき 市川橋遺跡 (第98次)	河川	古代	河川跡	土師器、須恵器	古代の河川跡を調査し、土器 や動物遺体を発見した。
あんらくじいせき 安楽寺遺跡 (第2次)	集落		溝跡		
やわたおきいせき 八幡沖遺跡 りんせつち 隣接地	集落				

	新田遺跡第127次調査では、古墳時代後期の堅穴建物を発見した。
	新田遺跡第129次調査では、古代の掘立柱建物跡や溝跡を確認した。
	新田遺跡第130次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第131次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第132次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第133次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	新田遺跡第135次調査では、古代の畠跡や中世の井戸跡を発見した。
	新田遺跡第136次調査では、古代の水田跡や溝跡を発見した。
	新田遺跡第138次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第116次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第117次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第118次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
要約	高崎遺跡第119次調査では、古代の土師器を発見した。
	高崎遺跡第120次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第121次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	高崎遺跡第122次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第208次調査では、古代の溝跡や土壙を発見した。
	山王遺跡第209次調査では、平安時代の南1道路跡を発見した。
	山王遺跡第212次調査では、古代の掘立柱建物跡と中世の井戸跡を発見した。
	山王遺跡第216次調査では、古代の溝跡を発見した。
	山王遺跡第217次調査では、遺構や遺物は発見できなかった。
	山王遺跡第218次調査では、古代の溝跡や土壙を発見した。
	市川橋遺跡第98次調査では、古代の河川跡の底面を発見した。
	安楽寺遺跡第2次調査では、時期不明の溝跡を発見した。
	八幡沖遺跡隣接地の調査では、遺構や遺物は発見できなかった。

多賀城市文化財調査報告書第144集
多賀城市内の遺跡2

—平成31年度ほか発掘調査報告書—

令和2年3月28日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話(022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話(022)368-1141

印刷 笹氣出版印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町8番45号
電話(022)288-5555

